

追憶百年——我が師・我が友

はがきアンケート「記憶に残るエピソード」は

二〇〇名を超える校友から寄せられた。

感動的なもの、ユーモアあふれる手記、貴重な時代証言など

多岐にわたるものを、「追憶百年」として編集し、

できる限り多くの作品を収録するように心がけた。

これらは、あくまで個人の記憶であり、

史実と違う点があるかも知れないが

筆者の「思い出」を尊重し、

そのまま掲載した。

目を通して時代の匂いをかき取っていただければ幸いである。

門・ラップ・柔道

岸田吉兵衛(中18)

当時、学校には立派な正門があったが、先生も生徒もそばにある小さい通用門を使用していた。

授業の始めと終わりを告げるラップの音がいまでも忘れられない。騒いで遊んでいる運動場の隅まで聞こえてきた。

部活動はなかったが、三年生になると柔道と剣道が正課になった。私は柔道の助手の辞令をいただきうれしかったけれどもたいへんであった。今でも辞令を見ると思い出される。

片道八キロ徒歩通学

小高紀重(中19)

提灯下げて家を出る

大正五(一九一六年)四月、入学試験に合格して川島村の自宅から川越中学校へ通学することになった。

片道八キロある。徒歩通学することが当時の中学生の資格のようなものだった。

修学旅行など、早朝出発する時は家を出る

のは夜明け前、時には午前三時ということもあって、提灯を持って暗い夜道を歩いた。その時のスタイルたるやコハゼのついた紺色の脚絆に足袋と草鞋をはいて出かけたものだ。

授業のある日は歩きながら本の下見をして学校へ急いだ。帰りはのんびり友人とその日の授業について話し合っ、復習が出来た。そしてときには、二本松の堤防(府川)まで来て、青空天井の下でヒバリの鳴き声を耳にしながら鐘撞堂の下の福呂屋の菓子を食べ、青春の一時を話し合っ、楽しんでた。

先生の渾名

教師に渾名など失礼なことであるが、どの学校でも必ず何時のまにか上手につけて楽しんでることだと思ふ。我々の時代も盛んにやっただものだ。次に例をあげてみる。

◎馬(漢文)体が大きく、馬の様だった。◎

雁(体操)両手を左右にのぼすと雁が翼を広げているようだった。◎亀さん(習字)本名の鹿女(たろ)太郎よりとった。◎デコンド(代数)次のことばの始めに必ず「で、今度」と云った。◎

ビーンズ(英語)東京外語出身で、鼻の穴が天井を向いていて、豆が入るほど大きかった。

◎ジャンバルジャン(幾何)生徒にせがまれると、授業をやめてフランスの小説ジャンバル

ジャンの話の数回に分けて話してくれた。◎ポーラーベヤー(英語)東京帝大出身で、教室中を右左と行き来して講義する様子が北極熊のようだった。

こんな渾名ばかり今になっても記憶していて、本名はすっかり忘れてしまった。今の私は九四歳。頭に残ってるものは渾名ばかりだ。

あんこ型帽子

小高勝次(中24)

昔の川中生はきちんとした制服制帽姿であった。従ってボタン一つないと、朝礼の際先生からとがめられることが常識であった。

ところが中学二年生の終わり頃から三年生にかけて、いわゆるシャレッツ気が出てくる。そのあらわれが帽子の、頭頂にかかる部分を切り取り、中にマフラーのような軟らかい布をいれてかぶることだった。帽子の上の部分がるまくなつて、アンコ型帽子となり流行の一端であった。

中学三年生ともなれば、学校生活にもなれてきてイタズラも多かった。特に背の低い長谷川先生の授業の際はドアを竹棒で押さえて、先生がはいれなくなしたり、又ドアをあけると

黒板拭が上からおちて白墨の粉が先生の体におちると拍手喝采して喜んでいた。

授業が始まると弁当を出してたべた友人も五人位いたと思う。私の後ろの席にいた友人は先生にみつからないために、私に両肘ははってくれと頼む。勉強どころではなかった。

四年生になった時は、そのいたずら坊主の姿は十人以上姿が見えなくなった。果たして落第か？ はたまた退学か？

チューカンさんのこと

三上好次(中27)

野山忠幹校長先生は天津甘栗に似た丸刈りのおつむをしておられ、それがまたよく似合った。清潔な感じとリゴリズムの生活態度が感じられた、なかなかおしゃれでいらっしやった。洗練の極み、禪僧が洋服姿をしたら斯くもあろうかと思われた。

試験の問題は必ず神武から始めて歴代の天皇のお名前が暗記できているか否かで、問題漏れもなにもない。成績順位を書いた奉書の張り出しが人権無視なぞと騒がれている時代と違うのだ。

野山先生を厳格な方のようにばかり見る人

があるが、しゅつせつ立ちの珍芸がありそのユーモアは口先だけのものでなく、お人柄そのものだった。私は今八八歳になろうとしているが、チューカンさん(ただも)が正しい訓みだが)を思い出すと笑いが止まらなくなる。

朝礼の盛んな頃で、全校生徒が肅然とキャンパスに整列して、チューカンさんをお待ち申しあげていると、わり方小作りの金子道敬さん(こじやう)に扈從こじやうされ綺麗に磨かれた靴の音をたてて野山先生が名優のようにして朝礼台に近寄って来られる時、その季節だったら落葉の音も聞こえたであろう。ああした峻厳な空気をほとんど一人の存在で作りだせたのだから、天才的な教育者とお呼び申し上げてよいであろう。

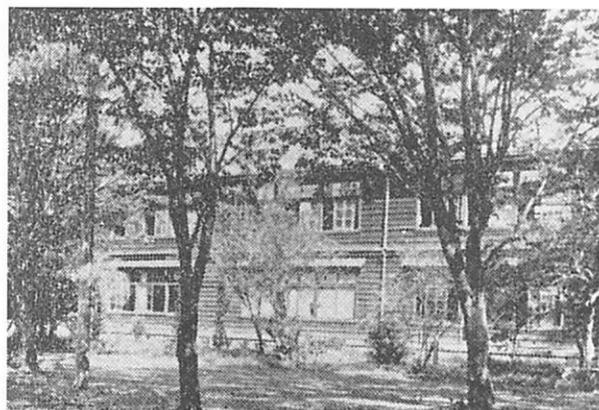
寄宿舎の鳴龍

市川宗貞(中27)

中学四年のとき、修学旅行で日光見物して鳴龍を見てきた。どういう心境だったか今でも思い出せないが、寄宿舎二階の天井に墨筆で約三米位の下手な鳴龍を描いた。翌日舎監にこっぴどく怒られ、退舎だと言われたが、まあまあだった。卒業後、市川先輩は度胸が

あったとか、よくあんな絵を描いたとかひやかされた。

数年後寄宿舎は廃止され、取り払われてしまった。



寄宿舎風景

飯田先生と甲子園

関谷俊雄(中27)

わたしたち二七回生は大正十三年の入学で入学して間もない五月二五日に創立二十五周年の記念式典が行われた。またこの年は甲子

園の野球場のできた年でもあった。

今、母校の校庭に胸像のある飯田先生の国語の時間に授業が始まるや否や、誰かが「先生！ 甲子園の野球は……」と言い出すと、にっこりした先生、「そりゃ甲子園はすばらしいよ……」と話し出して一時間野球談で終わることもあった。

先生の国語の授業はすばらしく、米寿を迎えた今でも私の脳裏に焼き付いている。

思い出の先生

宮原祥一(中30)

私が入学したのは昭和二年。日露戦争生き残りの小松中尉(あだ名は万年中尉)がいて軍事教練が盛んであった。斥候の動作、分隊長など順番にやらされ皆の前で恥をかいた。野外演習に出た時、大いに気分は発散したが畠の作物を踏み荒らしお百姓さんから大いに怒られた。

冬期はストーブもなく暖をとるためあばれ床板を踏み抜き、松岡教頭(あだ名は松つつあん)に大いに怒られた。

温厚な国語の先生飯田先生は野球部を育て上げ、遂に甲子園に出場の荣誉を得た。自分



飯田亮先生

の子のいない飯田先生は生徒を我が子のように可愛がり慕われた。

漢文学の泰斗、村本楠太郎先生(あだ名馬さん)の授業は中国文学に深い造詣をもっている先生の印象が残っている。五年の時詩吟を教えてくれた。

当時東上線は汽車が煙をあげて走っていた。懐かしい思い出である。

師弟の情

山崎豊弘(中35)

川中時代の思い出で、第一に思い出すのは先生方の「あだ名」です。橋本先生の「トンカチ」小川先生の「河馬さん」長谷川先生の「貞ちゃん」原山先生の「あんちゃん」浅野先生の「辯ちゃん」小松先生の「万年中尉」

等、これ等の先生方の授業は、厳しさの中になごやかな、やさしい雰囲気があり、実に師弟の親愛の情があふれ、授業が楽しかった。見事によく的中したあだ名を先輩諸兄はつけたものだと、卒業後六十年もたった今でも懐かしく先生方の面影が臉に浮かびます。

その中で、放課後必ず野球部の練習を見守り、監督されていた飯田先生には、あだ名がなかったと思います。我々悪童にあだ名をつけるスキを与えない風格の方と尊敬しています。

兄弟で教師と生徒

忍田正義(中29)

私の兄豊彦は、私が二年生の時、数学の教師として当校に着任し、二年生の代数の担任となった。親子で師弟の関係にあったケースは、当時当校でも数組あったが、兄弟で師弟となった例は全くなかった。私も戸惑ったが、兄も戸惑ったことと思います。

当時兄は私とは別居していたが、親孝行の兄は毎日曜日、両親を見舞うため私の家を訪れたので私との会話もあったが数学のことに一切触れなかった。しかし私の卒業後は私



忍田豊作先生

の進学、就職、結婚など親代わりとなつて心配してくれたよい兄であつた。

オシテンのはダアーダ

半田 登(高3)

川中に入學した昭和二十年、数学は忍田先生だつた。鼻高で温厚な人柄、とびきり文字の上手な先生で一字一字をきちんと板書、フリーハンドで大きな円図形を書かれるのが得意だつた。生意気盛りの生徒だが、先生の文字の特徴を真似ては丁寧にもノートする雰囲気があり、楽しい授業だつた。

その年、太平洋戦争は敗戦に近く、数学の授業中にも空襲を受け、屋根のない校庭の防空壕へと避難をした。爆弾、高射砲の炸裂音に壕の入り口の忍田先生が、ピクッと体を震

わせ身を引く。押された奥の方から「オシテンのはダアーダ」と先生の愛称と口癖を真似たワルガキの声。一瞬、怖さを忘れた笑いの過が流れ、緊張がやわらぐ。
五十年余も遠い中学一年時代の想い出である。

「白寿会」の時代

松下雄一(中29)

晩年を迎え、東京に戻つてからは在京初雁会や同期の白寿会で川越を訪ねる機会を得、母校正門わきの楠の巨木に年の経過を実感しました。

木造二階建ての校舎に陛下の行在所のあったこと、勇ましいラッパの合図で授業が行われたこと、小銃を担いで行つた教練や寒稽古の剣道、そして恩師の面影を思い出しました。
胡春と号し、琵琶歌を作詞され、野球に熱心だつた飯田先生、ジェスチャーを交えてアクセントを強調された松岡先生、声高らかに漢詩を吟じられた村本先生など印象深く、白寿会には晩年の前田、坂戸両先生が出席して下さいました。

五年間仲良く過ごした旧友、その中には若

くして病魔に倒れた人、日華事変の犠牲になつた人(陸上短距離選手でオリンピックに出場した鈴木聞多君もその一人)が多く残念です。船舶工学を学び、造船所に勤務、その後も船と無縁でなかつた生涯を思うとき、階段教室で学んだ物理、特にアルキメデスのエピソードに非常に感銘を受けたのが一つの機縁であつたように思います。

残念だつたのは五年の修学旅行の関西方面が、浜口内閣の緊縮政策の煽りを受け、とりやめになつてしまつたことです。短編小説で興味を覚えていた芥川龍之介の自殺にショックを受けたのは二年生の頃だつたと思います。白寿会員が年ごとに減つていくのも致し方ないことで、今年は私も体調不良で欠席してしまいました。

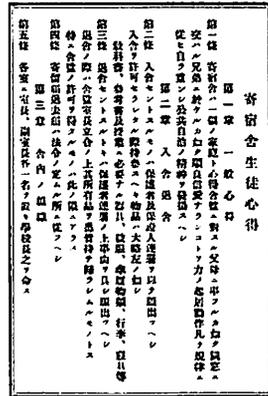
最後の寮生活

野澤(野村)勝三郎(中30)

三年間の寮生活では上級生のふとんの上で下ろしや夕食後の勉強、点呼消灯の厳守、剣道の寒稽古等、規律正しい生活に当初は戸惑いを感じました。やがて、結構要領をおぼえてこつそり外出したり、外食したりしてお互

いに助け合いながら楽しんだ当時を今もなつかしく思い出しております。

川中時代の寮生活が私の人間形成に如何に大切であったかと、今でも痛感致しております。



寄宿舎生徒心得

演習と喧嘩

野上完一(中30)

昭和五年、私が中学四年の秋の一日、在京の軍隊が秋季演習を市立商業学校の裏から天神様の裏にかけて展開し、勇ましい撃ち合いを始めた。私達も昼休みを利用して見物に行つたが、その時、川越高女の生徒たちも先生に引率されて見物にきていた。

私達は午後の授業が始まるので帰校したが、ただ一人小野沢武雄君だけが帰って来ない。皆で気をもんでいたら先生の来られる直前に

教室へ飛び込んできた。私達は机の蓋をバタバタさせて彼をひやかした、と同時にO先生が入って来られ、少し遅れたために自分がひやかされたものと勘違いされて顔色を青くして怒りだした。

誰も何とも言わないのでますます激しく怒りだし、「お前等は卑怯だ」などと言ひ出される。おせっかいにも私は立ち上がって理由を説明したが、少しく言い過ぎもあつて先生と口論となり、先生は怒つたまま職員室へ帰ってしまった。組長の岡田芳之助君が迎えに行つて何とかおさまつたが、今にして思えば先生にすまなかつた。

散々な講演会

仲 知之(中31)

川中の玄関の玉砂利を敷いた典雅な車回しの南側に篠竹の広い藪があつたが、これをつぶして講堂が出来たのが昭和五年頃であつたと思ふ。

当時の世の中には講堂とか公会堂とかいった建物はなかつたわびしい時代で、中学に講堂が建つというので、新聞も大きくとりあげて程であつた。さてできてみると確かに外観

は田舎には稀な立派なものであり、内装も見たこともない床板(チーク材か)で張られたすばらしいものであつたが、天井の低い細長の構造のためか、音響効果が悪く、弁者の声が四方八方に跳ね返り大変聞き取りにくい失敗ものであつた。

ある時、郷土(松山?)出身の陸軍中将が時局講演のため来校され、全校生が先生と共にここに集められた。演者は太った丈夫(じょうぶ)で野戦で鍛えた大声での話(当時スピーカーはなし)なので、声がわんわんわかれて何を言っているのか分からない。特に後方の連中は分からない程度が高く、次第に厭きも手伝い身体を動かす者、私語を交わす者がでるということにざわざわしてきた。

弁者はこの空気を察知してか声を強めて弁じ立てる。何分三軍も叱咤するほどの語勢であるから益々聞き取れない。部屋の空気は沸き上がった感じで、とうとう弁者は怒りだしてしまった。陪席の先生方は立ち上がる、教練の名物中尉は後の方にとんでくるといった事態になつてしまった。

そして弁者は、「こんな質の悪い生徒の前では云々……」といった叱言をもつて話もそこそこに終わってしまった。

演者、先生、生徒いずれにも何とも後味の

悪い会となつてしまった。

これは春秋の筆法を持ち出す迄もなく、すべて建物の構造ミスがもたらしたものだといえる。当時のレベルとするとノウハウの蓄積はほとんどなかったらしい。精一杯の構造技術で建てられたに違いないが、六十数年後の今日から振り返ると何ともお粗末なものであった。



講堂の内部

ラッパの響き

山口 登(中31)

朝、朝礼を告げるラッパの音、校舎にこだまする昼食ラッパ、私の川越中学の生活は小使さん(と思ふ)が中庭で吹くラッパの音で始

まった。

卒業式の日、約四キロの砂利道を歩いて(自転車は許可されていなかった)通いとおした五年間の皆勤賞、一年間を通じ成績の向上が顕著であるということで頂いた向上賞、その記念品は大事にしまつてあるが、この二つの賞の中にはラッパの音と共に川中精神ともいうものが五年間の生活を経て知らない中に培われていたのだと思ふ。

あのラッパの音は郷愁にも似た私の青春の思い出でもあり、六十数年経た今日、今なお聞こえてくる。

川中風俗

山田 辰(中32)

現在の川高には制服が無いが、私が入学した昭和四年当時は夏の制服がありました。冬服は黒の小倉木綿の詰襟で金ボタン、夏服は空色の霜降り模様でした。小学校時代に和服に下駄履きで通学した私どもにとっては川中入学は文字通り新しい気分でした。

当時のハイカラ者には裾が広がった所謂ラッパズボンが流行でした。帽子は上面に油を塗ってピカピカさせ、得意になっていたよ

うでした。私のクラスにもハイカラさんが居て、私どもはモボ(モタンボーイ)と呼んでいました。

彼は後に大学教授になり、母校の同窓会長にもなりました。人生、学生時代とは変わるものですね。

臨海学校

石田 実(中32)

毎年夏休みへ入るとすぐ、十日間ずつ千葉県岩井海岸で希望者の臨海学校を開いた。

「水泳部」と称していた。

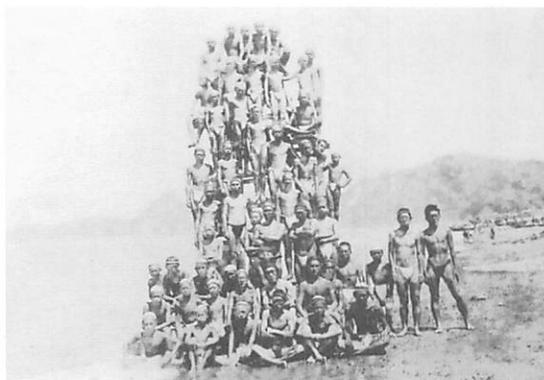
五級から一級まであり、帽子によつて差別していた。二回位進級試験があり、指導の先生の前で泳いで「泳法」を受け、三十分、一時間、二時間、三時間と遠泳して、それに合格しないと進級をしなかった。だから一級などになるのは大変だった。

教練の小松、体操の前田、化学の原山、この三先生が毎年の指導教官だった。

一日だけ自由行動の日があり、岩井の富山や保田の鋸山に登った。楽しかった。

私は昭和五年から八年まで続けて四回参加した。一緒に行った友達は、大方もう故人と

なっている。



臨海学校での記念撮影

弁当二題

関根欣幸(中35)

今から六十年以上前、昭和七年から五年間、当時の所沢町から西武鉄道で川越まで通学した思い出を書いてみたい。

私が川越中学、姉と妹が川越女学校。二両編成の電車は前が中学生、後が女学生と完全に分離していて、行き来出来なかった。

ある日、朝食もそこそこに三人は別々に家



当時の西武線本川越駅

を出た。一足先に出た妹が大事な弁当を忘れ、私が追いかけたが間に合わず、電車に乗ってから渡すはめになり、女学生の車両に入った途端、ひやかされたり、好奇の目で見られたり、冷や汗と顔を赤らめたことを覚えている。昔は純情だったなあ。

冬、小寒から大寒にかけての剣道部の寒稽古はつらかった。

まだ真つ暗な四時過ぎに起床、前夜に作ってもらった二つの弁当を持ち、霜や氷を踏んで一番列車で川越へ。寒々とした講堂の床に正座し、前田先生の注意を聞いた後、一時間

半の猛稽古、寒中でも汗ビッシヨリ、終わって朝食の弁当を開くと母の心のこもった弁当も冷えてコチコチ、箸をつきさして食べた。よく毎年二週間頑張ったものだ。

恩師の温顔

宮原和夫(中36)

私たちは、昭和八年入学、十三年卒業で、一五〇名入学、一三三名卒業であった。入学して気づいたことは、素晴らしい先生方の集団で、多士済々の人材に教えていただいた幸福者であるということだ。

校長は、大谷、木原の両先生。教頭は「おぼけ」の松岡先生、いつもボサボサの髪であった。数学は「かばさん」の小川先生、「ていさん」こと長谷川先生と、恐くて追及の手をゆるめない「はぶさん」の葛宗先生。物理の保泉先生はよく頭を掻いていたので「ぼりさん」。兄貴のように優しい「あんちゃん」はアンチモンとのかけことは、化学の原山先生。剣道の間中先生は鹿太郎の名前から「鹿ちゃん」、「まんちゅうさん」は万年中尉の小松先生。英語は、何かというところぐちちゃんと台に上る「ちよんすけ」鈴木先生と、授業

中「もちろん」を連発する「もち」の平野先生。

担任は、人間が堅い博物の「トンカチ」橋本先生。国語の「べんちゃん」は弁舌さわやか活動弁士のような浅野光良先生。同じく国語の「はっちゃん」浅野八郎先生でした。

懐かしいあだ名と一緒に恩師の方々の温顔が浮かんで参ります。

あんちゃんとの合宿

石井 晃(中36)

一年生から卒業までバスケット部に所属、部長は化学の原山先生。通称「あんちゃん」の指導のもと、毎年夏合宿は飯能の河原にある昔の船宿を借りて、自炊しながら飯能第一尋常高等小学校の校庭にあるアウトドアコートで十日間位していたのである。

炊事当番は一年生の担当で、ご飯を炊いたり味噌汁を作ったり、忙しい毎日を送っていた。

ある時あんちゃん先生が一日こられて自ら味噌汁を作ってくれたのはよいのだが、買ってきた一貫目の味噌を全部使ってしまった辛くて飲めなかった。また、一年生が釜の底に

大きなタワシを残したままご飯を炊いて、皆食事し終わった頃にタワシが出てきたり、今は亡き先生、後輩の思い出なり。

ストライキ

高橋祐吉(中37)

敗戦前の日本が満州事変、日支事変、太平洋戦争へと一直線に突き進んでいた昭和九年四月、私はさまざまな希望を持って母校川越中学に入學した。

一年生の秋のある日、突然に五年生の一部の人たちが校舎の窓から寝具や食料等を搬入し、学校に立てこもって、大谷校長排斥のストライキを決行した。

私達一年生には、この事件の原因、背景も知ることができず、一週間に互る逼迫した期間をただ呆然と過ごした。

当時、軍国主義下の思想弾圧下でこのようなストライキが決行された事実、これはおそらく日本の教育機関では初めての事態であったと思う。

川越中学の一生徒として絶対に忘れることのできない事件であった。

霜降りる頃

井関孝次郎(中38)

霜降りる頃になるといつも思い出します。取り入れの終わった田圃に夜間行軍、払暁戦と人間川を挟んで県下の中学校の軍事教練が行われたことを。

中学四年生、五年生編成の川中の部隊は小松教官(万中さん)に引率され夕映えの中を飯能方面より出発、夜十一時頃まで歩いて近くの農家に泊めていただき、翌朝真っ暗なうち



連合演習を視察する朝香宮

に起こされ、庭につくられた大きな鍋にぐらぐらと煮えたけんちん汁をご馳走になった。どの顔も焚き火の明かりに真っ赤にみえ、誇らしげにほほえんでいた。汁のあたたかさや農家の方々の心温まるぬくもりは今も忘れられません。

そして霜に冷えきった三八銃を握って払暁戦へと駆け出して行った、身のしまるような初冬の朝。それから半世紀、忘れ難き川中生活のひとこまです。

ねずみの同級生

新井達雄(中39)

昼休みが終わって五時間目。そろそろ眠気がくる時間。ふと隣の席のT君がしきりに目配せする。お互いチビだったから教壇は目の前の最前列。見ると、教壇のそばの屑箱からこぼれた、誰かが捨てたパン屑を一匹のねずみが出てきて喰っている。思わず顔を見合わせた。教室の隅の床板が傷んでいて、そこから一階の天井裏は覗けたが、彼の出入り口はそこだった。

まだ三年生だったいたずら好き。次の日からわざと屑箱の周りにパン屑をまいて、彼の

ご入来をたのしんだ。さすがに川中に住むねずみ、授業中にしか現れなかった。嫌いな授業の時ほど随分心をなごませてくれた。いくなればもう一人の同級生がいたのである。

古びた木造の校舎だったが、それ故にこそ長い伝統につちかわれた風格。その象徴は、生徒の出入りは許されなかった表玄関だろう。その姿こそ私たちの誇りでもあった。やはり同窓の原田定吉君は軽快なタッチでそれを描き、校友会誌の表紙をかざったが、この年になってもその威容は鮮やかに浮かぶ。

ちなみに私もT君も大正三年甲子生まれ。干支はねずみである。



原田定吉が描いた表紙

滲み出る優しさ

田地廣之(中39)

私たちの在学当時はご存じの通りの時代で

建前としての学校の指導方針は心を塞ぐ以外の何物でもなく、それでも今から考えれば立派に反面教師の役を演じてくれたように思われます。併し、個々の先生方は殆どが心優しいりべラルな方々であつたように想い出されます。

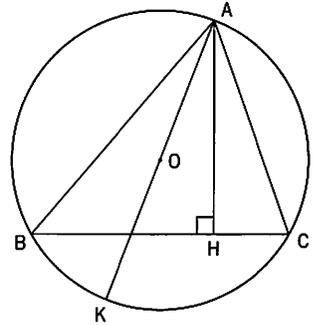
優しさが裏から滲み出ているような怖い顔で「バカじゃだめだよ」と何度も叱られた数学の古武士のような長谷川貞平先生の顔など、今もありありと浮かんで来ます。奉安殿というか御座所のような赤い絨毯の敷きつめられた天皇閣わりの室で悪ふざけをしたことがありました。それを何とかごまかし救って下さった若い先生もおられました。

長谷川貞平先生と都々逸

門平 浩(中43)

「聞いてお帰り二辺の積はいつも垂線直径の積よ」……これは昭和二十一年度旧制松本高校の受験会場で数学の答案用紙を前にして私が想起した一節です。

おかげで軍閥系の学校からの受験合格者一割制限の垣をクリアできました。生涯忘れられない都々逸です。



O : $\triangle ABC$ の外接円の中心
 AK : $\triangle ABC$ の外接円の直径
 H : 頂点 A から辺 BC に下ろした垂線の足
 このとき
 $AB \cdot AC = AH \cdot AK$
 が成り立つ。

空き巣泥棒

福田卓司(中40)

昼休み、配属将校(教官)が剣道部の部室等を覗いていた。それを見た級友の誰かが「空き巣泥棒」と言ったのを聞きつけたらしい。

午後一時より我等四年生約一五〇名は教練(軍事訓練)の時間、ゲートルに三八式歩兵銃を持って整列。教官に敬礼。教官が「空き巣泥棒」と云った者、出る」と言う。

勿論誰も出ないし、知っていても出さない。一時間〜二時間「気をつけ」の不動の姿勢。教官は軍刀を引きずりながら列の間を歩む。不動の姿勢が少しでも崩れる者があれば軍刀が腕や腰に容赦なくヒシ！とくる。

寒い。誰か手を挙げ「便所へ行ってよい

ですか」。教官は「馬鹿者！不動の姿勢とは何か……」。許可どころか、軍刀の大きなお見舞い。

校長や主任の先生が時折出て来て交渉し、又謝っているようであったが、「休め！」の号令がかかり片足だけでも前へ出させたのは薄暗くなってからであった。

「空き巣」の一言が軍人の威厳にかかわったのであろう、解散までに四時間以上はたっていた。

三光町の罫髷首

山口 茂(中40)

川中四十回は昭和十二年四月入学、卒業は昭和十七年三月である。演歌に「私の人生暗かった」という唄があるが、四十回は十二年支那事変が始まり、大東亜戦争(太平洋戦争)へと戦火は拡大し、二十年八月十五日に終戦を見た。悲惨な暗い青春時代とも言える。

しかしながら何故か川中四十回は結構底辺には自由主義の思想があり戦時下でも楽しい思い出が多く残っている。食糧事情は刻々と悪化の道をたどり、衣料も切符制となり国民がかつて経験したことのない軍事統制下

での生活を余儀なくされていた。

川中からは陸士、海兵と成績優秀な生徒が進学し同窓生より羨望の目で見送られたものだ。三八、三九、四十、四十一回生あたりに物故会員が多く見られるが、その中に戦死者が相当含まれている。勤労動員という国の命令で学業半ばにして軍需工場へかり出されたのは四十一回以降であったと思う。われわれ四十回までは修学旅行も行われ、京都、奈良方面の旅は今も青春の思い出の一頁である。

食糧難は急激な深刻さを増し授業は午前中のみ、午後はじやがいも作りの為にあてられた事もしばしばであった。荒川流域まで軍事訓練と称して出かけたものである。

じやがいも作りと言えば思い出がある。

三光町はその頃、堤防のように高く鬱蒼とした草叢であった。そこをじやがいも畑として開墾することになり農具で掘り起こしてみたら、なんと罫髷首がごろごろと出てきて大騒ぎとなった。それにしても罫髷首が数十個ならべられた場面はぞつとする思いであった。まるで江戸時代の首切りの場面が想像できるではないか。

作業引率者の先生は岡田幹雄先生といい、誠に温和な先生であった。岡田先生が、「こ

くるかもしれないなあ」と笑っていたのが今でも印象に残っている。育ったジャガイモはその後どう処分されたか不明である。

平手打ち

宇佐美昭十郎(中44)

一年生で最初の「園芸」の時間だった。農具倉前に整列して立っている時、隣の某君と「園芸ってどんな時間なんだろう」などとソコソコ話をしてしていると、突然右頬に平手打ちを受けたのだ。ハッと驚いて前を見ると、小柄な先生が踵を上げて物も言わず立っていた。その人こそ岡田幹雄先生だった。

私は「園芸」とは「平手打ち」の時間と自己解釈したが、その後は街中に野菜類を売り出す掛けるという楽しい時間の想い出もある。

相撲部のこと

田口健次郎(中41)

私が川中に入学した時は戦時色が少しずつ濃くなってきてはいたが、学生服に白線を付けた学生帽、ゲートル巻きというスタイルで

あった。

川中時代は授業が終わると、二年生の時から相撲部に入っていたので毎日稽古。当時は通用門の脇に土俵ができていて、寒中、雪の降る中、褌ひとつで稽古していました。時々飯能出身のプロの力士、武錦、武昇という兄弟力士が来て胸をかしてくれました。我々も怪我をしないようにとつた思いがあります。現在の川高には、相撲部も土俵もないようですね。



相撲部県大会優勝時の賞状

「北の谷」に集まれ!

滝嶋壮三(中41)

登下校時、先生や上級生と出会ったときは拳手の敬礼(欠礼すると「お説教」)。

正門は隊列を組んだときのみ、「歩調とれ!」の号令で足並みを揃えて出入り。通学には専ら北寄りの通用門を使用した。

一、二年生にとって、ひげの生えた五年生は「おじさん」のように見え、こわいこわい存在だった。時々教室の黒板に「〇〇五甲(五年甲組)へ来い」と書かれてふるえ上がった。先輩の目に留まった後輩の「問題行動」を正す指導のための呼び出しだった。さんざん「お説教」でしほられ、時には「鉄拳」もとんだ。

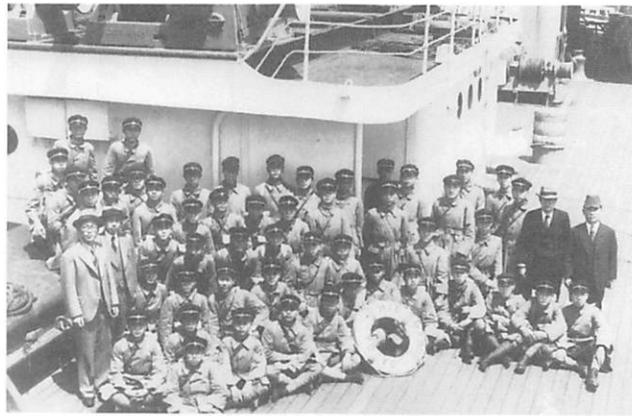
折々下校時に通用門のところに小黒板が出され「二年生全員北の谷に集まれ」と書かれていた。運動部の北側にわずかに残っていた川越城の堀の跡が「北の谷」と呼ばれ、集団への「お説教」の会場としても使われた。五年生の何人かが「指導」したり「アジ」ったりした。

豪華客船の参宮旅行

富田喜内(中41)

一番の思い出は船での関西旅行です。出発前に豪華客船でのマナーなどを牧野先生からたっぷり聞き、楽しい夢を描きました。日枝丸だったと思います。船中で一夜を過ごし、

神戸でおり、湊川神社へ参拝、奈良の春日神社参拝、さらに伊勢神宮を参拝して、汽車で帰った旅でしたが、いまでも船に乗って旅をしたいと思うほど強烈な思い出になっております。



日枝丸のデッキで記念撮影

軍服姿の卒業式

田中康富(中42)

昭和十四年入学以来十九年卒業の五年間

は編み上げの靴に巻脚絆(ゲートル)、カーキ色の服に背のうカバンで登下校。上級生に会えば敬礼し、欠礼などすればその場でビンタをもらう光景はあちこちでみられた。日常街へ出歩くときも同様で、軍隊近似の中学生時代でした。でも、我々はごく当たりまえの事と思っていました。唯早く五年生になりたいと……。

昭和十六年(中学三年の時)、丁度正午近い頃と思いますが、校内で臨時ニュースがあり、「未明米英と戦闘状態に入れり」との報を聞き、それからの学校生活は一層の厳しい規律となり、通用門には五年生が腕章をつけ、銃剣をかまえて登校状態を観察。奉安殿前を通過する時は不動の姿勢で敬礼し教室へ。放課後の清掃は念入りに行い、五年生は靴をはいたまま巡検。よくやりなおしをさせられた。私は昭和十八年秋(二学期中)の頃、海軍省水路部を受験し軍関係に入り、十九年の卒業の時、一日外出許可を得て本校の卒業式に軍服姿でのぞんだ。

このことは後にも先にも例のない事象であると思います。この年になっていまだに鮮明に憶えている。

軽井沢廠舎訓練

新井照三(中43)

戦時中の中学で勉強した者にとって、とにかく忘れられないのは軍事教練であり、中でも四年生の秋に課せられた軽井沢の廠舎訓練は過酷といって間違いないかった。

我々が四年になった昭和十八年、既に戦争は敗色濃厚となっており、我々が戦場に駆り出される可能性が大きくなっていったから、軽井沢訓練の条件も厳しさがまじっていた。

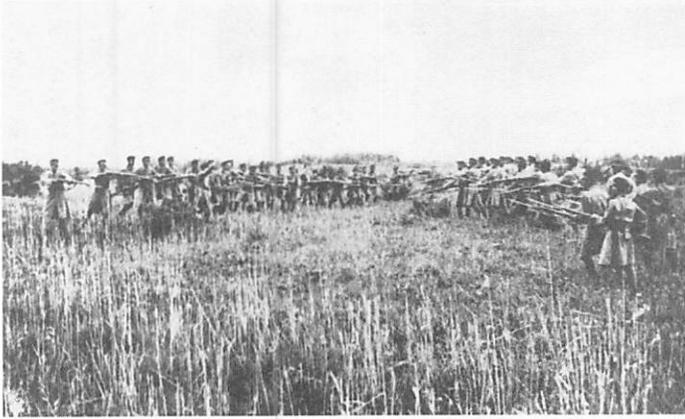
川越を出発して大宮を経て、群馬県の下仁田で列車を降り、そこから軽井沢まで夜行軍をすることから始まった。三八式の歩兵銃をかつぎ、身長の大い者は軽機関銃をかついで徹夜で山道を行軍するのだから、平和な世の中から見たら実にバカげた話である。

翌日から毎日演習があつて、一週間ぐらい廠舎に宿泊し、終わりに近づいた頃にはたいの者がウンザリしていた。最終日程は部隊による演習で、学年全員が紅白の二組に分かれて教官に率いられ、軽井沢の野原に散開して、最終的には両軍が一線に対峙して突撃し、白兵戦という形で終了した。もちろん白兵戦といつても演習だから、敵が向こうに見

えてくると「着け剣！」の号令があつて、腰にぶら下げていた剣を銃の先に装着しておき、匍匐前進を行つて「突っ込め！」の号令があると、立ち上がつて敵軍目がけて駆けていき、近接したらヤア、ヤアというかけ声と共に銃剣を突き出すこと兩三度、その時笛が鳴つて演習が終わりとなる。

そしてこのとき珍事が起こつた。

笛が鳴つて演習が終わつたトタンにH君が



紅白二組に分かれての白兵戦訓練

急にそわそわしだしたのだ。腰のあたりをふりかえつたり、草むらの中に物をさがすような格好をしたり、とにかくそのあわてようが尋常でなかつた。

そして青い顔をしながら教官の所へ駆けて行つて、「^{さき}挿げ銃」をして言つた。

「教官どの、剣をおとして来てしまいました！」

当時は法で定められた「兵役の義務」にもとづき、満二十歳になつた男性は検査に合格すれば天皇陛下下の軍隊に編入され、武器が支給される。その武器は「陛下より賜つた武器」であつて傷ついたり粗末に扱つてはならず、失くすなどということはトンデモナイことだつた。学校の軍事教練にもその精神が伝わつていたから、学校で教練に使う小銃や剣は中古で使い込まれたものではあつたが、大切に扱うべきものだつた。

それを落としてしまつたのだから、H君があわてるのもムリはなかつた。しかし教官は落ち着いて言つた。

「おまえの銃の先についてるじゃないか」

H君は「突っ込め！」で駆け出したとき、それまで剣を吊つていた腰の軽くなつたのが気になり、ヤア、ヤア！とやったのち腰を見たら剣が見えない、サアどこかに落として

きてしまつた、とあわてたのだつた。実は匍匐前進で腹ばいの姿勢のときに、腰から剣を抜いて銃の先に着けたことを忘れてしまつたのだ。

周囲のみんなは腹をかかえて笑つた。つらい軍事教練の最中には、笑えるようなことは何もなかつた。演習の最後になつて、これで終わりだと思ふ気分の中に、このような珍事が起こつたから、みんな心ゆくばかりに笑えたのだ。

H君にとつてはあまり楽しくない思い出だらうが……。

万中さん語録

福田 博(中4)

旧制中学時代には教科の中に軍事教練があつた。小学校を卒業したまだあどけない童顔をもつた私達を迎えたのは、軍服姿もいかめしい陸軍将校であつた。私達一年生の教官が万中さん(万年中尉、何年経つても昇進しないで中尉のままでいる意)こと、小松國三郎陸軍中尉であつた。彼は二等兵からたたき上げた軍人精神の塊のような軍人で、シベリア出兵にも参加した強者であつた。

万中さんの語録には、私の心の中に焼き付き、今でもよく憶おぼえているものがある。

即ち――

○不動の姿勢は教練基本の姿勢なり、故に精神裡に充実し外敵肅端正ならざるべからず。

○不動の姿勢は不動明王の如し。

○敵を攻撃するときは「倒れてのち止む」の精神であれ。倒れるまでは攻撃の手をゆるめてはならない、倒れるまで前進あるのみだ。

万中さんは教練の度にこれらの言葉を何回も繰り返して教えた。戦局は我が国に利あらず、我々も祖国のために銃を取って戦うのだという覚悟は次第に胸に固まり、軍事教練に熱が入った。その後、私は陸士に入って航空隊に志願した。敗戦となり復員し、今日に至ったが、あの頃のはりつめた精神は今の若者には味わう事が出来ない尊い体験であり、正に我が青春に悔いなし、である。



小松國三郎先生

那須大輔先生

入子祐三(中43)

私が中学四年生(昭和十九年)の時のことである。

戦中だったために軍関係の学校への受験が盛んだった。私もその一人であった。短期高等海員養成所を受験して、合格通知を手にした。早速、担任だった那須先生のところへ報告に行った。「おめでとう。よかったね、よくやった」と、お祝いと励ましの言葉を期待していたが、

「君は短期高等海員養成所へ行くんですか。

君の力に合った学校が他にあると思うんだけど……。」

と、言われ、進学することに賛成しない口振りであった。

当時の状況では、「行くな、やめろ」とは言えなかったのである。先生の言い回しや表情から「死の道を急ぐな、見送った方がいい」と言っていることを察知した私は、即座に入学を断念することにした。

「わかりました、やめます」

と、言って退席したのである。

その後、五年生になり、航空科学専門学校



那須大輔先生

清水高等商船学校、水産講習所に合格、那須先生の期待にこたえることが出来た。そして清水高等商船学校へ入学することになったのである。

那須先生の進路指導のお陰で今の私があるのかな、と思う。オーバーに言えば、フカの餌にならずにすんだ。命の恩人であると思っている。

戦中に於ける軍関係の学校への進路助言は随分難しかったのではないかと思う。私自身教職について、当時の苦渋の選択が理解できるようになり、改めて感謝している。

一万メートル競技会

関谷 昭(中44)

入学した年の十二月八日、「南太平洋に於いて戦闘状態に入れり」の放送があつてから

悪夢の四年間が始まった。特例により四・五年生が一緒に卒業するという。こんなことは百年間で一回のみと思う。

毎年五月二十八日が開校記念日で、その年第一回の一万メートル競技会。正門前から一年、二年、三年、四年、五年生と、久保町の製館屋の前まで道路がいっぱいになる。体育の前田潔先生の大きな旗が振り下ろされるとさあ出発だ。

山田村から落合橋へ、そして土手の上を、宮下町から校門へと……。十六年入学の我々は三回だけしか走れなかった。あとは学徒動員でそれどころではなかった。

一年の時が八十三番。五年に兄がいたが百六十番台だった。兄より速かったことが嬉しかった。二年の時は二十三番。一、二年のときは坂戸の隣村、入西（ひらにし）から来ていた根本が一起であった。三年になり今年こそは十番以内に入るぞと、トレーニングが始まった。

桜が咲き始める頃になると学校の帰り、入間川駅から稲荷山公園駅の間（千八百メートル位かと思う）の砂利道を八分位で走れば前の電車に乗れるので、二、三人の仲間が背囊をしょって走った。時には駅の改札の所で発車してしまったこともあった。その甲斐あって見事三年の時には六着となり、絵の具をい

ただいた。

やれば出来るということを体験した。しかし、これを最後に学徒動員で朝霞の被服廠へと出動した。やはり三年の時も一着は根本義夫君だった。

通用門二題

岡村和夫（中45）

昭和十七年二月頃かと思う。私は川中を受けたが折悪しく四十度の高熱で、当時の市民の足、リンククで通用門を通った。途中倒れて試験を断念、てっきり落第かと覚悟したが何とか入れた。

昭和二十年九月早々、敗戦で名古屋陸軍幼年学校から川中に復校するため通用門を通ろうとしたら、「誰か」の声とともに銃剣が突きつけられた。とっさに「名古屋陸軍幼年学校生徒、岡村和夫、川越中学に復校の手続きに参りました」と申告して通してもらったが、マッカーサーがすでに日本に來ているというのに、首都に近い川越に陸軍の部隊が頑張っているとは夢にも思わなかった。

何百回となく通った通用門だが、この二回の記憶が心に焼き付いている。

野球部おちこぼれの弁

神山（山本）健吉（中47）

終戦によって動員先から学舎に戻った私たちを待ち受けていたのは、粗暴な上級生たちによる「お説教」と称する集团的鉄拳制裁だった。これは徹底抗戦から無条件降伏への急旋回に心揺れていた先輩達のストレス解消の側面を持っていたに違いないと今になって思う。

ちょうどそのころ、各運動部再建のための部員勧誘も始まっていた。どこかの部に所属すると、その部の幹部である先輩から「お説教」の時間も予告してもらえなし、制裁の舞台である教室からの脱出も容易であった。私も難を免れるためにどこの部に入ろうかと思案していた矢先、先輩から熱心な勧誘を受けたこともあって、野球部への入部を決断した。部長は図工の白井先生、主将は飯能の増島さんだった。練習がスタートした当初使用していたボールは軟式だったが、指導には大先輩の山本三郎さんを始め、御嶽さんの伊藤さん、土屋さんなど錚々たるメンバーがあたり。週に数回の頻度だったような気がするが、食糧難の時期だっただけに、練習はスキ

ッ腹にこたえた。

入部したとはいえ、肩は弱く、捕球も覚束なく、打撃もバツとしない私のことだから、もちろんレギュラーのポジションなど得られる訳もなく、二塁手の補欠の更に補欠という地位に甘んじざるを得なかった。

翌昭和二十一年春に戦後初めての県大会（恐らく埼玉県中等野球史上初の軟式野球大会）があり、山川・関の両投手を擁した我がチームは準決勝で熊中に敗れたとはいえ、ベスト4に入った。だが、残念ながら私はもちろんベンチ入りできず、他の枠外の部員と一緒に応援席で校旗を振って応援した。この時の応援のガラの悪さは天下一品で、審判団から警告を受けたくらいだった。硬式野球に変わったのはこの大会終了後のことだったろう。練習の際にバットを持つ手が大いにしびれ、軟式との違いを実感したものだ。

その年の夏の大会では、一回戦にはコールド勝ちしたものの、二回戦では相手校（確か浦中だったような気がする）にコールド負けした。二回戦まで進みながら合計十四イニングしか戦わないというのも珍しいと妙な話題になった。この大会中にOBから歌詞カードを渡され大宮球場で歌ったのが、高校二期の記念文集にも収録されている「昔古城の楠

に」で始まる応援歌だった。

これは学校が制定したオフィシャルなものではなく、私家版的なものだったが、五十年を過ぎた今でも歌詞の一言半句たりとも（但し、一番だけが）私の脳裏から離れないほど、すこぶる格調の高いものだった。作詞は当時一年生の新井利一さん（中44回）だというのがさだかではない。また曲の方はどこぞの高校（もちろん旧制）の寮歌からの借り物とも言われているが、なかなかの名曲だ。

この夏の大会終了直後、己の才能に遅ればせながら見切りをつけ、私は遂に退部した。まさに一年たらずのはかない部員生活だったことになる。

水泳部創設期

吉野忠男（中48）

川中二年生の時、昭和二十年八月十五日の玉音放送を学徒勤労動員中（昭和二十年一月～八月十五日）に上福岡の軍需工場・火工廠の広場で聞く。複雑な気持ちであった。終戦である。そして戦後の学生生活が、それまでとは一変して、二学期からは毎日通学する本来の中等学校生活にもどったのである。

翌年、昭和二十一年春、水泳を得意とする有志が集まり、学校へ申し出て水泳部を結成したのである。四年生・三年生・二年生合計二十名弱であったと思う。

しかし、学校にはプールはない。が、質実剛健川中魂の意気込みをもって、練習場の確保に苦慮しているときに、好意的な会社のご配慮によって、川越駅西方のサントク工業という機械工場の冷却用水用のプール（二十五メートル）を借用することができ、毎日放課後練習に通ったものである。又、夏休みには松山第一小学校の裁縫室を借り合宿し、県立松山中学のプールで松中水泳部と合同練習をしたこともあった。

県中学校水泳大会に三年次・四年次・五年次と出場したことも思い出として残っている。

先輩の壮行式

赤田健一（中48）

岡村さんの挨拶

戦時中、朝霞の被服廠に動員されていた昭和二十年春、連日空襲されていた頃、五年生の岡村が一先輩に召集令が来しました。朝礼の後、恒例によって壮行式が行われましたが、

あいさつに立った岡村さんは、「明日から軍隊に入ると、何も言えなくなるので、日頃の考えを申し述べます。自由がないところに個人の幸福はなく、国民の幸福がない国家に繁栄はないのであります……」と名調子でぶつたのです。

二年生の私たちは難しい理論は分かりませんでした。日頃の学校の軍国教育とは正反對のことを言っておられるのは分かって、驚きました。壮行の辞のM先生は、さすがに苦い顔で、「考え方の方向はともかくとして、これだけしっかり考えをまとめていることは立派です」と妙なほめ方をしたのを覚えています。

松田蘭風先生

通年動員先の被服廠は、陸軍の施設なので主計将校の管理下に軍属が運営に当たっていました。稀に配属される見習士官のなかには権力を笠に威張る人がありました。その中の一人が殊に横暴なので、我慢しきれなくなつたか、上級生の一部が作業をサポート、迷路のように掘り巡らされている防空壕の中に逃げ込んでしまったことがあります。

見習士官は怒つたがらちがあかず、学生班の職員室に怒鳴り込んできました。軍の権威

をひけらかして激昂する士官に、松田蘭風先生が「人は権威だけで動くものではない」とお得意の論語を引用して説得した効あつてか、やがて静かに引き揚げ、翌日からは威張らなくなつたとききました。

富士の裾野の軍事訓練

石井勝己(高2)

入学した昭和十九年は第二次世界大戦の真っただ中であつた。入学一週間後には富士の裾野の楽山荘に合宿し大野中尉(もと)の下で軍事教練を受け、ゲートルを巻くことから教えられた。先輩の吹く起床喇叭で起こされたが、たまたま喇叭手が病気になる。「貴様らがたるんでいるからだ」と理由のわからぬまま上級生に殴られた。

秋には上福岡の火工廠で地雷の信管を作る作業があり、授業は週に一日のみとなつた。火薬を包埋する黄色セメントを練るのにグリセリンを使っていたが甘いので、浣腸薬とは知らずに舐めた。杓間が行われた日は寒くて敬礼する手がかじかんで伸びない。先生が擦って伸びるようにしてくれたのは心温まる想い出である。戦うための教育を受けていたの

で、敗戦時のショックは大きかった。

終戦後一時休みとなつた学校も再開したが、教科書は所々墨で塗り潰して使つた。戦後食糧は不足し、種々なものを食べ、飢えを凌いだ。受験勉強の頃となつたが四修で旧制高校に入った者以外は新制高校の発足により高校二年生に編入された。選択授業では農業を選び、畠を等分してそれぞれ好きな作物を作るなど比較的自由に過ごした。

卒業年次には修学旅行も出来るようになり、一緒に過ごした仲間との想い出は尽きず、今も親しくお付き合いをしている。

疎開組と異装願

岡部延夫(中48)

一九四四(昭和一九)年二月の東京大空襲で被災し、一家四人、入間川の親戚の家へ転がり込んだ。二年生になつてから、当時の都立三中(現両国高校)から転入した。二年五組である。

この組は約五十名全員が転校生で「疎開組」と呼ばれた。学校側も急増する転校生の処置に頭を悩ませたことだろう。

「疎開組」の大部分は戦災を避けて移住した

ものようだが、こちらは無一物、無一文の焼け出されである。着るもの、履くものはずべてありあわせで、「異装願」が常であった。「異装願」といつても知る人は少ないだろうが、敗戦後も暫くの間は、学校で認めた正規の服装以外で通学する者は、必ず「異装許可証」が必要だった。

徳さんの授業

河野勝巳(高2)

国語への関心が強かったせいも、島崎佐々木(信)、松田、佐藤先生方の印象が強く残っている。就中、佐藤徳四郎先生(徳さん)の漢文、『論語集註』に泣かされたものは一人だけではないはずだ。語釈も漢文、全ページ漢字だけの羅列、参考書はなし、辞書だけでは解決できない。予習を怠ればゴツン。でも、たまの脱線授業は楽しかった。唐の詩人李白の飲酒法、「日本一のエロ本だぞ」と『源氏物語』の紹介。そんなとき先生の吐く息は少しアルコール臭がしたっけ。そしてこの私は現在でも中・高校生に古文漢文を教える身となっている。今や先生は鬼籍の人……噫！

徳さんの紹介状

鈴木加六(高2)

在学中、映画・演芸部に所属しており、活動の一つとして撮影所見学を計画していましたが、交渉窓口がなく、困っておりましたところ、担任の佐藤徳四郎先生(生徒は徳さんと呼んでおりました)の紹介状を持って、当時大スターの歌手霧島昇、松原操夫妻を田園調布のお宅へ友人二人と共に訪ね、恐る恐る勝手口から入り、撮影所見学の件をお願いしたことがあります。当時の食糧事情も考え、手土産は川越名産さつま芋でした。なお、霧島夫妻のどちらかが、佐藤先生の



ニューフェイスと撮影所で記念撮影

小学校勤務の時代の教え子だったと伺っております。後日撮影所見学も実現し「青い山脈」の出演者、杉葉子、若山セツ子、久我美子等の女優さんとお話しできたのが印象に残っております。

万年筆池

松岡章次(高3)

昭和二十三年から二十六年にかけて、上級生が校舎二階から下の池に飛び降りてみせるというパフォーマンスがあり、年中行事となっておりました。

この池は、佐藤徳四郎先生が、授業中イタズラをしていた生徒の万年筆を取り上げ、逆上して窓から池ポチャをやり、弁償できなくてハダカになられて池の底をさらわれたというエピソードのある池で、それ以来「万年筆池」と呼ばれるようになっていました。

トクサン

桃井良之(高3)

トクサンが教えて下さったことで、当時は

正しかったであろうが、最近では妥当でなくなっただと思われることが一つある。

そろそろ色気付き始めた我々に、先生は、「女性はおけやすい、だからかなり年少の女性が伴侶としてはふさわしい。お前達の結婚の対象は、今、小学生位だ。だから、女性に関心を持つのは未だ早い。勉強しろ！」と言われた。女性の平均寿命が延び、環境が変わった現代では通用しないのではないか。もっとも中学・高校時代は学業優先であるべきこととは不変か。

オミクジ

小川悦弘(高6)

名物先生と言えば、漢文の佐藤先生である。まともに教科書を講義したのは四月の末までで、あとは『論語』を買わせてこれで授業をやった。この本、白文である。返り点、送りがな等何もなしだ。読むのに苦労した。我が家におヤジの読んだ和綴じの論語がある。これは白文ではない。これを学校に持っていった。友人達はこれを書した。佐藤先生がどうしたんだとおっしゃるので、昔おヤジが読んで本だと言うと喜んでくれて、大事にしろ、

と言ってくれた。

この先生、変わった先生で、生徒を指名するとき、通称「オミクジ」を使う。小さな穴をあけた空き缶に番号を書いた竹棒が入れてあり、これをカラカラ・ツウーッとやると一本出てくる。その出席番号の生徒に当てるわけである。先生、いじわる(?)をして、できた棒を中に戻してしまい、二度あてられてばやいていた生徒がいた。幸か不幸か私はオミクジには一度もあたらなかった。

恩師徳さん

宮岡成次(高6)

昭和二十九年卒、いわゆる五十五年体制の始まる直前の、比較的のんびりした川高生活では、個性的な先生に数多く恵まれたが、一番印象に残るのは「徳さん」こと、故佐藤徳四郎先生だ。坊主刈りで軍服を着た怖い達磨という姿が思い出される。一年上の担任だったが、我々のクラスの漢文も担当され、「論語集註」という送りがなもない漢字の羅列を読まされたのは往生した。当時ほぼ全員の怨嗟的だったが、武徳殿の仮教室での授業に加えて朱子学の教科書の素読という江戸時

代の雰囲気を経験できた。

放課後は国文学部の部長として、毎週一回の源氏物語講読と俳句の指導を受けた。源氏は先輩の後を引き継いで「葵」から「須磨・明石」まで読んだが、その後どこまで進んだのだろうか。奥武蔵の秋を訪ねた俳句会も思い出に残る。

卒業の十数年後初めての海外勤務で、欧州のエリート階級と接して痛感したのは、会話の手段である外国語の能力の貧弱さにも増して、話す中身、殊に日本に関する知識教養の乏しさだった。この乏しさのなかで高校時代に徳さんのお陰で論語や源氏の原典に取り組み、俳句を詠んだことはきわめて貴重な体験であった。



佐藤徳四郎先生

個人的な好みで、あまり役に立たない勉強を強い暴君という感じを当時は抱いていたが、一つの信念で、教育に情熱をかけておられたのであろう。

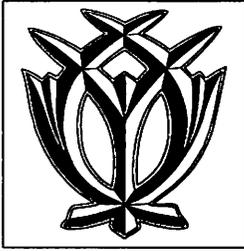
校章のデザイン

森住恒二(高2)

旧制中学から新制の高校に制度替えになる時に校章を新しくするため、当時美術を担当していた白井正先生がデザインを二つ考えて生徒にアンケートをとったことがあった。惜しくも採用にならなかったもう一つのデザインは、やはり雁を三羽アレンジしたもので曲線的で丸味のあるものだったが、私はその安定した優雅なデザインにひどくひかれていた。先生方の中には曲線的なデザインは女性的

最後まで残った校章案(上)

筆者が記憶をもとに描いたもの(下)



で質実剛健でないという理由で好まなかった方もおられたようで、結局は現在の校章に決まったということだった。しかし、後になって採用にならなかったもう一つのデザインがけっこう評判がよくて、多くの人の賛同を得ていると聞いて、あえて現在の校章に賛同したという人が多かったのは意外であった。

「行在所」は「郷土部室」

本橋藤治(高2)

懐かしい木造の旧校舎の二階には生徒の近づくことの出来なかつた「行在所」^{あきだしよ}があつた。大正元年十一月十四日〜二十日まで、大正天皇が大演習の折にご使用になつた部屋であつた。昭和十九年に入学した一年生は七月十八日にこの部屋を拝観した。「大正天皇御駐蹕記念絵葉書」をいただいた。玉座、御寝所の札が立ち、近づけるはずもなく、敗戦を迎えたが、戦後郷土部の部室として開放された。檜造りの和室にテーブルを据えたりして憩えた。部員は現飯能市長の小山誠三先輩、吉川勇一先輩、冬の富士山で遭難された若月洋三先輩の方々。同期は木川薫君であつた。時代激変の中で、目まぐるしく生活が変化

した。二十一年六月三日、福森校長は奉安殿のある正門からの入場、また敬礼を要しない旨を告げられた。五月九日には戦中からの教科書の持参が禁じられた。

郷土部の顧問は大護先生、原田先生、食糧不足の中で秩父、日光など民俗資料の収集に励んだ。その拠点が尊い元「行在所」であつた。

群 蚤

益子弘道(高3)

一九四五(昭和二〇)年八月末の事である。憧れの戦闘帽に初雁三中の校章(セルロイド)を付けて川越中学に入学して以来、鬼軍曹の銃剣術教練と勤労働員の毎日だったが、川越市駅近くの日清製粉の工場で、トロッコ押しの手を休めて敗戦の玉音放送を聞いてから、漸く学生生活に戻る事が出来た。

そして今まで軍隊の兵舎として占拠されていた教室の清掃を指示された事があつた。大部分を部活の室として使用するという事で各部毎に分担して掃除することになった。私は当時原田節二先生を責任者とする郷土部に所属していた。中庭校舎の二階だつたと思つ

が、上半身裸、ズボンの裾を捲り上げ、雑巾馬六を持って階段に近づいたが、異臭が鼻につき、反吐が出そうになるのを堪えながら、教室の戸を開けた。一步足を踏み入れた途端足の先から脛にかけて見る見るうちに茶褐色に染まり、痒み感がズボンの中へと侵入してきた。

雑巾をかけるどころではない。飛び上がった固まりを払い除けて、よく見れば蚤の大群である。居るは居るは、床の上に何万匹もの蚤が跳ねる元氣も失って蠢いていた。室の隅の方にはかなりの虱も発生していた。

DDTという粉末の殺虫剤を撒きながら悪戦苦闘、完全に駆除するまで一週間位かかった。この様に余裕のなさを露呈し、無極端まらない宿舎に起居していた兵隊では戦争に勝てる筈がないとつくづく感じたのを覚えてる。

私はその後、国文学部の創設に参加したが、佐藤徳四郎先生の学恩で芭蕉の『奥の細道』を解読していただいたことがある。『奥の細道』は文学的な紀行文(旅日記)としては、日本最高のものといわれているが、その中で芭蕉が鳴子をすぎて出羽の国へ向かう途中尿前の関を漸として越した所で風雨はげしく圍境の封人(番人)の家に三日泊めて貰った時の句

に

蚤虱馬の尿する枕もと

というのがあったが、何故かこの説明を受けているとき、あの群蚤を思い出した事があった。しかし私はあの時の情景を俳句にする事は出来なかつた。

二度と戦争の悲劇をみる事のない平和な生活が続くよう願いを込めて、いつしか群蚤の句の傑作をものしたいと考えている。

夢にみる仙花紙

松村祐二(高3)

仙花紙といっても最近は見あたらなないのでご存知ないかもしれないが、戦中戦後の物資逼迫時代の代表的洋紙だった。くず紙を漉きかえて再生した代物だから、点々と原料になった紙の破片が模様のように残ったりしていた。その上に腰が弱く、消しゴムで消したりするとたちまち破れてしまった。昭和二十年入学のわれわれは学校教材の用紙として大変お世話になった。試験の答案用紙は全てこれ。ガリ版印刷した文字もまことに読みにくい。まして書いた答えを訂正しようものなら消しゴムの圧力に耐えられずたちまち破れて

始末におえなくなり、ペそをかくことも屢々あった。終了のベルが間近くなれば焦りもあって紙がよく破れ、整えるのに四苦八苦する様子が今でも夢に現れる。

そういえば創立五十周年を記念して開催された全生徒参加のマラソン大会のゴールで私が渡された順位カード四百八十八番を大切に保存していたが、このカードも仙花紙だった。しかも使用済みの紙の裏面を利用したものだ。パソコンのプリンターやコピー機全盛の世の中となり仙花紙の時代に逆戻りしないことを祈りたい気持ちである。

赤い羽根

青柳安彦(高3)

○県立女学校の生徒は憧れの的で、当時始まったばかりの赤い羽根募金運動で彼女等が駅頭に立つとのニュースが流れ、翌朝ドキドキしながら駅へ降りました。赤い羽根を着けてくれるのが嬉しくて毎朝買って何本もたまってしまいました。

○時々抜き打ちのタバコ検査があり、爪の色やポケットを調べられました。「先生と知恵比べ」とばかり、イタズラ心を起こして古い

万年筆のペン先を取り、軸のなかにタバコを忍ばせて検査をクリアしてスリルを楽しみ、得意がっていました。

檄文

駒井正明(高4)

「いけないポスターどこ?」

川中に入学したばかりの敗戦の翌年の春、朝霞の進駐軍の二世兵士が校庭に現れ、たどたどしい日本語で質問してきた。最上級の五年生には海兵や子科練の復学者も多く、ある日「敗戦後の初雁健児に告ぐ」という名文の「檄文」が掲示板に張られた。「今次大戦は日本の止むに止まれぬ聖戦／勝てば官軍、負ければ賊軍／捲土重来……云々」の内容だったが、米軍からの大した懲罰もなかった様だった。

昨年、シカゴの駐在員をしていた会社の元の部下から、「アメリカで代理店のリストラをやらされたとき、古くから店にいた一人の日系人から、俺は終戦直後朝霞の Camp Drake で日本人の為に尽くした男だ。他の米国人と一緒にしてくれるなとこねられて参った事がありました。川越や坂戸なんかの想

い出を口にしましてね、とたんに駒井さんが浮かんできたんですよ。」と言われた。あれからの半世紀は川越も世界も全く近くしてしまった。

食べかけのサンドイッチ

加藤康夫(高3)

終戦直後、飯能・吾野方面の通学路、入間川駅(現狭山市駅)から種荷山公園駅に向かつて歩いていたら、先方よりジープが来た。三人で歩いていた我々は挙手の礼をして(当時は米兵が来ると「挙手の礼」をしていた)通り過ぎると、ジープが後方で止まりバックして来た。

当時は米兵が怖かったので逃げ腰になっていたが、我々の前で止まった車から黒人兵が食べかけのサンドイッチをくれた。中に肉と野菜が入っており、厚さは五センチ位あったと思う。挙手の礼で「サンキュー」と言っ手にした我々は食べるべきか、捨てるべきか議論し結局捨てたが、その後も二人集まると食べればよかったなあと話し合ったことを思い出す。田舎者の私には初めて見る大きなサンドイッチであった。

末広ゆき先生と蛙

青木雄二郎(高4)

週一回の音楽の時間が、とても楽しみだった。音楽室代わりの講堂に、いつも早めに皆が集まって待つ。やがて渡り廊下に足音が聞こえて、美しい末広先生が現れる。今日は何んなドレスだろうか、それもみんなの楽しみであった。四年間も最下級生(併設中学三年間と高校一年)だったヤンチャ坊主の集団が、東京から通ってこられる芸大出の先生が弾くピアノに合わせて、一生懸命に発声練習をしたり、シューベルトやヴェルディを歌った。

講堂の南側に庭園があり、そこに池があった。ある日、誰かが大きな蛙を捕まえて来て、先生がいつも立つ所に置いた。授業中に蛙が動き出し、それに気づいた先生は一瞬驚いた



末広ゆき先生

風であったが、健気にも蛙の足をつまんで窓の外へ放り投げた。そして、「男子ばかりの学校へ来るからには私も覚悟しています。でも、授業を妨げるイタズラは止めなさい。」と毅然として言われた。真面目な生徒もイタズラ坊主も、みんな下を向いてしまった。

「うめえ」お茶

日高武美(高4)

最近の川高生はどうかわからないが、昭和二十四、五年の在学生の間では、先生にあだ名(愛称)をつけることが多かった。ピテカン、カンチャン、ドンチャン……。

数学の先生で水泳部の顧問であった「カケゾウ」というあだ名の怖い先生がいた。当時の水泳部は夏に千葉県の館山のお寺で合宿するのが習わしであった。

合宿の最終日に先輩のKさんが「お前、今日は合宿の最終日だから酒を買ってこい」というので、買ってくると(当時の先輩は先生より怖かった)部員全員の茶わんにそれぞれ酒をついで、その中の一つをとって「これをカケゾウのところへ持っていけ」というので、別室にいる先生の所へ恐る恐る持っていくと

先生は「これはうめえお茶だ」と言って酒を一気に飲みほされた。その時の先生のうれしそうなお顔は今でも鮮明に思い出される。



掛原俊雄先生

最後の川中生

原 富啓(高4)

五十年前、われわれは終戦後初の新入生として県立川越中学校に入学、そして最後の川中生となった。翌年、新制中学発足、川中は川越高校併設中学校となった。以後川中生は存在しない。

校舎は全て木造、隙間だらけ、暖房なし、GHQ(占領軍)の一声で変わる教科内容、そして軍隊帰りの上級生による集団のしごき、今風に言えば貧困、混乱、暴力と、まさに大変な時代であったが、不思議と陽光の下、明るい学生生活の印象しか残っていない。

グローブもない、スパイクもない、バットもない、ないない尽くしの中で、軟式のテニスボール一個で野球を楽しむ。活字に飢えれば川越図書館に通い、石坂洋次郎の青春ものを回し読みするなど、そこにはそれぞれ工夫があり、とほしき中にも知恵が自然に発生、かつ節度があった。

そう、衣食足らずとも礼節は知る、という世代が最後の川中生であった。ちなみにこの年代は川高二年生になって初めて下級生が入ってきた、いかえれば中学三年間、高校一年間、計四年間を最下級生で過ごした特異年代で現天皇陛下も同学齢である。

「走れ、走れ」の六年間

深田弘治(高4)

昭和二十一年四月、旧制中学最後の入学から六年間、新任の松本先生に体育の授業を受けました。先生の走るフォームの美しさに、私たち全員が先ず驚嘆。「体育の基礎は走ることにあり」と訓示され、徹底的に走らされました。若かった先生は率先垂範、授業中自ら風を切って先頭を走る。中でも冬、毎時間のように受けた、上尾街道の通称眼鏡橋往復

マラソンは最高にハードな授業でした。

後には、専門外の野球・サッカー・テニスなどの球技も多少取り入れられ、雪の降る中初雁球場脇の坂道で生まれて初めてやったスキーは忘れられない。授業の評価は、実技の巧拙一辺倒ではなく、健康衛生管理、体育に対する精神的姿勢をも対象にされました。

「自由の裏には規律がある」「自主独立の精神と豊かな人間性を持った紳士たれ」が、心に残る言葉です。医学の道に進んだ私の医療哲学、「病気を診ると共に、病人を診る」は、先生の薫陶の賜物だと思っています。

「ルーの法則」

中村正宏・中村(松村)健(高27)

昭和四九年頃、体育を教わったのは松本利雄先生だった。当時十七、八歳の私たちは、五十歳台半ばの松本先生を、愛称で「じいさん」と呼んでいた。まことにおそれ多いことだ。松本先生の専門は陸上競技。東京オリンピックでは決勝審判もつとめたという、その道の権威である。小さいからだながら、無駄な力が全くないきれいなフォーム。グラウンドを軽やかに走る姿は、とてもかっこよかった。

「陸上選手は体を冷やさない」がモットー。タイツ(ジャージ)はいつも二枚はいていた。また、先生は、プールには一度も入らず私たちに、「いかに長い距離を泳げるか」を課題とした。

口癖は「ルーの法則」。「人間の体は、動いたところにもどることが自然である」というような意味だったと思う。当時テニス部に所属していた自分にとって、まことに合点がいくものだった。

スポーツテストでは、いつも懸垂を担当。各クラスに対し、見本として十数回軽くやって見せてくれた。九クラスだったので、一日に百回はやったのだろう。私たちは先生のパワーに圧倒された。

記憶の中から松本語録を拾ってみよう。「小便が赤くなるまで練習しろ。必ず本物になる。」

「大小便はいきんではいけない。自然に任せてゆつたりと。痔けつになつたらまともに運動はできない」

「全国大会出場者の体育(の評価)は最高の10だ」等々。

松本先生の授業は、夏場は短パン一丁。上半身はハダカであった。体育の評価の重点は、①「休まないこと(関心・意欲)」②「記録の

良さは二の次。個によって違う。それより自分の力を精一杯出し切ること(結果より過程重視)」③「授業が始まるまでに全員が準備運動・グラウンドを二周走り、整列して先生を待つこと(態度)」の三点だった。いかに運動能力が優れていても、真剣に取り組まない者にはとても厳しかった。

古き良き時代の川高の象徴である、「がんこじいさん」松本先生の体育に、今求められている教育の神髄を見た思いがする。



松本利雄先生

戦後最初の入学生

大野三男(高5)

終戦後最初の入学、古い木造の校舎で運動場に面した場所に、階段教室と雨天体操場があった。雨天体操場の床が抜けていない部分で、体操部が練習をしていた。

サッカーボールが屋根にあたると、天井から瓦と共に落下してきた。ボール拾いは一年生の役割、そのたびに羽目板の割れ目から、体操部の先輩の怒鳴り声、ボールを持って一目散。

卒業年の中頃からは、校舎が改築されて入学時の面影は無くなった。そして四十五年余りが過ぎた今、変わらないのは楠だけではないか。

アンニー・ローリー

松本正自(高5)

昭和二十六年、私が川高二年生の時に、音楽担当の牧野統先生が赴任されました。当時芸術の授業は選択制でした。美術、書道、園芸、音楽の中から一科目選ぶわけです。

美術、書道は重い道具が必要です。園芸のとき施肥には、あのハニー・バケツ(肥たご)を授業中に担がにやいけなかったのです。

必然的に音楽を選びました。

初めての授業の時に、はにかみながらの牧野先生の自己紹介に好感を持ちましたし、華麗なピアノ演奏にどきもをぬかれたこともありました。

その後、誘われるままに音楽部に入部いたしました。先生の「女子高との合同演奏があるかも」の一言が、それなりの影響力をもたらしました。

一度おじやました先生の川越の新居での美しい奥様の姿と、よちよち歩きだったお嬢様と先生との心温まる光景が、脳裏から離れません。

音楽部の練習が始まって間もなく、先生が秋のコンクールに出場するとおっしゃったのです。会場はたしか日比谷公会堂だったと思います。

練習は昼休みでした。したがって昼食は三時間目の休みに早弁して練習したのでした。

曲目はアンニー・ローリーです。英語の曲です。練習の合間に、英語の木島先生に発音を教えていただいたこともありました。

コンクールの結果は、下を向いているだけでした。しかし、五十年ぐらい経った今でも



牧野 統先生

宴会のあとのそぞろ歩きの時に、アンニー・ローリーの曲の一部を、ほろ酔いながら口ずさんでいるのです。

二人の恩師

小川玄吾(高7)

今振り返ってみると、私の高校生活は、受験という目標に向かって、何とかこの重圧を跳ね返すべく、歯を食いしばって勉強していたように思う。けれど、そんな中で発狂もせず、多感な血と心を鼓舞してくれた、とりわけ二人の先生を思い出す。

一人は木島先生。確か、商船大学の教授を退官され、その余生を若い人のためにと教鞭をとられていた。私どもは英作文を習った。一見恐い先生だったが、興がのると、海の、船の、男のロマンを滔々と語って授業の終わることが多かった。

後年、コンラッドの『青春』を読んだとき、海のまつただ中の船火事で、メラメラと燃え上がる炎を見て「これが青春だ」と叫ぶ主人公が、教壇の木島先生の顔や姿と二重写しになってしようがなかった。

もう一人は音楽の牧野先生。応援歌「奮え

友よ、奮い立て今」の作曲者である。まさに、芸術家としての先生を羨望と畏敬をもって眺めたものだ。しかし、授業で、昼休みの誰でも参加できるコーラスで、女子高との交歓会で、飾り気のない、純朴で、少々チャメツ気のある先生に接して、大いなる親近感を抱くと同時に、どれだけ私の心を晴れ晴れとしてくれたことか。今日、音楽が私の生活に深く根を下ろし、生活の潤いとなっているのは、牧野先生のお陰である。「サボテンの刺、蟹の爪」という一風変わった先生の作品を覚えていた。

お二人とも他界された。しかし、お二人とも私の青春のモニュメントの中に、師として生き続けている。

学舎三遷

鈴木養正(高6)

私の高校時代を振り返ってみると、まだ戦後の不安定な影響を多分に受けていたと思う。まず、入学試験についていえば、私達の時のみアチーブメント方式といって、中学校で一斉試験を行い、その結果を見て志望高校を決めたので、川高に受験に行つて難関突破し

て入学、という実感はなかった。

また、入学早々、校舎の改築が始まり、おそらく創立時代からと思われる校舎と、武徳殿の仮校舎と新校舎と、三回学舎が替わつた。戦後の食糧難の影響といえば、絵画の時間に木炭デッサンを消すために使うパンを多目に買つて、その大部分を自分の胃袋に入れてしまつたり、修学旅行にも米持参で行つたりしたことを思い出す。

最後に、公立校の土曜休校ということが最近話題になったが、すでに四十年前も前に川高で試行されており、当時の大衆娯楽である映画の高校生向けの早朝割り引きに大いに活用させていただいた記憶がある。

校則破り

井上誠一郎(高7)

- ①授業をさぼつて御嶽山(富士見櫓跡)に上り、社殿に備えてあったアブラゲを食つてしまい問題になった。
- ②禁止されていた朴歯ほおばの下駄をはいて登校した。
- ③短髪(坊主頭)をいち早く禁止されていた長髪としたが、おとがめはなかった。

④授業中借金のやりとりをしてピテカンに見つかり、教員室前に立たされ、ピンタを食つた。

先輩の帽子

尾崎勝美(高11)

川高への入学が決まり、中学の卒業式も済んだ頃、私の近くに住むHさん(川高をその年卒業した先輩)から、「三年間使つた帽子だけど記念にやるよ」とあこがれの白線入りの帽子を貰つた。

白線はみごとによごれてほとんど茶色になっていた。私も真新しい二本の白線入りの帽子をすでに購入していたが、よごれの染み込んだ貫禄に充ちた帽子は、むしろ神々しい光を放っていた。押しただいて受け取つた帽子は、さすがに入学式には被つていけないかつたが、数日経つと、それで登校してみたい誘惑にかられ、思い切つて被つていくことにした。

学校に近づくにつれて、まだ顔見知りにならない同期の者は、誰もが私の帽子を見て、私に元氣よく朝の挨拶をしてすれ違つていった。上級生と思われる者も向こうから挨拶し

ていった。白線のごこれ具合の効力は大変なものであった。

ある日、同じ中学から来た同級生から、「お前、その帽子はまずいぞ、上級生に知られたら何されるかわからないぞ」とおどかされ、私もそれもそうだと思って、以後は被るのはやめたが、今度は新しい帽子の白線を手垢でこすっては早くよこれが染み込まないものかと思っただけであった。

帽子を早くよとして新入生と見られないようにしたい、と思う者は結構いたが、白線へのあこがれと白線が放つ貫禄にも私たちは魅せられていたのだ。

郷土部のこと

松浦尚明(高13)

進学の勉強よりもクラブ活動「郷土部」への入れ込みの思い出を記す。「郷土部」の顧問の先生は岡田潔、小泉功両先生であった。今はやりの古代ロマンへの追求、即ち古墳等を発掘して、勾玉、矢尻などを発見したのを楽し出す。

また、入間地方に点在する祭りについて纏めた。祭礼行事の当日に出かけたり、祭礼を

取り仕切っている人の家に行ったりして纏め上げ、祭礼の飾りを借用してきて文化祭に展示したのを思い出す。その纏め上げた方刷りのファイルが今も私の手元にある。

今も、小泉先生(ヒテカン)は川越郷土史の親分として活躍されており、時として街中でお会いすることがある。



発掘現場に立つ小泉功先生

新入生に対するクラブ勧誘

松本 寧(高15)

一九六〇(昭和三五)年、入学して間もない四月の昼休み、一年生の教室には運動部の先輩達が乱入して来ます。

さすが川高、中学時代のデータは全て持っており、「〇〇中学の誰々、××中学の誰々立て!」と命令が下り、まだ弁当が途中で

立たされます。「おまえらは軟式テニス部の部室に放課後来るように」「次、〇〇中学の誰々立て!」「陸上の部室に来るように」と、中学時代と同じクラブに勧誘されました。これが毎日毎日一か月は繰り返されました。

この行事では同時に、先輩に対する礼儀を教え込まれたのだと思います。われわれは思いました。「よし、三年になったら絶対やるぞ」と。しかし、われわれが三年になったとき、中止させられました。

ろくさん

宮崎勝弘(高15)

正しいお名前は、失礼ながら忘れてしまった。というより、当時から知らなかった。が、その渾名は本名を押しつけるほど強く深く広がっていた。「ろくさん」。管理教育などほど遠く、自由に翼をのばさせてくれた。ご自分もそうだった。

近くの市営プールにこっそり入り込んで泳いだこともあった。主犯? は無論、先生の方だった。新潟、福島方面に旅行した時、一緒にキュウリをかじりながら歩いたが、あれはどこで手に入れたのだろう。

フンドシ

戸口 悟(高18)

先生で印象に残っているのは、担任で、化学を教えていた内田先生です。いつもニコニコと仏様のような顔で、ギスギスしそうなクラスをなごませてくれる人でした。

その先生が、水泳大会にいきなり「フンドシ」で現れたときは、会場は大爆笑でした。私もフンドシを見たのは後にも先にもそれきりで、今でも妙に印象に残っています。



内田一正先生(ろくさん)

東京オリンピックピック

長島祥二郎(高19)

私が入学した年は東京オリンピックピックの時でした。幸いにも抽選で入場券が当たり(当時

クラスで四〜五名?)各学年単位で代々木の国立陸上競技場へ行きました。

棒高跳びが長びき、夕方暗くなるまで応援した思い出が今でも脳裏にきざみこまれています。

新入生歓迎マラソン

有山 博(高21)

私たちの卒業した数年後には、制服が廃止されたそうですが、私たちは、初雁の姿をデザインした学生服の金ボタンや制帽の徽章にあこがれて川高に入学したものです。学生全般として、質実剛健とか文武両道といった言葉が素直に受け入れていたのではないかと思っています。しかしその校風も変わり目にきていた頃のように、在学中に新入生歓迎十キロマラソンや熊谷高校との交歓会も中止になっていきました。

新入生歓迎マラソンは五月頃だったでしょうか。入学したばかりで、まだクラスの友人たちの名前や性格もよくわかっていない頃でした。校門を出て北側に川越街道を横切り東に向かい、伊佐沼のほとりをすぎ、入間川の土手沿いに北上し榛はしばみの木の立ち並ぶたんぼ道

を走り、芳野小あたりの集落を抜けて西へ戻って来るというコースでした。

私はその春サッカー部に入ったばかりで、毎日ランニングしていたので、何とか十キロ完走しましたが、多くの新入生にはたいへんな試練だったようです。今なら、そのマラソンのどこが「新入生歓迎」なのかと反対続出だろうと思いますが、当時はこれが校風なのかと納得したものでした。



新入生歓迎マラソンのスタート

素晴らしい三年間

川島道男(高22)

我々の在校中は学生運動が盛んな時で、我が学校でも生徒会の活動によって学校の方針が決定されはじめた。熊高との交歓会の中、マラソン大会を強歩に変え、週一時間の自由時間(レコード鑑賞など)、制服の廃止等々。

一番川高を変えた時期に在学していたと思う。学校は生徒を自由に学問させ、またクラス



熊谷高との最後の交歓会

全体がまとまり(担任がよかった)、助け合い、哲学的なことも論じあった。夏休みも毎日学校へ行き友の顔を見るのが楽しみだった。本当に素晴らしい三年間。最高の学校である。

制服廃止の頃

赤沢 賢(高23)

当時華やかなりし学生運動を気取り、お仕着せの形式に反発し、あこがれの白線帽などの制服廃止に始まり、卒業式ではいわゆる形式にとらわれず、日頃お世話になった中野パンのおじさんや、食堂のおばちゃんたちに出席してもらい、感謝の意を表し、また祝辞をいただいたこと、とても鮮やかな記憶として残っております。

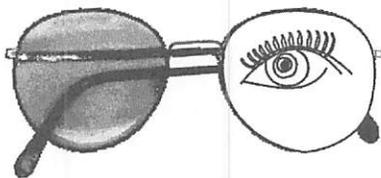
文化部対抗ソフトボール大会

日比将人(高30回)

あれは確か僕らが三年の時、一九七七年だったと思う。応援部の発案で文化部対抗ソフトボール大会なるものが計画されたことがあった。どこから資金が出たのか(あるいは各

部の負担だったのか)すでに記憶はないが、優勝トロフィーまで用意した本格的な大会だった。

応援部といえば、文化部というよりは限りなく体育会系的な存在。当然自分たちが第一回大会優勝をまくろんで呼びかけたのだったが、いざふたを開けてみると、伏兵、わが書道部が大方の予想を覆して優勝。見事に応援部の野望をうち砕いたのだった。思えば現在の川越市立博物館がまだ原っぱだった時代。だからこそこんな企画も可能だったのだ。



カット・岩田甲平(高14回)

回想 紫匂う武蔵野の

校歌は誰の手で、どのようにしてできたか？

関係者の明かす秘話。

歴代の校長・PT会長・後援会長・全定旧職員・OBなど

母校を支えてきた人々からの熱いメッセージ。

校歌の作詞者は 祖父喜十郎

古谷圭一(高4)

祖父が川中の先生であり、父喜代次(中23)

が剣道部で活躍したということで、当然のこととして私も川越中学を受験し、入学した。昭和二十一年であった。その後、新制高等学校への制度の切り替えにより、私たちは川越高等学校併設中学校に所属することとなり、最下級生を四年間続けることになった。

祖父喜十郎が川越中学の国語・漢文科、習字科の教諭であったのは、三三歳から三五歳の最も充実していた時代であった。

週末に、川越の下宿先から自宅のある豊岡町(現入間市)に帰るには、入間川駅から徒歩または馬車を利用していったと思われる。その丁度中間点の、現在の国道16号線と旧道の交わるあたりの道は入間川の段丘のはずれを通り、視界が急に開けて対岸の緑の丘陵と秩父連峰が見渡せるところである。ことに、冬には秩父連峰の細かなひだが乾いた強い北風と雪によって強調され、眼下には左から右に遮るものもなく流れる

入間川の印象は強烈であった。

「秩父の峰のゆるぎなく、入間の水の末永し」の詩想がここから生まれたのは間違いないことであろう。わたしもこの道をはじめは徒歩で後には自転車で通学した。現在のような建造物は視界の中ほとんどなく、寒風の中で入間川を前景にして、秩父連峰の姿が大きく見えるすばらしい景観と重なり、校歌は私の誇りであった。

次に祖父喜十郎の略歴を記す。

雅号は雉洞。明治八年、父留吉の長男として生まれる。高等小学校卒業後、母校豊岡小学校の助教諭となる。以後独学で尋常科准教諭、正教諭、小学校本科正教諭、師範学校教諭、中学校教諭、高等女学校教諭(国漢科、習字科)の資格を取得し、元狭山尋常小学校訓導、黒須高等小学校教諭、県立浦和高等女学校教諭を歴任、明治三十五年十月、浦和女子師範学校助教諭、三十八年同校教諭となり、明治四十年十二月に埼玉県立川越中学校教諭となった。川越中学校を四十四年三月に病気で退職し、以後自宅で療養のかたわら『豊岡町史』の執筆などにたずさわり、昭和十五年永眠。

早くに肺を病み、公職を辞した祖父のことを、田山花袋の「田舎教師」を思わせると亡き父は書いている。

「奮え友よ」 誕生裏話

山本 明(高4)

川越高校応援歌の校内募集が行われたのは一九五一(昭和二六)年六月だったと記憶している。私が三年生の時だった。

この募集に応募した動機を思い出してみると、その賞金だったような気がする。軽い山登りや小旅行が好きだったが、太平洋戦争末期の空襲で家を焼かれ、「焼け出され」として川越にきていた我が家の当時の状況では、小遣いも充分になかった。この年の春休みに野辺山に出かけたときも、安宿に泊まるための米を持参し、歩ける所は歩き、トラックにも乗せてもらおうという、いわば昨今のバックパック旅行だった。次の夏休みにはハケ岳登山をと思っていたが、資金不足の状況で実現できるか心配していたときに、この募集が掲示された。

私自身、特に詩作に興味があったわけでもなく、また母校応援歌の作詞者として名を残そうなどという気持ちでもなかったことは事実で、きわめて現実的な理由だった。

作詞そのものにあまり苦勞した記憶はない。とにかく元氣のよい文句の中に、「初雁」「武蔵野」の言葉を入れてということのできあがったのが「奮え友よ」だった。

七月初旬の暑い校庭で入選作品の発表があった。一等該当作品がなく、二等の「奮え友よ」が選ばれて、賞金五百円を頂いた。一番しか作らず、自分自身若干物足りなさは感じているが、牧野統先生には良い曲を作って頂いたと感謝している。この賞金のおかげで、夏休みの八ヶ岳登山が実現できたのがうれしかった。

真理に根ざした教育

第25代校長 宮島 秀夫

私は、昭和五十八年四月から六十年三月まで、川高第二五代校長として、教員生活最後の勤めをさせて頂いた。短い期間ではあったが、充実した、思い出深い二年間であった。

着任して、先ず大きな楯に歴史の重みを思い、その木蔭に響く歌声に感動した。また、旧制中学校時代の校歌がそのまま新制高校の校歌として歌われていることは、創立時の学校の方針が

百年の後にも通用する人類普遍の真理に根ざしたものであったことを思い、校長としての責任の重大さを実感したが、進学校として全国に知られた川高は、同時に部活動でも全日制、定時制ともにスポーツと文化の両面にわたり実心であり、教育上の成果も大きかった。

そのような関係もあって、川高が中心となって埼玉県高等学校文化連盟が結成され、私が初代会長を務めた。文化というと高校ではとくく女性優位になりがちだが、川高が今日でも文化連盟の中心になっているのは愉快である。

私は志木に住んでいるので、通勤は便利であった。勤め帰りに、気のむくままに大路小路を歩いて駅へ出るのが楽しみであった。からたちの生垣を残す武家屋敷、「発狂せんべい」の店など、思い出は尽きない。

妻に先立たれた時、私は、いずれ自分も入ることを考え、思い出の地川越の聖地霊園に墓をつくった。川高が百周年を契機にますます繁栄してゆくことを心から祈ってやまない。



カット・関根伸夫(高13)

校歌に思う

第26代校長 小室 英夫

休^ヤ道^メ 他郷多^シ 苦辛^シ
同袍有^リ 友自^ラ 相親^シ
柴扉^ニ 暁^ニ 出^ル 霜如^シ 雪^ノ
君^ハ 汲^メ 川流^ニ 我^ハ 拾^レ 薪^ヲ

此の七言絶句は友情の大切さを説いた名詩として、かつて人口に膾炙した。作者廣瀬淡窓は江戸後期の儒学者、九州豊後の国日田の人、日本全国から集った門弟は四千人、輩出した人材は維新後の我が国の発展に寄与した。

本校関係の会では必ずといってよいほど校歌が歌われる。私も本校の校歌を歌う機会が時折あるが、そのたびにこの淡窓の詩を思う。校歌の二番に「師弟の情思細やかに、切悧の友誼また厚く」とあるのが、淡窓の詩の光景そのものだからである。故郷を遠く離れ、寄宿舎で自炊しながら友情をバネに塾生として日夜学問に励んだ弟子達、そしてその弟子達の労苦を察し、この詩を作った励ました淡窓の温い心、まさに本校の生徒教員のあり方ではないかと考えるの

である。

終戦の年、昭和二十年卒業の第四三期のクラス会は「如雪会」という名称を持たれると聞く。察するにこの詩の「柴扉曉に出づれば霜雪の如し」から名づけられたものだと思う。

校長在任時、入学式に校歌と淡窓のこの漢詩を新入生と保護者に懸命に話したことが、十年以上経過した今も、まるで昨日のことのように思い出されるのである。

「矢と歌」を巡って

第29代校長

深谷 正雄

百周年を迎えて、校門の樟の木は、その勢い益々盛んであり、川越高校の姿と重なり合う。昔から、この木は川高生の志・心意気であり、また故郷・守護神だったようである。数年前川越市の「百名木」に選定されてもいる。

六十周年直後に勤務した時、樟と生徒達の姿に重なるように思い、「矢と歌」の訳詩を一部不明のままに紹介した。「くすの木」は「かしの木」に、「師弟の情思、切悞の友誼」は、「矢と歌」に重なる気がした。

百周年直前に再び勤務し、大樹に矢を見る思いがした。永く不明だった訳詩の一部と訳詩者も友の協力で発見できたので紹介する。

ロンクフェロウ 作
南日 恒太郎 訳

そらに放ちし わが征矢は
あわれいずこに 落ちにけむ
疾きいきおいに まなこすら
そのゆくすえを 見ざりけり。
そらに唱えし わが歌は
あわれいずこに おちにけむ
いかに目敏き 人とても
声のゆくえの 見えむやは。
とおくその後 かしの木に
矢はまだ折れて とどまりぬ。
歌のもとすえ ふたたびも
友のこころに あらわれぬ。

熱き 思い出

第30代校長

大沢 幸夫

母校の百年に一度の慶事、この記念事業に校

長としてその準備の一端を担うことができ光栄に存するとともに、輝かしい伝統と多くの先人の偉業に心から敬意と祝意を表したい。

私が生徒としてお世話になったのは昭和二十九年四月、当時は講堂、校舎は木造、プールはありませんでした。冬期には石炭ストーブ、暖飯器で弁当を温めて食べました。体育の授業ではよく走りました。準備運動が伊佐沼までのランニングでした。先生方の個性あふれる厳しい指導が懐かしく思い出されます。田舎生まれの田舎育ち、毎日を全力投球、充実した高校生活でした。

卒業後四十年、平成九年四月、校長として母校に着任。前任の深谷校長からの引継ぎは、百年記念事業の準備が最大の懸案事項。幸い、深谷実行委員長、顧問の皆様、実行委員の方々、その他多くの先生方の献身的な御尽力で予定された事業も順調に準備が整い、それまでの労と同窓会会員の募金への多額の浄財の御寄付、外郭団体の新旧役員の方々にも物心両面にわたる御協力に感謝申し上げます。

この二年間の思い出は枚挙に暇はありませんが、なかでも、県御当局や関係者の尽力での図書館の改築。土屋知事の計らいでのクイーンズランド州総督の来校。ケアンズ市、セント・オーガスティンカレッジの視察。体育館、校門の

完成。生徒の進路・部活動での活躍など熱き思いは尽きません。

これからの百年、本校が埼玉の雄として大きく発展することを願っています。

部室 新築のころ

第19代PT会長 竹内康雄

川越高校と私が係わったのは一九七八(昭和五三年)から八一(昭和五六)年で、後半の二年が飯島校長時代のPT会会長としてでした。小さな会社を経営していましたが、「長」と名のつくものは自分の会社だけと考えていましたので、役員会で会長に指名された時は大変な戸惑いを覚えました。しかし貴重な経験をさせて頂いたと、いまは感慨深いものがあります。事務局の諸先生、PT会役員の方々、地区PT会でお会いする会員さん達から沢山のことを教えられた気がします。そんな中でとくに思い出に残っているのは、会長の時に持ちあがった部室の新築事業でした。

会社経営もそうですが、事を起すにあたって、①正しく状況を判断(認識)し、②十分に計画

(構想)を練り、③周囲の理解を求め、④実行に当る、この四点を念頭に置いて、事務局の先生方や役員の方々とこの事業を進めていきました。その折、小泉先生から頂いた次の一言が今でも心に残っております。

「会長、毀れるのは仕方がないとしても、毀れた時に直しやすいように、くれぐれもお願いしますよ」

部室の完成は私の次の小林会長の時になりました。あれから十五年以上経った現在、あちらこちらに修理の必要が生じているでしょうか、小泉先生の忠告が生かされていたかどうか、時々思い出します。

あの頃この人

第20代PT会長 小林茂雄

長男が入学した年の夏の地区会で、学校側から生徒指導についての説明と、父母への協力要請が行なわれた。そこで家庭教育について所見を申し上げたところ、早速常任理事副会長に推され、更に飯島、宮島両校長先生の在任中には会長を仰せつかり、本校ならではのすばらしい

出会いとふれ合いの中で、得難い体験をさせていただいた。在職中田中事務長、小柳、柴生田、松村の諸先生、小島副会長には大変お世話になったが、飯島校長先生は退官後間もなく他界され、副会長の二氏もすでになく、今昔の情切なるものがある。

退任を目前の昭和六十年四月、小室、荒井の両先生が校長、教頭として着任された。後に県教育長の榮譽を担われた荒井桂先生には、以来越格のご厚情を賜っているが、その後埼玉医大に勤務する長男が、療養中の奥様や、母君甲本先生にまでご縁を授かり、人の世のめぐり合いの不思議を痛感している。

今回の慶事に当たり、委員長としてご活躍の渋谷健先生が校長在任中は、後援会長としてお世話になり、県下にこの人有りと言われた挨拶の名言や、気くばりのすすめを地で行く心遣いに、多くを学ばせていただいた。

思わぬ出会いから深く関わることになったが、万余の俊秀を世に送り、百年の佳節を迎えた本校は、今や第二の母校である。

百年の佳節寿ぐ学舎に大きくすの木は枝葉繁らす

多くの出会いが 私の宝

第22代PT会長 北村 平

昭和六十一年三月、狭山地区の川越高校入学

予定者の保護者が集められ、PT会役員は一年交替、いままでの慣例として新一年生保護者から選んでいるといわれ、昭和六十一年度の常任理事(家庭教育)候補となった。この会合の呼びかけが知人であり、PT会副会長の松本良蔵氏であったことが、長い川越高校とのお付き合いのきっかけとなりました。翌年には松本氏に代わって副会長(家庭教育)に、昭和六十三年度は、青天の霹靂ともいふべきPT会長に、渋谷健校長先生の「鶴の一声」で浅学非才を顧みず重責を担うことになりました。以来、十余年微力を恥じながら関わりのできたことを誇りとしています。

東大、京大などを目指して学区内一〇〇余校の中学校から選ばれた勉学意欲満々の高校生、そんな彼らを叱咤激励する親御さん、知識と人格形成のために全身全霊を傾け活気あふれる情熱でご指導下さる先生方。PT会活動など不要

と思われる勉学環境です。五月のPT会総会兼保護者会、六月の家庭教育学級講演会、七月の地区別PT会、どの活動にも参加保護者の多かったことが最大の喜びでした。

PT会がご縁で川越高校の校長先生をはじめとした先生方、その上に他校の先生方および地域の大勢の皆様まで、たくさんのお会いが生まれました。いまでもこれからも私にとっては大事な宝となっています。

川越高校にとって過去の一〇〇年の発展が更に継続することを心から願っています。

我が青春の 川越高校

第23代PT会長 道祖土 武高

昭和二十七年春、白線二本と雁の校章をつけた帽子をかぶり、真新しい学生服で本校の校門をくぐったのはもう四十数年前のことである。

本校卒業後すぐ公務員となり堅い仕事に明け暮れたので、私の青春と言えば、本校での学生生活であったと懐かしく思い出す。

一年生の教室は、本館が改築中のため「武徳殿」といって雨漏りがしそうなそれはひどい建



カット・平 不二夫(高5)

物であった(今は改修された本丸御殿となっている)。新築された本館も、改築されて今は無い。昔も今も残っているのは「楠の木」だけである。

私たちが三年間教えて下さった先生方は、那須先生(物理)田中先生(国語)掛原先生(数学)野口先生(英語)渋谷先生(社会)斎藤先生(国語)などで、それぞれユニークなあだ名がついていた。本校は昔も今も大変自由な校風で生活指導を受けたことは無かった。

ニーチェを語り、ヘッセの『車輪の下』やロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』を回し読みして友と感想を語りあった。今でも落合(栄一郎・現米国大学教授)がアメリカから帰ってくる集まって親交を深めている。

百周年実行委員長の渋谷先生には、私たちが初めての教え子であり、愚息が本校に入学した年に本校校長に着任され、私もPT会で大変お

世話になった。とくに渋谷校長のご挨拶はすばらしく、PT会役員の皆様もお話を楽しみにされていた。そんなご縁で私も実行委員のひとりとしてお役に立てればと思っっている。

目に見えないものの力

第25代PT会長 北沢紀史夫

百周年準備委員会でどんなことが記念になる企画かを考えた。目に見えることよりも、見えないものは、何時までも残る、という信念から、本当の記念事業にふさわしいものは何かを考えたい。在校生に喜ばれ、魅力ある川高になるように、と、留学制度の導入がよいのではと思い、準備委員会で提案した。その後、皆さん方のご理解を得ることが出来、今年のP・後総会には具体策を発表できるまでに至った。

新しいことを始めることは大変だということに身にしみて感じたが、他方、先生方、同窓会、PT会、後援会、教育振興会の方々のご理解とご支援により実現が可能となった。二一世紀には世界に雄飛する川高生を夢見るのが楽しみである。

PT会のなかで

第28代PT会長 金子建二

平成六年〜八年までPT会活動の中での思い出話となりますが、まさに伝統の素晴らしさを随処に感じずにはいられません。そのような中の一つとして総会や地区別PT会の参加率の高さがあります。地区別PT会に至っては、常に五〇％以上の参加率で、当時は生徒数が一二〇〇名以上でしたので六〇〇名以上の参加を頂いており、この事は他校の人達からは信じ難いと映ったようでありました。

そして大変楽しかった活動の一つに、学校訪問があり、他県の公立高校を訪問し直接相手学校の先生方と意見交換するものでありますが、地域性が大変強く、地方に行くほど公立高校の活躍が大であったし、地域の中にあつて大きな期待感と信頼感の中で活躍をしているのを伺い知る事が出来ました。その折に一泊するのですが夜の宴席の楽しかった事。

日頃の昼の顔から夜の顔へと移った時の親しさ、和やかさは参加者でしかわかり得ない大き

な充実感と信頼を育ててくれました。

全国高等学校PTA連合会大会も、一万人を超える規模の大集会で、一万余人の迫力と熱気は想像以上でありました。

様々な人達との出会い、人縁の中で楽しくも真剣に行つたPT会活動。ささえて頂いた人達共に活動した仲間の人達、百年の伝統のほんの一時を共に過せて大変光栄に思っております。今後の川高の百年に幸あれ。

昭和十九年秋

第16代同窓会長 岡村了一(中43)

昭和十九(一九四四)年秋、私は旧制中学校五年生、大戦下のいわゆる学徒動員により陸軍被服廠で年間休日なしの労役に服していた。その夏東条内閣が倒れ、陸軍大将小磯国昭が組閣したが、私は何か戦時下の緊張が一寸緩和したように感じた。十七歳の少年が左様感じた。故に当時同感であつた大人も多かつたのではないか。

その小磯首相が初秋の頃であつたか、大和一致を国民に求める旨の談話を発表したことを新

聞紙の報道で知った。このことを一寸気にかけていたところ、訓育主任（といつたかどうかが）の前田潔先生（体操担当、旧川中一六回卒）が就労前の朝礼の折、「首相の言う大和一致とは、国内に自由主義者も社会主義者も多くいることを前提として、ではあろうが、国亡びるか否かの関頭に立って、とに角今次大戦終局迄は大きく一和してくれ」との懇望の言葉と解する」と説明された。温顔、挙措大人の風ある前田先生のお話には、私はこれを諒とするほどのものとしたものが胸底に抜がっていくのを覚えた。「戦局危急を加える秋、言論自由の声再び澎湃として世に起り」と、植木枝盛に事寄せて東京新聞が大記事を載せたのもその頃のことであった。私は胸の高鳴るのを覚えた。何かが迫りつつある。「盲いなる民、世に踊る」とつぶやきつつ、秋十八歳になった少年の驕慢は快晴続きのその年の秋天を見据えて止むことがなかった。

中学在学は 「動乱の二十年代」

第17代同窓会長 佐々木忠一（中32）

私が在学した昭和初期は社会不安と不況の口

ーリング・ツウエンティと呼ばれた動乱の二十年代であった。アメリカで「暗黒の木曜日」（一九一九年十月二十四日）で始まった世界恐慌が日本を襲い金融恐慌で急激に財政が悪化、本格的な失業時代が到来、「大学は出たけれど」知識階級の就職難が深刻化した。

在学中に内外ともに歴史的大事件が続発、学科では軍事教練が強化され、通学はゲートル着用、文字通り質実剛健で、一日がかりの長距離全校行軍が先生方も加わって行われた（一例・吉見百六）。いま健脚で腰痛と無縁なのはこのおかげでもある。中学二年の時、十一月十四日浜口首相が東京駅頭で狙撃され、翌年八月に死去。三年生で、九月満州事変勃発、通学途次街頭に貼り出された号外が、赤丸で奉天郊外満鉄爆破されると報じた。四年生で、進学、受験に備え夏期講習、お化け（松岡教頭）の英語は実に楽しかった。

それに前後して五・一五事件、上海「肉弾三勇士」、満州国建国宣言、ナチス・ドイツの興隆とヒトラー政権掌握、今にしてかえりみると実に目まぐるしい激動の時代に、よくぞ中学生生活が健やかに送れたものだと感慨ひとしおである。昨秋、私はもう一つの母校である京大百周年祝典に列席の栄を得たが、それにも増して少年期の母校の百周年にめぐり会えることは大

いなる喜び、感謝である。

川高時代抄記

旧職員 石川正明

川高創立百周年記念を祝し、併而在職時代の思い出を二、三述べさせていたが、

私が数学の教員としてお世話になったのは、昭和二十四年からの二十年間である。赴任当時の校舎は創設時代からのものでその中には大正天皇行在記念室もあった。在職中二度にわたる改築を経験し、武徳殿、講堂等を仕切った仮設教室での授業も忘れられない。授業では、若い未熟な私は、あえて根源的数学教育論を基底に受験数学を展開した。生徒諸君はよく頑張ってくれたが、社会の弱体化と共に三十年代後半には思うように進まなくなった。その間の評価は多様であろうが文系に進んだ学生の一人は「大学の数学は易しい、微積などは友人が聞きに来る」といい、一人は「今まで石川先生を怨んでいた。洗礼を受けたときそれは間違っていたことに気付き、今は感謝している」という手紙を寄せて来た。このことはむしろ私自身の懺悔

録でもある。

図書館の想い出も多いが山岳部の想い出を割愛する訳にはいかない。悪天候時の山は惨酷である。昭和三十年代、上高地に災害救助法が発令されたときには横尾にベースを張っていた。現地で遭難者も出た。断念して島々へ下った時母校の職員や山岳部OBの方々が救助に来てくれた。この有難さは終生忘れることが出来ない。このOB会は今もなお年に数回の集いを開いている。

啄木は「ふるさとの山はありがたきかな」と謳う。私も、あやかって「川高に向って」ととなし、川高はありがたきかな」と叫びたい。川高の更なる発展と皆様の御多幸を祈りながら。

きら星の いづく

旧職員 齋藤 彰勇(中4)

木島先生はまれに「芥川が……」とか「龍口直太郎は……」と、英文科時代の同級生の話となさることがあった。独学で鍛え上げられた西川先生は冷ややかに聞いておられる。平先生、野口先生の温厚なお人柄。木島先生の訳出なき



カット・鹿山 孝(高18)

れた海洋小説、コンラッドの「青春・黎明期」を先生の署名入りで頂戴する。佐藤先生の源氏物語、俳句。過ぐる日、小山誠三氏に「日本一の百姓になれ」と(川中卒業後の進路を問われた佐々木太郎先生。国語の佐々木先生、近藤先生、田中先生。数学の石川先生。体育の松本先生。芸術の大沢先生、小名木先生。大川先生から晩翠訳の『イーリアス』を戴いたこと。牧野先生がワーズワースの『水仙』全英詩を誦んじ、深く解されていたこと。万葉集の歌も、既成の説では決して終らず「……ではないか」と、風巻景次郎直伝というより、さらに作品の心に迫る温かい理解をいつもなされていたこと。すべてが驚きであった。その中で賜わったご恩の数々は忘れることができない。きら星のごとく並い

る、そうそうたる、あるいは鬱然たる大家に、若輩がとつてい及ぶべくもないが、勉強せずにはいられない、そういう高校であり、職員室であった。奉職は渋谷健氏と同年。昭和二十年代の末から三十年ごろの回想を記して、深甚なる謝意に代えさせていただきたい。

わが心の ふるさと

旧職員 横田 洋(高4)

旧学制の最後の学年として川越中学校に入学し、六年間の在学の後、川越高等学校を卒業した私たちには、母校への愛着が現在の高校生との倍あるのは当然である。戦争直後の混乱期、欠乏期で、教科書と言えは粗末なタイプロイド判の印刷物を配られ、それを切つて綴じて小冊子にし、教科書として使った。個性豊かな先生方の授業が改めて思い出される。豊富なカラー挿絵や写真の豪華贅沢な教科書でなくても、本当の勉強はできるのだ。

また、当時は、学業半ばで予科練や海兵に行つた先輩たちが復学してき、その五年生の恐かつたことも、いまは懐かしい思い出である。

私が教職に就いて二校目が川越高校であった。

母校に骨を埋めるつもりでいたのだが、県の人
事異動の方針で転出せざるを得なくなり、十八
年間お世話になった母校を後にするのは、残念
などというありきたりの言葉では言い表わせな
い念いであつた。

その十八年間で記憶に新たなのは、水泳部顧問として、校長の西川先生や多くの先生方のご協力で五〇メートル・プールを造っていただいたことと、生徒会顧問として、学校紛争時、生徒会役員たちと一緒に、ときには泊りがけて、校長室前に坐り込んだ、いわゆる活動家の生徒たちと交渉を続け、問題解決に当たったことである。

紙幅の関係で多くを語れないが、とにかく川中・川高は「わが心のふるさと」である。

古典ギター部 発足の頃

旧職員 森江 進

古典ギター、こんな名のギターはない。本来ギターといえば、クラシックギターを指すものである。だのに、クラブ名を古典ギターとしたの

には、それなりの理由があつた。

クラブの発足した頃は、ビートルズ等のグループの音楽が盛んであつた。今日ビートルズというと、何か上品なイメージがあるが、当時の多くの年輩者にとっては、うるさいメタリックな音楽としか受けとられていなかった。そこに現れたのが、古典ギター部だつた。エレキによらない、古いままの楽器で演奏される音の良さを理解した何人かの生徒が集まって、同好会を作つた。ただギター同好会としたのでは、当時流行していたエレキギターと混同されるので、頭に古典をつけたのだ。顧問は松崎全良先生、部員は那須雅明、佐々木幸次(高18)等であつた。ビバルディやバッハの曲を演奏していた。

その後、私が顧問を引き継いだ。定期演奏会を開いていたが、聴きに来てくれる人は多くなかつた。しかし、部員は熱心で、練習のときは激論することもしばしばあつた。

全国コンクールに出場し進優勝した。そのとき、自由曲にビバルディの四季より春の第一楽章を演奏した。独奏者は萩原(鈴木)孝一(高26)だつた。曲の後半、三連音符の続く独奏部で、一瞬音が切れたときのことは今も忘れられない。しかし、難曲に立ち向かつたことが評価されたのだろう。もう、それも二十年以上昔の話になつてしまつた。

鬼と化した 体育教師

旧職員 萩原 秀雄

昭和四十一年体育科教諭として着任、昭和四十二年埼玉国体のバレーボール種目(教員の部)に選手として出場し優勝。当時の国民体育大会は今と異なり、国内では最大規模の大会で、各県は少しでも上位に行こうと、選手を集めていた。

選手の中には、ジプシー選手といつて地元を勝たせるために開催地を転々とする選手がおり、当時の一部の生徒は私をそれと誤解し、体育祭時に「ジプシー選手帰れ!」という大きな横断幕を応援席後方に掲げた。新米教師の私にとつては大変ショックな出来事であつたが、とにかく授業、部活動等で生徒に役立つように努力することと理解してもらおうと肝に銘じたことを今でも忘れていない。

しかし、生徒の理解を得るために私が選択したことは、生徒との距離を縮めることではなく、自分を大きく成長させてくれた日本大時代の厳しさを身にまとい、鬼と化すことであつた。生

徒達は私を最も恐れたに違いない。特に集団行動、四〇〇メートル走、持久走、水泳等は鬼教師の最も好む授業で、今日とは比較にならない想像を絶する授業であった。不満も多かったと思うが、県下有数の進学校の生徒達が体育、部活動に熱中してこそ文武両道が成り立つわけで、厳しく接したことは有意義であったと今でも確信している。

ジブシーとなることもなく、日本一の体育祭や授業、そしてバレーボール部の全国優勝を夢みて選手と共に流した汗と涙、自分の持てる力の全てをぶつけた川高十四年間の歩みに悔いはない。

授業の思い出

田職員 宮根 七郎(高12)

東京オリンピックの開催された昭和三十九年から十八年間、体育の教員として母校に勤務いたしました。

「毎時間苦しかったが、記録の更新が励みになった」。「クラスの雰囲気、仲間の真面目な姿勢に引っぱられて、走力が高められた」。ラ



カット・吉田行男(高21)

ンニングにも技術があり、また気合の必要性や大切さを知った」。「走っていて苦しい時、お互いに声をかけ励ましあうことで、級友間に親密感や連帯感が生れた」

これは、昭和五十四年度一学期における四〇〇メートル走の授業(約二か月間)を終了したあとの三年生の感想の一部であります。

当時、社会は高度経済成長期のただ中であつて、国民の体力低下、青少年の耐久心の希薄化が指摘されていたが、川越高生の持久力(二五〇〇メートル走)が高く、県平均を二〇秒も上回っていた。県下でも広く注目されていて、県教育委員会から、このことについて二年間の研究を委嘱され、体育科として受けることとなりました。このことはあえて生徒に伝えず、調査研究、工夫を重ねて授業の充実を旨とした結果、県平均を三五秒も凌ぐ成果となりました。

生徒の理解力の素晴らしさと真面目な取り組み

みの深かったことが、なつかしく思い起こされます。彼等も三六、七歳となり、各界で活躍中と思われます。

思い出

田職員 石井 正雄(高7)

人にはいろいろな出会いがある。私は、越生という田舎町に生まれた。終戦時には越生一坂戸間に一両編成のガソリンカーしか走っていなかったが、七年後には電化された。私の通学はその年からである。川越市は、さすがに大きな城下町であった。母校川越高校は、その城趾にあった。旧制川中の面影が残る威風堂々としていた。その象徴はくすの木である。

漱石の『坊っちゃん』に登場する先生のように母校の先生方にもアタ名があつた。まだご存命の先生方がおられるので具体例はさけるが、個性にあふれた先生方が多数おられたことを物語っている。次に、新入生にとつて、先輩の指導による校歌練習の特訓が強烈な印象として残っている。入学後二か月間、毎日昼休みと放課後に招集がかかった。辛かったが校歌を通して

母校愛が生れたと信じている。また、野球場や陸上競技場で、全校生徒が丸となって校歌を歌う機会も多くあった。

さて、幸運なことに、私は昭和四十五年度より教師として母校に戻れた。しかし、この年に東大紛争が激化し各地に学園紛争が発生した。母校にも「学校の民主化」という荒波が押し寄せてきた。制服、制帽の廃止もその一つであった。私は、卒業生の一人として母校の伝統を守ることに必死になっていたことが想い出されるのである。在職中「君たちはいま幸せか」と傲をとばしたこともある。いずれにせよ「母校は育ての親」である。川越高校の今後益々のご発展をお祈り申し上げます。

木造校舎との 惜別

旧職員 内河輝臣(高10)

母校に教員として教える立場で戻ったのが、卒業以来十六年振りの昭和四十九年四月であった。このとき校舎鉄筋化の第一期工事が終了した直後で、五階建てのモダンな校舎が各階二教室分ひよろりと縦長に完成したところであった。

その後、鉄筋化が完成する昭和五十四年十月の第四期工事終了までの六年間は工事の連続で、振動と騒音の絶えない劣悪な環境の中での授業が続いた。

工事の進行に伴って、昭和二十七年に建造され、我々が三年間世話になった木造モルタル二階建ての校舎が取り壊されていった。

私が着任した昭和四十九年には木造本館の東半分はすでになく、校長室、事務室などがあつた西半分も昭和五十年二月に解体された。柱に太いロープが掛けられ、ブルドーザーが力強く後退すると同時に、あの由緒と風格のあつた玄関部分が屋根もろとも土埃をあげて崩れ落ちていくのを見たとき、一つの歴史が終わつたという実感とともに、一抹の寂しさが胸をよぎつた。しかし、そんな感慨にしみじみ浸るいとまもなく、解体作業は情け容赦なく進み、いくたの歴史と伝統を刻んだ木造管理棟校舎はあつてなくなり消えた。

四階建ての理科棟と新築中の五階建ての谷間に残された最後の木造校舎のオンボロ教室での授業は、生徒には本当に気の毒であった。しかし、私が二年生のときに過ごしたと思われる教室での授業は、自分の座席や左右前後の級友のことなど、当時の懐かしい記憶がよみがえり、私にとっては貴重なタイムスリップのひとつとき

となった。その木造校舎も、昭和五十四年二月に第四期工事の開始と同時に解体され、我々の汗と青春を直接惚ぼせる木造校舎は完全に姿を消してしまった。

新任の ころ

旧職員 小泉 功

私が川越高校に社会科の教員として赴任したのは一九五〇年であった。戦後間もない頃で、一年生から三年生まで、いずれも旧制中学校からのもち上がりで、川越高校に六年間も在学するはめになった生徒達であった。三年間だけ入学した生徒とは異なり、当時の生徒は教員の癖から学校の施設の隅々までよく知っており、二階の天井裏に入つて、目的の教室に辿り出るとまでやつてのける人もいた。

当時は五日制で土曜日は休みであった。食糧事情は極めて悪く、開校当時から木造校舎で授業をしていたが、教室の床には、必ず米粒が散らばっていた。農家の生徒が学校帰りに町場で売り捌き、小遣い銭にしていたのである。

新任の私が最初に知り合った先輩の先生は化

学の木村先生であった。海軍士官出身で山岳部の顧問をしていた。彼の下宿は夕方から山岳部の集合場所になっていた。天井に一本の紐が張られ調理用具がぶらさがっていた。軍艦の内と同様でちよつと引つ張るとすぐ取れる仕掛けになっており、坐ったままでも用がたりた。そこでカレライイスのつくり方や、試験問題をつくるためのガリ版おこしを初めて教わった。木村さんの問題は、物語風にいる多くの事象が記され、その所々にテスト問題が挟まっている。いやでも一応全部読まなければ解答できないユニークなものであった。今思えば、小津安二郎の映画の様にゆつたりと時が流れていくような教育現場だった。最近、その頃の卒業生も還暦を迎え、時々ハイキングに連れて行ってもらうが、楽しさが倍増し感謝に堪えない。

思いつく まま

定旧職員 長根 愛之亟

うぐいすの鳴き声をする。宿直室の外に聞こえる。珍らしい事だと思って窓の外を見ると、その声は小使室の方からだだった。

初春の外はまだ寒いけれども、元気のよい声を聞くと、その姿が見たくなり宿直室を飛び出して小使室に行つて見る。小使のおじさんが、うぐいすの籠を小使室の窓にぶらさげて水と餌をやるところだった。前の藪で十日程前につかまえたのだそうだ。宿直室でうぐいすの鳴き声を聞くのはうれしいことだ。

もう十時を過ぎたのに校長室の電灯がついている。おかしいと思つて行つて見ると、渡辺校長が一人で、床一面に書いた画仙紙をひろげて見いつている。「どうしたんですか」「うーん習字の練習だよ。気に入ったのが出来たら文化祭に出そうかと思つているんだが、一五〇枚書いてみたが気に入ったのが出来ないんだよ」といつていた。

午後九時半頃、帰ろうと思ひ校門を出て二百米ばかり来ると、第一小学校の前の校門よりの所に車が止まっている。車の故障かなと思ひ気にもとめず過ぎ去ろうとすると、どうも小久保校長の車のようなので、おかしいと思ひ車を覗くと、中に小久保校長がいい気持ちらしく眠っている。ははん休んでいるのかと思ひ、私はそのまま家に帰つてきた。

西川校長が赴任して来られた頃、校門から左側の所に給食室を建設した。思いがけない話だったのでとても嬉しかった。又、それと同時に校庭の照明も立派に出来て夜間の運動場も利用出来、テニスコートも出来て夜間でも自由に出来るようになり、又一段と生徒達も活動的になった。

今から思うと定時制の高校に勤務した事を幸せだと思つている。

定時制での 思い出

定旧職員 松永利男

定時制勤務十二年、思い出も多い。

十五、六歳から遠く親元を離れ、勉強との両立に励んでいた健気な生徒たち、その一人一人を思いやる教師であつたらうかと、今自責の念にかられる思いが多い。

卒業を一年後にひかえ、転校した生徒がいる。進級できないと告げた時、一言の不満も口にもせず、震える手を握りしめていた。

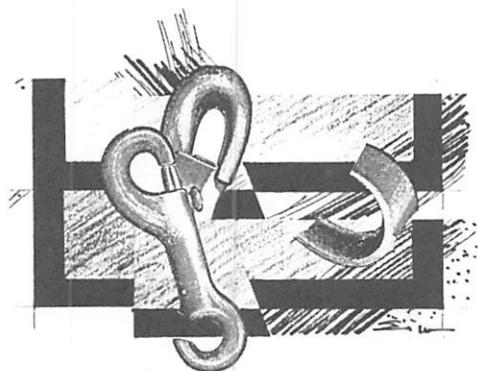
一年過ぎて、卒業証書を手嬉しそうに報告

にきた。思いもよらないことだった。修学旅行で一晩中ゴーパー、翌日の自主行動学習に参加できなかった生徒がいた。

その一人はいつも明るい生徒だが、入学当初はホームシックの連続で、寄宿寮の窓から故郷の西を向いては涙していたと書かれた作文を思うと、数少ない、つかの間の開放だったのかも知れない。

ボーイフレンドを下校途中の交通事故で亡くした生徒もいた。

そのことを電話連絡した時、泣き崩れた彼女は、授業が始まってからもなかなか登校してこなか



カット・鈴木英明(高16)

った。終わり頃やっと顔を見せ、泣きながら言った言葉は忘れられない。

「今日は学校へ来たくなかったが、先生が心配すると思っただけ。」

私は胸がふるえた。信頼に応える教師でなければの思いを新たにしたら。

どこまで実践できたやら、はなはだ心許ない次第だが、弱い私を、支え、励ましたのは、このような生徒たちの存在であった。

思い出 二題

定田職員 吉田 正(高10)

サッカー部誕生・優勝

「先生、藤枝東から来たんでしよう。俺達サッカー部を作りたいんですけど顧問になってくれないませんか？」赴任早々の私に、四年生の鈴木君が交渉に来た。それが川高定時制サッカー部の誕生になった。

当時(昭和四三年)の川高定時制職員室はけっこう保守的だった。大分反対されたが、若かった私は突っ走った。当時の練習試合及び公式戦の戦績を記す。何と、創部早々県大会優勝を

遂げたのである。もっとも、每晚九時から練習し、日曜日には練習試合をこなし、必死の覚悟で臨んだ意気込みが天に通じたのかもしれない。

- ①×川高0―3 国鉄大宮
- ②×川高0―4 全日
- ③○川高5―3 大東クラブ
- ④△川高1―1 椿本
- ⑤○川高2―0 東洋インク
- ⑥△川高3―3 椿本
- ⑦×川高1―2 全日
- ⑧×川高2―3 国鉄大宮
- ⑨×川高1―2 浦高
- ⑩○川高3―2 朝霞

〈西部地区予選〉①川高6―0 所沢 ②○川高2―1 川工 ③○川高5―1 朝霞(代表に)

〈県大会〉○川高4―0 大宮工

○川高5―3 浦和通(優勝)

全定の軋轢

私が今勤務している飯能高校の文化祭を「榛の木祭」というが、それは全定共催ではない。定時制は、我関せず焉えんをきめこんでいる。

その点、川高の「くすのき祭」はずっと共催で仲良くやってきた。両者の良い関係の記事は数多くあると思うので、私は思いきって、数少ない両者の一触即発の思い出を記す。

九月某日、川越高校グラウンドで行われる予定の定時制西部地区体育大会サッカーの部が、グラウンド状態不良として取り止めになった。勤務の都合上順延の出来ない定時制生徒のため、川越高吉田教諭はす早く対応、市内富士見中グ

ラウンドを借りて何とか日程をこなした。吉田教諭と全日制野球部監督との間で激論が交わされた模様。(後に二人は共に野球部の部長・監督として仲の良いコンビとなる)。

思い出は 尽きないが……

定山職員 増田 佳子

二十二歳の春、川越高校定時制で教員生活の第一歩を踏み出した私には、「川越高校」は「ふるさと」である。

高校時代から教師になりたくて大学を選び、サークル活動では、中・高校生を相手にしてきたといういっぱしの自信を持ち、「働きながら学ぶ生徒を教える」と気負って乗り込んだつもりは、まず、「専任の女子教員は初めて」という、大人ばかりの職員室で、さらに、何割かの一年生を除いては、少なくとも一年は、先に社会を知っている生徒を前に、いかに自分が、何も知らない、ただの娘に過ぎなかったかかと思いが知らされた。それが、最初の痛い思い出である。以来九年間、ここで夫と出会い、結婚し、出産しながら在職したが、「教員として大事

なことはみんな、川高で、先輩や生徒に教わった」と思っている。

——思い出は尽きないが、「初めての……」というところで、思い出したことがある。

それまで、職員トイレは男女共用であった。定時制は共学だったし、私以外にも、事務室や給食室や、保健室に、女子職員はいたのに、やはり、「男子高」の職場だったのである。「女子職員用のトイレを設置してほしい」と校長にたのんだ。「そういえば、女子職員が若干いますね」と言われて憤慨したが、それでも、まもなく、プレハブの「女子職員専用トイレ」が設置された。嬉しかった。一九六七ころの話だが、そんなことも、川高の職場、百年の歴史の中の、話のひとつにはなるだろうか。

年上の生徒に 教えられ

定山職員 説田 三佐子

私が川越高校定時制に勤務させて頂いたのは、一九七九年度からの十年間だ。誇張ではなく私自身にとって、また一教師としても、教員生活の最初に定時制高校を経験したことが、どれほ

ど有り難かったかと思っている。

赴任当時、上級学年には二十二歳の私よりも年上の生徒が何人もいた。その人生経験の豊富さ、そこからくる存在感に圧倒された。新米教師の私が上滑りの授業をして、すぐにその底の浅さを見破られては批判を受けた。また、クラスで、不登校の級友や退学間近な級友も交えて創作劇を完成させ、上演の後、感激のあまり皆で抱き合って泣いたりしたこともあった。

定時制の生徒像はそれこそ二、三年単位で変化していたが、全日制高校を「ドロップアウト」してきた生徒たちが、多様な生き方、多様な人間の存在する定時制の中で、今までの自分の殻を破って生き生きとしていく姿もたくさん目の当たりにした。経験が浅く、人を引き付けるような人間性も持ち合わせていない私にできることは、誠心誠意生徒に向き合うことしかなかった。しかし、その中で生徒から、人間の素晴らしさ、よりよく生きようとする自己回復力の確かさ等、身をもって教えてもらうことができた。

職場の熱心な先輩や同僚に恵まれたことと合わせ、川高で過ごした十年間は、私の宝だと思っている。

いくつかの こと

鳴田勝郎(中2)

私は一九〇六(明治三九)年四月十二日生まれで、今年(一九九八年)で満九十二歳です。

川中に在学したのは、大正八年四月から十三年の三月までです。日露戦争の翌年に生まれたので勝郎と命名したと親から聞きました。

入学したときは驚きととまどいの連続でしたね。小学校と違って、服装からつきあう人まで生活が一変してしまつたわけですから。それでも、良い友、良い先輩、良い教師に恵まれて幸せでした。

友達といえば皆秀才でしたね。でも、がつがつ勉強したわけではありません。私の家が桶川街道の道筋でしたので、よく皆が集まり、福呂屋で餅菓子を買ってきて、入間川の土手でひばりの声を聞きながら食べたものです。また、同志会の安部立郎先輩などには大変影響を受けました。

先生方も素晴らしかった。学者であると同時に人情味にあつい先生が多かったですね。逆立

ち先生といわれていた野山忠幹校長、背が高くても大きいので馬というあだ名の村本先生は新体詩を朗々と詠ってくれたし、飯田先生は歩く辞書のような人でした。「まんちゅう(万年中尉の略)」といわれた教練の小松中尉もなかなかの人情家でしたよ。

黒が好きで、いつも黒い服を着ていたため、カラスと渾名されていた美術の久保先生、私はこの先生を一番尊敬して、よく遊びに行きました。人間的な温かさや深みがあり、しかも「売る絵は描かない」といった高潔無欲な人でしたから、休日や夜などには、いつも町の文化人や近所の人たちが、先生を慕って大勢遊びに来ておりましたね。

同期生も年々減っていくので、今はお経などを読み、九十年の人生を振り返って心静かな毎日を送りております。いつお迎えがきてもいいようにね。(談)

母校 追慕の記

山田勝利(中26)

私たちが入学したときの学校長は野山先生で

した。私が深い感動を受けたことは、校長先生の朝の訓話です。その上に、先生は朝礼台の上で逆立ちをなさるのです。肉体の健康とバランス感覚を鍛える必要を教示されたものと思います。この頃、川中では剣道が全盛を極めていました。剣道部の遠征には「勝つてこい」と叱咤を挙げて帰校するのが常でした。

古武士の風格の校長先生でした。

野山先生の次にお迎えした学校長は、穏和な岩泉先生でした。語尾に東北弁の訛りのある語り口でした。大正ロマンの漂うお人柄とお見受けしました。

岩泉先生が赴任された城下町川越には、川中創立の十年前に、川中の前身といわれる私立川越英和学校が存在していました。その英和学校の喜多教師は、岩泉先生の母校である東京大学の先輩でした。両氏の親交によって、川中はますます地域社会に貢献するに至ったといえます。敗戦後の混乱もようやく収まりかけた一九五九(昭和三四)年に、恩師の先生方をお招きして、川中二六回卒業生一同が氷川神社に参集し、同窓会「二六会」を結成しました。以来、毎年一回会合を開き、現在に至っております。

恩師の先生方のお姿もいまはなく、参会する会員もわずか一〇名程度ですが、たとえ数名に

なつても氷川の社に集い、高らかに校歌を歌いたいと誓いあっています。

母校百周年に 際して

小室勝男(中42)

私は一九四四(昭和一九)年に川越中学を卒業して、早くも五十数年を経てしまいました。

戦争の最も激しい時代でした。当時の川越中学生としての誇りである白線一本の学帽を身につけて、私たち学生は軍事教練の鉄砲を担ぐとき以外は、正門からの出入りを禁じられていました。それでも、素晴らしくすの木の大木を抱えた物静かな雰囲気のある学校には、何とも言えぬ大きな幸せをしみじみ感ずるものがありました。

卒業とともに医学の道を進むこととなり、一九五〇(昭和二五)年に医師免許を受け、一九五五年に医学博士の学位を取得できました。一九六六年に川越の地で独立しました。その時、病院に何という名前をつけようかと悩みましたが、川越中学の校歌の中に歌われている「紫句う武蔵野の」の一言が深く忘れがたく私の脳裏に刻まれておりましたので、迷うことなく武蔵

野外科病院と命名して出発することといたしました。

わずか二四床の小さな病院でしたが、自分の所属する外科を主体とし、三六五日、二四時間体制の救急病院として出発しました。その後、患者から信頼される病院とすべく努力を続けた結果、武蔵野外科病院から武蔵野総合病院へと発展することが出来ました。

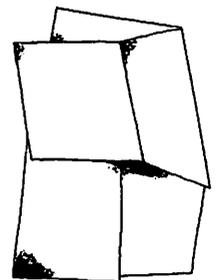
一九九七(平成九年九月九日救急の日)には、厚生大臣より救急医療功労者としての表彰を受けました。それは、何にもまして母校の校歌に発する武蔵野の地で、その名前に恥じない病院としなければならぬといった責任感からであったことに間違いありません。

私は川越中学に学んだことが、この人生に大きなものを与えてくれたことに心から感謝いたします。

川越高校は 原点の一つ

内田康夫(作家)

名探偵「浅見光彦」の事件簿を書いている僕のところには、全国各地から自分の住む土地を



カット・中野武夫(高13)

書いてくれという手紙が舞い込みます。じつは「川越を舞台に——」という注文も少なくありません。浅見光彦倶楽部というファンクラブがあつて、その会員にも川越在住の人が少なくないのです。川越が小説の舞台として魅力的かどうかはともかくとして、ほんの短い期間とはいえ、川越高校に籍を置いた僕としては、近い将来、ぜひ書いてみたい想いのある土地ではありません。

昭和二十六年頃、僕は東上線志木駅に近い内間木村というところに住んでいました。父親が医者で、疎開先の秋田から出てきて、東京へ戻る前の期間、その診療所に勤めました。そんなわけで、川越高校にはわずか十か月足らずしか在籍しませんでした。当時のことは鮮明に、懐かしく憶えています。

いまのことは知りませんが、当時の川越高校は地元周辺の学区ではエリート校の一つだったはず。老朽校舎で、設備はお世辞にもいいとはいえませんでしたが、生徒たちは真面目で

礼儀正しく、まだバンカラの雰囲気を残して、伝統ある校風を感じさせました。

その頃、音楽と農業と美術が選択科目になっていた。僕は美術を選びました。中学時代を秋田の山村で過ごしたから、美術の素養などまるつきりなく、木炭デッサンなどというものがあることすら知らなかったほどです。消しゴム代わりに使うパンを、腹が減って、いつも半分は食ってしまいました。むろん、技術のほうも稚拙なはずですが、生まれて初めて描いた石膏デッサンを先生に褒められました。その美術教師がじつにいい人で、勉強は嫌いだっが美術の時間だけは待ち遠しかった。そのまま川越高校に在学していれば、絵描きになっていたかもしれません。

惜しむらく、道を踏み違えて作家になってしまいました。その原点の一つに川越高校があったことは疑いもない事実でしょうね。

ブリテイツシュ・ イングリツシュ

落合栄一郎(高)

川越高校昭和三十年卒のものです。いろいろ

の思い出がありますが、その当時おられた英語の木島平二郎先生のことを書いてみたい。というのは恐らく私のその後の人生の決定に先生の影響が大きかったと思うからである。先生は高校の教師としてはちょっと変わった経歴の持ち主であった。第二次世界大戦前は商船大学で教鞭をとられており、戦後川越高校にいられた。

商船大学におられたときは、学生の航海演習について、練習船で太平洋を何度か往復されている。また詩人の上田敏のお弟子さんで文学をよくし、小説家を志された。先生にはこのふたつを総合した、J. Conrad(ポーランドの船乗り)で、難破してイギリスに漂着してイギリスに帰化)の小説の翻訳が文庫本にある。先生はその当時のこととて、航海で行かれた先を除いては外国で暮らされたことはなかった。しかし実に立派な British English を話され、その当時狭山に駐留していた米国軍人に感心されたそうである。

こういう先生だから、授業は普通のレッスンの他に、先生の太平洋横断の航海の話をはじめ、英文学 (Stevenson, Dickens など) に関する雑談が多かったし、われわれもそちらの話を喜んだ。どういふきつかけであったかは覚えていないのであるが、先生に招待されて、仲間数人と先生のお宅に伺ったことがあり、それをまた

きつかけにして、先生の持つておられる洋書を拝借することができるようになった。その当時は洋書を手にいれることは非常に難しかった。原書をこうして高校生が読むというのも先生の影響なしでは考えられない。

川高の正門から時の鐘のある方向にいくと大通りにぶつかるが、そこに古本屋があり、しょっちゅう覗いているうちに、Stevenson の "Treasure Island" を見つけて購入した。これが私が買った最初の原書である。これは船乗り達のスラングが多く、読むのに苦労したし、非常に不完全にしか理解できていなかったと思う。その当時は無論手に入るものは限られていたし、たまたまそこにあつたものしか手に入らない。

もつひとつその当時買ったものは、Everyman's Library にある George Gissing の "The Private Papers of Henry Ryecroft" であり、それは四十数年を経てまだ私の手元にある。この本は私のその当時の人生観にかなりの影響を及ぼした。それはともかく、こういう下地があつたので、東大に入ってすぐ有機化学の原書(英語)を読むのに抵抗はなかった。その延長で、ドイツ語の化学の参考書や、ロシア語の理論有機化学の教科書もいざれ読むことになった。今はドイツ語もロシア語も全然使えない

が。

しかし、この下地が後にカナダ、アメリカで生活することにあまりためらいを感じないでずんだ原因であり、それは木島先生の影響が多かったと思う。そういつたからといって、未だに英語では苦勞している。それは三十歳ころになってからこちら(アメリカ)に移住してきただからで、外国語をマスターするには若いほどよい。川高が百周年記念に海外の高校と交流をはじめめる計画のようであるが、遅きに失した感はあるが、早く実現されるように。また手伝うことがあれば、やりましよう。

化学部のこと

高野昇一(高14)

昭和三十四年に入学してすぐ、あの苛烈な体育系クラブの勧誘をすり抜けて、音楽部と化学部と図書部に入った。それぞれに興味があったし、実利的な理由もあった。三つのクラブとも一生懸命に活動した。特に化学には中学時代から特別な思い入れがあり、化学部に入れば好きだけ実験ができることだったので、暇さ

えあれば実験した。

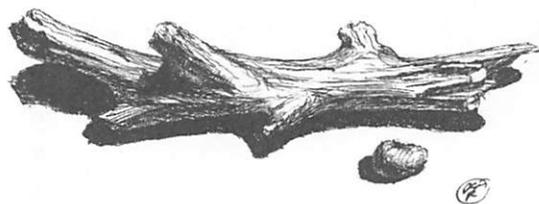
一年時のE組の教室は、木造二階建て校舎三棟の最奥で化学実験室の隣だった。いつも授業が終わると同級の松岡と一緒に、明天堂で買った岩永源著作の定性分析の小さな薄い本を持って実験室へ行き、金属塩や酸、アルカリ溶液を混ぜたり、沈殿を濾過したりして過ごした。今でもその時の銅やコバルト、ニッケルイオンの涼しげな、そして鮮やかな色を思い出すと心が震える。面白くて面白くて、ほとんど毎日実験室へ行った。

夕暮れてしまった帰り道に、松岡と心高ぶらせて、その日やった実験の話しながら、校門の側に立つ黒々と繁った大楠の、ひんやりした暗い葉影を通り抜けたことを思い出す。参考書に沿って一通りの実験が終わってからは、互いに種類のイオンの溶解液を出し合って、含まれるイオンを競争で当てっこをしたりした。その後、火薬を調合してマッチを作ったり、尿素樹脂を合成したり、心ときめかせていろいろな実験をした。

当時、化学部の顧問は内田一正先生(ろくさんの愛称で呼ばれていた)であったが、ほとんど助手の深見先生に教えていただいた。先生は当時大学生であったように記憶しているが、いつも化学室の隣の、薄暗い薬品室の窓側の机で

勉強されていた。熱心なクリスチャンであり、神の摂理と化学反応の仕組みを分かりやすく、興味深く説明してくださった。

現在の自分は医学関連の研究開発に従事しているが、この時の経験が、今ある自分に重大な影響を及ぼしていると思っている。高校を卒業してからは松岡に会っていない。松岡も大阪大学で活躍中とのことである。



カッタ・平 不二夫(高5)

グラマンから眺めた

一九四五 戦中明治校舎

松岡 章次 (高3)

1945……つまり昭和二十年は私たち川高三期生が旧制の中学に入った年で、その夏に大東亜戦争が終わり戦後が始まった年に当たります。

よいチャンスに恵まれ、当時の記憶をたよりにその頃の「川中」の絵を蛮勇をもって描き遺すことが出来ましたが、それはどういう訳か、昇ったことのない空からの眺めになりました。

日本の昔の絵巻は雲の上から覗いたものが多いようですが、飛行機も無かったのにと当時の絵師の想像力の豊かさに感心してしまいます。私の鳥瞰憧憬は先祖のDNAのせいなのかも知れません。

あの頃の飛行機といえば、空襲の連想が先立ちます。所沢・入間川・坂戸・高萩などを根城にあんなに沢山飛んでいた翼に日の丸の飛行機はほとんど見かけなくなり、遙か彼方の高空には二年先輩の書かれた『遠い飛行機雲』の主人公、B29の大編隊の雲吐く銀翼が光り、身近な低空には硫黄島や沖の空母から飛んで来る艦隊そっくりのムスタングP51、ピア樽に物差しし

様な翼をつけたグラマンF6Fが雲霞の様にやって来て、毎日のように機銃掃射をやりました。個人差はあるものの本物の銃弾が身近に迫る、という年代だった訳で、「客体的」な立場では

ありますが、空の上から物を想像するクセはこの時頭のなかに刷り込まれた様な気がします。絵画など全く描いたことのない私が何故川中の鳥瞰図に取り組んだかというと、それは我々三期生が還暦記念の文集『おーい楠の木よ』を平成六年に刊行したことによります。ほとんど

全員が寄稿の呼びかけに応じるといふ盛り上がりようで楽しいものが出来上がりましたが、投稿の多くのテーマは戦中と終戦直後の強烈な体験記に集中していて、六年間あの明治校舎のことで過ごした味がどの作品にも溢れておりました。私の選んだテーマは川高悪童風雲録「爆弾小僧物語」という物騒な題名で、化学実験と称して大きな火薬玉を校庭で爆発させ、時節柄校長をはじめ多くの先生方にご心配をおかけした思い出でした。熱中するうちにこの駄文に挿し絵をとの思いがつのり病膏盲となりグラマンに乗

ってしまった次第なのです。また、本を面白くしようとの剽軽がエスカレートしてその当時の先生方・級友全員の渾名を余白や雲の所に書き込んで悦に入ったりしました。後日の物議は承知していましたが、「おッ、俺がここに居る」と面白がってくれる大人物ばかりで安心しました。私がこの絵を描こうとした理由はもう一つあります。それは文集の中で誰もが懐かしんだ川中の明治校舎が卒業後何年か後に、記念館として一部が保存されることもなく、二本の大楠を遺してこの世から姿を消してしまったことへのレクイエムの気持ちでありました。「人は歴史の臨場に一度しか立ち会えない」とはエジプト遠征の時のナポレオンの言だそうですが、最後の川中の姿を知る年代の卒業生として、稚拙なものでもよいから描いて遺したいということだったのかも知れません。



堂々ケース入り2巻本となった
高校三期生の「還暦記念文集」

定時制の五十年

一九四八年九月に発足した川越高校定時制は、

朝霞・所沢・入間川の三つの分校があり

一九五四年には生徒数一三〇〇名となり、

全日制の九〇〇名を大きく上回った。

中心校、分校の詳細な歩みをはじめ、素晴らしい仲間たちの輝きの刻ときを記す。

開校五十年、忘れ得ぬ日々の懐かしい思い出が、今よみがえる。

定時制教育の変遷と展望

前教頭 大澤克彦

一 定時制課程の設置

勤労青少年教育の歴史をみると、一八九四（明治二七）年の実業補習学校規定に、「日曜日または夜間等に授業時間を設けることが出来るものとする」とあるのが、明文で制定された始まりといえる。

その後、実業学校の夜間制（明治三二年）、青年学校（昭和一〇年）が発足した。やがて一九四三（昭和一八）年には中等教育の整備をはかった中等学校令で、今まで各種学校に過ぎなかった夜間中学が「夜間中学校」として正規の中等教育の課程として認められることとなった。

新制高等学校の定時制および通信制課程は、一九四七（昭和二二）年三月三十一日に公布され、翌年四月一日から施行された学校教育法によって設けられた新しい学校制度である。その後、一九五〇年に成立した「学校教育法の一部を改正する法律」により、夜間の課

程と定時制の課程が一本化され「定時制の課程」となった。この時、修業年限も「四年以上」と改められた。制定当時の学校教育法には、定時制および通信制教育について、次のように述べられている。

第四十四条 高等学校には、通常の課程のほか夜間において授業を行う課程又は特別の時期及び時間において授業を行う課程を置くことができる。

②高等学校には、通常の課程を置かず、又は前項の課程の一つのみを置くことができる。

第四十五条 高等学校には、通信による教育を行うことができる。

通信による教育に関し必要な事項は、監督庁が、これを定める。

第四十六条 高等学校の修業年限は、三年とする。但し特別の技能教育を施す場合及び第四十四条第一項の課程を置く場合は、その修業年限は、三年を超えるものとする。こ

とができる。

新しい教育制度が施行されてから五年後の一九五三（昭和二八）年には、「高等学校の定時制教育及び通信制教育振興法」が制定・公布された。この法律は、定時制通信制教育の基本ともいえる大変意義深い法律である。

埼玉県では、同年に定時制通信制教育振興会準備会が発足した。さらには、「高等学校の定時制教育及び通信制教育振興法」に基づき、定時制通信制教育総合計画協議会も発足した。三年後の一九五六（昭和三一）年には「埼玉県高等学校定時制課程・通信教育振興総合計画」が制定された。同年「夜間課程を置く学校における学校給食に関する法律」の施行をみ、生徒の勉学条件が大きく改善された。

学校数は、一九五九年に最高となり、その数は五五校を数えた。また、生徒数は一九五六（昭和四一）年に二万二、三〇〇名を超え在籍数の最も多い時期を迎えた。当時は分校数

も多く一九五五年に二四校を数えたが、県立不動岡高校騎西分校が一九八六年に廃校となったのを最後に、分校はすべて姿を消した。一九八五(昭和六〇)年六月の臨時教育審議会第一次答申で単位制高校について提言され、本県では一九八七年度に設立準備のための委員会が発足した。

一九九〇(平成二)年十月、埼玉県教育委員会では、埼玉県高等学校教育振興協議会に対し、「本県高等学校教育の充実・改善につ

て——社会の変化に対応する定時制通信制教育の在り方について——」を諮問し、一九九一年十二月十六日、埼玉県高等学校教育振興協議会より答申が出された。主な骨子は次の通りである。

1 適正な学校規模、学校配置について
2 教育内容の改善、履修形態の多様化・弾力化について

3 生涯学習とのかかわりについて
4 条件整備等について

この答申をもとに、教育局内で再編整備について総合的に検討を重ねた結果、履修形態の多様化・弾力化の一環として、一九九三年度から県立川越高校で修業年限三年制定時制課程が発足した。また、一九九八年度からは県立羽生高校が単位制による定時制課程としてスタートした。

一一二一世紀への展望

一九九五(平成七)年四月に発足した第一期中央教育審議会は、「二一世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の諮問を受け、翌年七月に、「ゆとり」の中で子どもたちに「生きる力」を育むことを基本とする第一次答申を発表した。

さらに、一九九七年六月には、「一人一人の能力、適性に応じた教育の在り方」、「大学、高等学校の入学者選抜の改善」、「中高一貫教育」、「高齢化社会に対応する教育の在り方」、「教育上の例外措置」について、第二次答申を発表した。

また、中央教育審議会の答申を踏まえ、教育課程審議会は、一九九六年八月、文部大臣から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、ろう学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」の諮問を受け、翌年十一月に「中間まとめ」を公表した。

このように、中央教育審議会答申や教育課程審議会の答申等を踏まえ、埼玉県高等学校教育振興協議会から出された答申を基に、今後、社会の変化に対応した定時制通信制教育の新たな進展を早急に図らなければならない。現在、埼玉県教育委員会では、「二一世紀いきいきハイスクール構想」において、県立高等学校全体の将来構想について検討を進めている。もちろん、その中で、新しい時代に対応した定時制通信制教育についても検討を行っている。

そこで、今考えられる「あるべき定時制高等学校の姿」、について述べておきたい。

現在、定時制高校に学ぶ生徒の多様化はま



1964年頃のくすの木、玄関、教室棟

すすす進んでいる。その一つに、働きながら学ぶ生徒は年々減少し、働いているといえる生徒でも、パートかアルバイトが多く、勤務時間は一定していない。また、無職の生徒を多く抱えている学校も少なくない。このような生徒が多く定時制で学ぼうとしている現状を考えると、定時制教育を魅力ある教育の場として発展させるためには、次の三点についてその役割としてとらえなければならない。

1 勤労青少年に対する後期中等教育機関としての役割

2 教育の機会の拡大の観点から、多様な履修形態を提供する後期中等教育機関としての役割

3 生涯学習の観点から、後期中等教育の教育内容を提供する教育機関としての役割

具体的には、能力的にも幅広い生徒が学ぶ以上、教育課程を編成する上で、生徒や学校の実態に対応する教科・科目を配当することである。また、生徒一人一人の個に応じた指導の充実を図る観点から、単位制の導入を積極的に進める必要がある。単位制の導入に当たっては、その趣旨を生かし、生徒の学習や学校生活を一層充実させていくため、生徒の能力・適性・興味・関心・進路希望等に応じた適切な科目の履修ができるようにすべきで

ある。

さらに、定時制で学ぼうとする生徒の就労実態である。先に述べたとおり、五十年の歴史をもつ夜間定時制の課程で学ぼうとしている生徒は、ここ数年の統計から見るとわずかな数値を残しているに過ぎない。このことから、これからの定時制教育機関は、生徒の就労実態に応じていつでも学べる場でなければ

県立高校将来構想懇話会報告

社会の大きな変化の中で、県教育委員会は県立高校将来構想(21世紀いきいきハイスクール構想)の策定を目指し、県立高校将来構想懇話会を設置した。これは懇話会報告の中から定時制教育にかかわるところを抜粋したものである。

*

2 新しい時代に対応した高校の編制に関すること

(1) 適正規模・適正配置
ウ適正配置

○単位制高校や総合学科を各通学区に配置し、県内のどの地域の生徒も通えるようにする必要がある。

(3) 定時制・通信制高校の充実

○定時制高校の役割が変化しているという現状を踏まえ、勤労青少年や社会人、多様な生徒を対象とした単位制による定時制独立校について、その充実を図るとともに、今後、地域バランスを考慮しながら、適正に配置するなど、定時制・通信制課程の再編整備を進め

ならない。

以上述べてきたように、学びたい時に学びたい勉強ができる。しかも、資格取得につながる教育が受けられれば最高である。このような教育改革ができるのが、現在の定時制通信制高校であり、一日も早くこのような教育機関が生まれることを望みたい。



る必要がある。

(4) 新しい発想の高校づくり

イいつでも学ぶことができる学校づくり

○多様な生徒も受け入れる定時制独立校を整備するとともに、全日制高校においても、不登校の生徒や中途退学者などが学びやすい環境を整備するため、単位ごとの認定の仕組み(単位制)を拡充したり、中途退学者などの転編入学の受入れを進めるなど、一層工夫していく必要がある。

○朝から夜まで開講して、その時間内で自分で選択して授業を受けられるような学校など、従来の枠にとられない学校の設置を検討する必要がある。

川越高校定時制五十年の歩み

1948

昭和23年

1952

昭和27年

1回卒

4回卒

1948

九月十五日、
中心校と三分校が開校

六月十四日、県教育審議会で定時制の設置方針が決定された。これに基づき、川越高校に、定時制課程として中心校、朝霞分校、所沢分校、入間川分校が設置されることになった。分校の

設置者は朝霞町、所沢町、入間川町、入間川町ほか五か



県が作成した定時制
生徒募集ポスター

村であった。早速、説明会が関係市町村で開催された。当時の「募集案内」によると、八月二十二日選抜、二十五日合格者発表、そして九月一日開校の予定であったが、実際は、予定より二週間遅れて九月十五日の開校となった。

入学者数は、教務用の入学者名簿によると中心校三学年一六名、二学年二三名、一学年一二五名、朝霞分校一学年三六名、所沢分校一学年五八名、入間川分校一学年三二名であった（朝霞分校では九月十四日の第二次合格者一〇名で四六名の入学となっている。所沢分校の入学者も七四名となっているので中心校、分校とも追加の合格があったようだ）。入学詮衡手数料五〇円、授業料は月五〇円であった。

朝霞分校は朝霞中学に併設、入間川分校は入間川町公民館に併設、所沢分校は所沢高校女子部に併設された。

中心校の主任は松田丑二先生。朝霞分校は木村信壽先生、入間川分校は大護八郎先生、所沢分校は鈴木睦雄先生が初代の主任となった。

この年、CIEのオスボン氏が来県、分校等の設置状況を視察した。オスボン氏は教育の機会均等と、あわせて敗戦後の日本復興のため、勤労青年を養成することが大事であるとし、定通教育の振興を強調した。

幻の鶴瀬・大井分校 一九四九年三月二十二日、第一一回教育委員会資料によると、新年度、新たに分校とするもの六校の中に、川越高校の分校として鶴瀬・大井分校の名があるが実現されなかった。

1949

生徒会が発足
第一回卒業式挙行される

五月二十三日生徒会発会式が行われた。生徒会のあり方について、一九四九年二月、浦

和第一女子高校において自治委員会の幹部講習会がもたれ、埼玉軍政部教育課のピーア氏の講演があった。内容は、生徒会活動は民主主義の縮図に等しき働きをなすこと、役員の出発方法と任務、学校と生徒会、政治活動、宗教活動等についてであった。GHQによる民主化政策のあらわれであった。

生徒会には文芸部、美術部、音楽部、演劇部、野球部、卓球部、排球部、山岳部、籠球部、庭球部がおかれた。

後援会、PTA発足 定時制は戦後の混乱期、産声をあげた。経済事情が極度に悪い時期、働きながら学ぶ生徒のため、後援会が組織され、初代会長に神山義男氏が就任した。神山氏はその後長く定時制教育振興のため尽力された。分校においても後援会、PTAがつくられていった。入間川分校では九月二十日後援会が発足。賛助会員九三名、団体会員として入間、堀兼、水富、奥富、柏原の各村が加入した。

定時制秋季大運動会が舉行される 運動会は各分校の予選会を経て、十月二十三日青空の下、本校で実施された。男女合同の運動会に最初とまどいはあったが、結果的にはスムーズに運営された。中心校女子生徒の模擬店もつくられた。一〇〇以競争、仮装行列、パ

ン食い競争、むかで競争、アベック競争など教員も交えて行われた。正午近くには入間川分校女子のスクエアダンスが披露された。

スキー教室実施 二月十日夕刻、川越駅を出発、上越石打スキー場へと向かった。平塚白井両先生の指導の下、二三名は練習に励んだ。翌朝は丸山まで登り、頂上から急斜面を雪煙もすさまじく一気に滑降する者もいた。一九五〇(昭和二五)年三月、第一回卒業式が行われた。最初の卒業生は中心校のみで講堂において七名の卒業生に荒井実校長より卒業証書が授与された。

1950 むさしの文庫開設

五月二十七日、一部生徒会「むさしの文庫」が開設された。蔵書数四八冊からの出発となった。

そして、次年度からは予算措置をして充実に努めるとともに、図書室の確保をするということが決議された。これに基づき、翌年家庭科教室が図書室にあてられた。生徒会予算約一六万円のうち四万円がむさしの文庫に割かれ、図書委員会が運営を担当した。図書委員会は、資料を取りよせながら、購入図書を選定、分類、貸し出しを行った。第一回目は

◆一九四八年

- 4・1(木) 学校教育法第二条により、埼玉県立川越高等学校発足
- 9・15(水) 定時制課程開校

中心校 全日制課程に併設
朝霞分校 朝霞町に開校
入間川分校 入間川町に開校
所沢分校 所沢町に開校

◆一九四九年

- 4・8(金) 第二回入学式
- 15(金) 入間川分校校舎移転

入間川中学校校舎へ
5・3(火) 遠足(相模タム)
23(月) 生徒会発会式
7・24(日) 人文地理巡検(飯能及び高麗村方面)
25(月) 夏季休暇中課外授業開始

- 9・16(金) 開校一周年記念式典
- 10・23(日) 第一回秋季大運動会
- 1・9(月) 本日よりストーブを焚く
- 2・6(月) 予餞会 演劇部公演「息子」
- 11(土) スキー講習会(新潟県石打)
- 3・4(土) 第一回卒業式(第一期生七名)

◆一九五〇年

- 4・8(土) 第三回入学式
- 6・18(日) 校舎改築協力会結成
- 9・16(土) 開校記念日
- 11・6(月) 入間川分校校舎移転

入間川小学校下校舎及び町公民館

◆一九五一年

- 4・8(日) 第四回入学式
- 10(火) 新入生考査
- 5・4(金) 校内体育大会(ソフトボール)
- 19(土) 校内体育大会(バレー・テニス)
- 7・5(木) 応援歌制定

一八三冊を購入した。

入間川分校独立校舎落成 一九五一年二月十日入間川分校は現在地の小学校を増築して独立校舎とした。開校以来転々としていたがやっと自前の校舎に落ち着くことができた。

1951 第二回西部地区体育大会で各クラブ活躍

第二回西部地区定時制高校体育大会は、七月十六日、小川高校を会場に、本校と小川、松山、坂戸、飯能の五校が参加して開催された。陸上男子総合優勝、高橋晃一〇〇位一位男子走り高跳び渡辺日出男一位。排球男子優勝。卓球女子優勝。庭球川越B優勝。

この年演劇部の活動も活発で九月十八日開校記念日を祝してチェーホフ原作、喜劇「結婚申込み」、

秋田雨雀作「国境の夜」を上演した。

中高演劇発表会には狂言「瓜盗人」、予餞会には久保田万太郎作「釣堀にて」



演劇部の活動は分校でも盛んだった(入間川分校)

を上演した。

1952 入間川分校別科新設 初めての修学旅行実施

新学制の

発足当時、

県内の高校

進学率は三

五割程度で、

農村におけ

る経済事情

女子教育に

対する古い

考え方から、

女子には二

年程度の定

時制が適当と

考える傾向が

あり、家庭科を主

とする別科を

設置する事にな

った。そして、

県内一々番目の

別科が入間川分

校に設置され

昼間の授業が開始された。しかし、新たに設置された別科も、一九六四年の「埼玉県勤労者等振興協議会」中間答申で「昼間別科」に学ぶ生徒は勤労青少年とは思われない」との見地から、翌一九六五年から全県的に募集停止となり、入間川分校でもこの年募集は行われなかった。



第一回修学旅行(4回生)

13 (金) 校内体育大会(卓球)

22 (日) 分校対抗

9・16 (日) 西部地区体育大会

時局講演会

(NHK解説委員 館野守雄氏)

18 (水) 演劇部発表会

26 (水) 三年、遠足(昇仙峡)

30 (日) 秋季大運動会

10・10 (水) 校舎改築着工

12・16 (日) 進学適性検査

3・22 (土) 第三回卒業式(川越会館)

◆一九五二年

4・9 (水) 第五回入学式(川越会館)

11 (金) 入間川分校別科開設

6・8 (日) 遠足

7・5 (土) 校内体育大会

8・9 (土) 設備資金募集開始

10・3 (金) 四年、修学旅行

26 (日) 県定通総合体育大会

12・16 (火) 進学適性検査

2・11 (水) 校舎落成式

3・6 (金) 第四回卒業式

修学旅行が実施される 初めての修学旅行

が実施された。場所は伊勢神宮、二見ノ浦、奈良、そしてあこがれの京都であった。三十三間堂、清水寺、知恩院、平安神宮、銀閣寺、嵐山をバスで廻った。

旅行の行程は、今は亡き渡辺進(定4)の作成した綿密な計画によって行われた。渡辺は当時の生徒会長であり、後に入間川分校教諭や本校全日制の教諭を務めた。

1953

昭和28年

1957

昭和32年

5回卒

9回卒

1953

第二回県下定時制通信制 総合体育大会で活躍

一九五三年二月に体育館が新築落成し、部活動の練習に磨きがかかった。第二回県下定時制総合体育大会は、十一月一日、大宮競技場を中心に陸上、庭球、排球、野球、籠球等多種目に熱戦が展開された。野球は準優勝、バスケット、バレーボールは三位、庭球は女子の田中・原島組が二位と好成績をおさめた。部活動をみると、バレー部は、所沢分校から男女二名ずつを補充して大会に臨んだり、籠球部は、分校との試合をはじめ川越商、川越農、飯能高二部、松山高三部、坂戸高と練習試合をしてチーム力の充実を図り、西部地区大会で準優勝の結果を残すことができた。柔道部は、中心校戸田・鈴木・斉藤、所沢分校日暮、入間川分校森の五名で十月四日の西部地区大会に出場、十二月の西部地区大会で

は全日制、定時制合同試合が行われ、四位に入賞した。野球は、西部地区予選で所沢分校が中心校を下した。

1954

生徒定員一三〇〇名

定時制の生徒定員は増加の一途をたどり、中心校、分校を合わせて一三〇〇名となり、全日制の九〇〇名を大きく上まわった。

全定合同文化祭の開催 十月三十日の文化祭は、初の全・定（中心校、分校）の合同文化祭として実施された。中心校からは科学部演劇部、美術部等が参加した。演劇部は小山内薫作「息子」を上演した。

籠球部が十一月十四日、都立北野高校と初の親善県外試合を行った。英語部は文学部に名称を改めてから三年になるが内容は英語を



入間川別科生の調理実習

- ◆一九五三年
 - 4・10 (金) 第六回入学式
 - 5・19 (火) 腸チフス予防接種
 - 9・22 (火) 四年、修学旅行
 - 10・4 (日) 西部地区体育大会
 - 11・1 (日) 県定通総合体育大会
 - 1・24 (日) 県駅伝競走
 - 3・10 (水) 第五回卒業式
- 別科生二〇名第一回卒業式

◆一九五四年

- 4・12 (月) 第七回入学式
- 5・23 (日) 遠足
- 9・26 (日) 秋季大運動会
- 10・10 (日) 遠足
- 13 (水) 四年、修学旅行
- 24 (日) 県定通総合体育大会
- 30 (土) 全定合同文化祭
- 1・23 (日) 県駅伝大会
- 3・8 (火) 第六回卒業式

◆一九五五年

- 4・11 (月) 第八回入学式
- 9・4 (日) 西部地区体育大会
- 10・2 (日) 県定通総合体育大会
- 16 (日) 秋季大運動会
- 23 (日) 遠足
- 24 (月) 四年、修学旅行
- 12・3 (土) 文化祭(中心校・分校合同)
- 1・8 (日) 川越一松山駅伝
- 15 (日) 生活体験発表会
- 29 (日) 関東芸能大会
- 3・12 (月) 第七回卒業式

◆一九五六年

- 4・10 (火) 第九回入学式
- 9・9 (日) 県定通総合体育大会
- 9・29 (土) 入間地区PTA総会

中心とした活動をしてきた。秋季の西部地区英語弁論大会では、二年の松井三郎が全日制の生徒を制して、堂々の一位となった。

1955

高文化祭、入間川分校で開催

社会部は国会見学や恒例の夏季休業中の実態調査を行った。吾野村高山での実態調査は、民家を借りての合宿であった。調査の目的は集落の発達史と山村の経済機構であった。各クラブとも十二月三、四日入間川分校で開催された合同文化祭で成果を発表した。

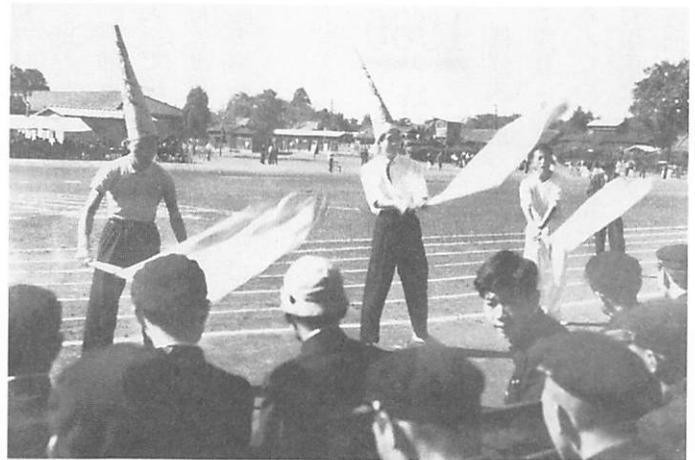
十月二日、県総合体育大会は雨天のため中止続出。陸上の部は雨天の中、競技が行われ走り幅跳びで所沢分校の石井章次が二位、砲丸投げでは朝霞の並木仙が二位と活躍した。卓球部女子の奥住が決勝で越谷高校を破り優勝した。

1956

定時制教室に蛍光灯設置なる

教室に蛍光灯が設置され、教室が今までと違って青白い光で、たいへん明るくなった。

学芸大会は、東部や北部などで地区大会として行われていたが、全県的なものとなり第一回埼玉県定通学芸大会が本校を会場として



中心校、分校3校合同陸上競技会(1955年)

開催された。生活体験発表会、音楽会、舞踏(体育ダンス)会があり、絵画、書道、手芸等の作品も展示された。

この年、夜間課程をおく高校の学校給食に関する法律が公布され、文部省は定時制生徒の給食に本格的に取り組むこととなった。

1957

高橋 剛先生逝去さる

十一月四日、闘病中の定時制主事高橋剛先

- 30 (日) 県定通総合体育大会
 - 10・7 (日) 秋季大運動会
 - 16 (火) 四年、修学旅行
 - 11・11 (日) 文化祭(中心校・分校合同)
 - 1・20 (日) 県学芸大会(川越高校)
 - 3・7 (木) 第八回卒業式
- ◆一九五七年
- 4・11 (木) 第一〇回入学式
 - 5・26 (日) 遠足
 - 9・17 (火) 全国定通研究会
 - 27 (金) 文部省学力調査
 - 29 (日) 県定通総合体育大会
 - 10・6 (日) 秋季大運動会
 - 15 (火) 四年、修学旅行(関西)
 - 1・26 (日) 県学芸大会(鴻巣高校)
 - 3・13 (木) 第九回卒業式

生が逝去された。先生は昭和二十四年四月中心校に赴任され定時制教育に心血を注いでこられた。小仙波の光西寺での告別式には、生徒、卒業生、職員などおよそ二五〇人が参列し、別れを惜しんだ。

県学芸大会は一月二十六日鴻巣高校で開催された。学芸大会に音楽部は牧野統先生の指導により「むなしく老いぬ」「冬の夜更け」の二曲を熱唱、二年連続優勝を飾った。絵画では小嶺要吉が三位、写真では佐藤節子が三位に入賞した。

1958

昭和33年

1962

昭和37年

10回卒

14回卒

1958

朝霞分校新校舎落成

朝霞町、大和町、片山村から米軍及び政府に対して接収地の払い下げ要請が出されていた。一九五四(昭和二九)年、朝霞町議会は、一・二四(一)を朝霞分校用地として払い下げ要請を決議、一九五七年大蔵省は払い下げを認可、この年独立校舎が完成した。

音楽部は図書館の新築により一階視聴覚教室と新しいピアノのもので、牧野先生、篠沢



1958年に完成した独立新校舎と朝霞分校生

先生の指導により練習に励んだ。バスケット部は分校对抗、西部地区大会、県大会に出場した。決勝で男子は浦和高校、女子は浦和一女高に破れ準優勝となった。

1959

修学旅行に大雨の影響 野球部県大会で初優勝

四月二十三日、四年生による修学旅行は、大雨による土砂崩れのため、二時間遅れて出発。二十四日朝三時十五分京都で乗り換え最初の目的地に向かった。旅行先は四国、京都奈良方面であった。

西部地区大会二年連続優勝の野球部は、県大会で越谷高校を2対1で下し、野球部創立以来初優勝を飾った。籠球部男子は県大会決勝で熊高と対戦、タイムアップ一分前でリード、24対23で優勝。柔道部も県大会で浦商を3対2で破って優勝した。

1960

待望の給食室完成

待望久しかった給食室が、総額二〇八万円ですべて完成した。国の補助対象は調理室のみのため、地元負担は一二六万円となり、教育振興会、同窓会、地元商店からの寄付等各方面の理解と援助により完成を見た。

◆一九五八年

- 4・11(金)第一回入学式
- 23(水)四年、修学旅行
- 5・2(金)図書館落成
- 29(木)定通研究発表
- 6・1(日)遠足
- 9・24(水)向上賞授与式
- 26(金)映画教室
- 28(日)県定通総合体育大会
- 10・5(日)秋季運動会
- 11・9(日)文化祭
- 1・11(日)川越一松山駅伝
- 2・1(日)県学芸大会(浦和一女高)
- 3・10(火)第一〇回卒業式

◆一九五九年

- 4・9(木)第二回入学式
- 23(木)四年、修学旅行
- 5・24(日)遠足
- 9・26(土)創立六十周年記念祭・全定合同作品展
- 10・2(金)関東地区研究会
- 4(日)県定通総合体育大会
- 10(土)音楽コンクール(浦和)
- 11・1(日)秋季運動会
- 1・31(日)県学芸大会(久喜高校)
- 3・11(金)第一回卒業式

◆一九六〇年

- 4・9(土)第一三回入学式
- 20(水)給食室竣工式・教育振興会設立
- 22(金)四年、修学旅行
- 5・31(火)PTA創立総会
- 7・17(日)分校对抗
- 9・26(月)第二部後援団体連絡協議会設立
- 27(火)向上賞授与式
- 10・2(日)県定通総合体育大会
- 23(日)一、二年、遠足

給食費は一

食二五円、メ

ニューはパン

またはうどん

で、利用する

生徒は日に二

三〇名。給食

室建設をきつ

かけに、教育

振興会が設立

された。教育

振興会の会員には、生徒の出身市町村にも団

体会員として参加してもらい支援をお願いし、

今日に至っている。

六月一日、三浦覚先生が交通事故により逝

去された。生徒も教師も悲しみに包まれた。

野球部は、県総合体育大会の決勝戦で秩父

農高と対戦、延長一六回引き分け、両校とも

優勝となった。柔道部は県大会決勝戦で松山

高校を5対0で下し圧倒的な勝利。卓球部男

子も団体優勝した。

1961

風紀委員会発足

七月一日、生徒会専門委員会の一つとして、風紀委員会が発足した。規定をみると「秩序



アルマイトの食器が目立つ給食風景

ある学校生活を楽しみ、学生としての品位を保ち、自主的に健全な校風樹立につとめることを目的とする」となっている。

文芸部は十一月十二日、所沢の秩父学園を訪問。十二月三日、全校生から寄せられた慰問品をもち、生徒会長、文芸委員等八名で再度訪問。これは一九六六年ごろまで続いた。

秩父学園は福祉施設で、所沢郊外の静かな林の中に、八歳から二五歳まで一二五名が生活をしてきた。

運動部は、柔道部が県体育大会で連続優勝。



「径」下校後、鈴木道場で猛練習した部員の努力と熱心な指導の賜である。

1962

屋外照明灯が寄付される

二ヶ所の屋外照明灯が山田照明社長山田繁夫氏(全日制中33)から、後輩が伸び伸び運動ができるようにと寄贈された。

山岳部は、四月の武甲山登山に始まり、六月鷹取山、七月は個人山行、八月は八ヶ岳、九月、十一月は個人山行、十二月三ツ峠、一

- 30 (日) 体育祭
- 1・22 (日) 西部地区学芸大会
- 3・11 (土) 第一二回卒業式

◆一九六一年

- 4・8 (土) 第一四回入学式
- 5・10 (水) 四年、修学旅行
- 9・10 (日) 西部地区体育大会(六種目優勝)
- 10・21 (土) 向上賞授与式
- 21 (土) 県定通総合体育大会
- 29 (日) 大運動会
- 11・26 (日) 振興会役員県外視察
- 28 (火) 西部地区雇用主懇談会(川工)
- 2・18 (日) 予餞会(松竹館)
- 3・12 (月) 第一三回卒業式

◆一九六二年

- 4・10 (火) 第一五回入学式
- 16 (月) 四年、修学旅行
- 5・13 (日) 遠足(二本木峠・長瀬)
- 7・23 (月) 川越地区ETA設立総会
- 8・24 (金) 地区PTA
- 9・29 (日) 分校対抗球技大会
- 9・29 (土) 全定合同文化祭
- 30 (日) 県定通総合体育大会
- 10・28 (日) 体育祭
- 11・9 (木) 新校舎竣工式

屋外照明灯完成

- 1・27 (日) 西部地区学芸大会(小川)
- 3・10 (日) 第一四回卒業式

月武甲山と山行を行った。

柔道部は、県大会に中心校馬場、川島徳道、入間川分校佐藤、新の混成チームで臨み四年連続総合優勝。

1963

昭和38年

1967

昭和42年

15回卒

19回卒

1963

入間川分校 中田善枝さん、不慮の厄に遭う

校門前に市内循環バスの停留所があり、駅までの足の便となっていたが、十一月一日より時刻表改正のため、給食時間を五分短縮し、終業時間を午後八時五十五分に改めた。

五月一日、下校途中の入間川分校別科中田善枝さんが、何者かに殺害された。この事件は、被疑者として逮捕された青年に対する部落差別事件として今も再審請求が続き、「狭山事件」として全国的な問題となっている。

1964

卒業式は新装の市民会館で挙行される

卒業式は例年体育館で行われていたが、この年初めて市民会館を借りて、全日制のプラスチック付きて挙行された。卒業生一四四名。スキー教室を草津で実施。初めての生徒も

多く、リフトで上がり歩いて下りる者もいた。華道部が発足。真来生流青山先生の指導のもと練習に励み、文化祭にも出品。応援部も男女各一五名で発足。体育祭では全日制のプラスチック付きて合わせて女子がバトンを披露した。

運動部では、県定通大会で、野球部が全国大会県予選で優勝した強豪川口工業を相手に二時間三十分の熱戦の末、五年ぶりの優勝。陸上部は、九月十三日分校との記録会で選手を選出、県定通大会に臨み総合優勝。

珠算部は、第一六回全国高等学校珠算競技大会に初参加(二年小川、三年須田、岡住)。全国から一〇五校四〇九名が参加。



市民会館での卒業式(写真は翌年度)

1965

野球部、全国大会初出場

野球部は、念願の全国大会に初出場を果たし、明治神宮球場では、初陣ながら準々決勝へ進出した。大会期間中の五日間は事業主も有給休暇で支援。また、前年創部の応援部に

一九六三年

- 4・9(火)第一六回入学式
- 23(火)四年、修学旅行
- 5・12(日)遠足
- 6・1(土)後援会結成
- 8・1(木)地区PTA
- 9・28(土)文化祭
- 10・28(日)体育祭
- 11・16(土)能力開発研究所第一回テスト
- 1・19(日)西部地区学芸大会
- 2・1(土)「紀要」創刊号発行
- 3・15(日)第一五回卒業式

一九六四年

- 4・9(木)第一七回入学式
- 23(木)四年、修学旅行
- 5・31(日)遠足(赤城山)
- 7・26(日)分校対抗競技大会
- 9・25(金)文化祭
- 11・1(日)体育祭
- 27(日)県定通総合体育大会
- 7(土)入間川分校防音鉄筋校舎竣工式
- 27(金)西部地区学芸大会
- 3・7(日)第一六回卒業式

一九六五年

- 4・1(木)入間川分校別科募集停止
- 9(金)第一八回入学式
- 5・30(日)遠足
- 7・25(日)分校対抗競技大会
- 8・12(木)野球部県大会優勝
- 9・10(金)校舎、給食室落成式
- 10・8(金)体育祭
- 18(土)文化祭
- 10・8(金)体育祭

よる学生服に白手袋での応援は、炎天下、長時間休みなしであった。

施設面では、五〇坪プールの着工、食堂の拡張、家庭科教室の完成と、飛躍的に整備された。食堂が拡張されたことにより、今まで三回に分けて行っていた給食が二回でできるようになった。

新しい教育課程が実施され、女子の家庭科は必修となった。全日制が男子校のため、春日部高校と本校に予算措置がとられ、調理室、被服室が完成した。

陸上部は、所沢駅伝で、分校との混成チームを結成し、社会人、全日制高校と争い、大会新記録で三位に入賞。

1966 プール、屋外照明竣工

六月八日、照明付きの五〇坪プールが完成。水泳部もつくられ、県定通大会では、バタフライ、背泳、自由形、平泳ぎで活躍。創部一年めで伝統ある他校を大差で破り、完全優勝をなしとげる。また、夏季休業中には、水泳教室も開かれるようになった。

定通振興法による国庫補助で一八〇坪の校庭照明施設が完成。これによって、体育の授業、陸上部や球技のクラブ、学校行事全般が

やりやすくなった。

バスケット部が県定通大会で、男女総合優勝、ソフト部も初優勝を飾る。陸上部は、一年女子の宮沢が全国定通大会走幅跳びで四位に。山岳部は二三名が白馬で合宿。

1967 修学旅行、この年より 新幹線利用

一九六四年から運行している新幹線を、修学旅行で初めて利用。生徒の中には、初めて乗車する者も多く、「ひかり」のスピードに目をみはった。今まで、東京―京都間を六時間かかったのが、二時間五十分に短縮された。パンとうどんの給食メニューに米飯給食が加わり、ミルクも脱脂粉乳から生牛乳となった。

水泳部は、定通大会で男女総合優勝。学徒大会では、二年の大沢が、百坪二百坪背泳に入賞、千葉で行われた関東大会に出場した。国体予選にも男子一名、女子二名が出場した。



50坪プールで鍛えた水泳部の活躍が目立った

- 22 (金) 四年、修学旅行
- 11・28 (日) 西部地区学芸大会
- 1・14 (金) 成人者祝賀式
- 30 (日) スキー教室
- 3・20 (日) 第一七回卒業式(川越市民会館)
- 31 (木) 入間川分校別科廃止
- ◆一九六六年
- 4・1 (金) 朝霞・所沢分校新一年募集停止
- 8 (金) 第一九回入学式
- 5・27 (金) 開校記念講話
- 28 (土) 開校記念日
- 6・8 (水) プール完工式、校庭照明灯完成
- 10 (金) E.T.A総会
- 7・24 (日) 分校対抗競技大会
- 9・24 (土) 文化祭
- 10・2 (日) 県定通総合体育大会
- 16 (日) 体育祭
- 19 (水) 四年、修学旅行
- 12・4 (日) 西部地区学芸大会
- 3・12 (日) 第一八回卒業式(川越市民会館)

◆一九六七年

- 4・1 (土) 入間川分校新一年募集停止
- 朝霞分校を朝霞高校に、所沢分校を所沢高校に委託
- 4・8 (土) 第二〇回入学式
- 5・28 (日) 遠足(三浦半島)
- 8・20 (日) 分校交歓会(名栗)
- 9・3 (日) 県定通総合体育大会
- 23 (土) 文化祭
- 10・1 (日) 体育祭
- 11・5 (日) 四年、修学旅行
- 26 (日) 定通二十周年記念式典(埼玉会館)
- 12・3 (日) 西部地区学芸大会(市民会館)
- 3・17 (日) 第一九回卒業式(川越市民会館)

1968

昭和43年

1972

昭和47年

20回卒

24回卒

1968

明るい太陽の下で
夏季クラブ合同合宿

夏季クラブ合同合宿が東松山青年の家でも
たれた。参加は、生徒会本部、ソフト部、音
楽部で、一泊二日で行われた。明るい太陽の
下での部活動は、いつもの蛍光灯、照明灯の
下とは違い、体の疲れとは別の充実した時間
を過ごす。

教育業務を委託していた朝霞高校と所沢高
校で朝霞、所沢分校最後の卒業式が行われた。
庭球部、陸上部は第一回全国定通大会に埼玉
代表として出場。水泳部は県大会三年連続
優勝。ソフト部は県大会二位。

1969

入間川分校の廃止

一九七〇年三月七日、入間川分校廃校式が
行われ、翌八日三〇名の卒業生が中心校の卒

業生とともに卒業。ここに、入間川分校は二
十一年七か月の幕を閉じた。

サッカー

部が発足。

初陣ながら

県定通大会

で優勝。水

泳部は、県

定通大会四

年連続優勝。

美術部は、

西部地区大

会において

油絵の部門

で、金銀銅

賞を独占。科学部は、女子部員班研究の化粧

クリームが、くすのき祭で好評。サンプルが

あつという間に売り切れ。

本校定時制教育振興会の寄贈によりテニス

コート的一面に照明灯が設置され、夜間の授

業、部活動が可能になった。

1970

新体育館落成
生徒心得検討

重層の体育館の完成により、のびのびと運
動ができるようになった。部活の意気込みも



初陣ながら県定通大会で優勝したサッカー部

◆一九六八年

4・8(月)第二回入学式

5・12(日)遠足(妙義山)

7・21(日)朝霞高校とクラブ交換会

24(水)登山部夏山登山(白馬)

8・16(金)全国定通体育大会(庭球・陸上)

9・21(土)文化祭

22(日)県定通総合体育大会

29(日)体育祭

10・14(月)四年、修学旅行(関西)

23(水)明治百年記念祝典

3・9(日)第二〇回卒業式

◆一九六九年

4・8(火)第二二回入学式

26(土)HR合宿(四年B組) 東松山青

5・25(日)遠足

28(水)創立七十周年記念日

31(土)HR合宿(四年C組) 東松山青

年(の家)

6・19(木)寄生虫検査

7・19(土)水泳大会

9・20(土)文化祭

10・5(日)体育祭

20(月)四年、修学旅行(関西)

11・23(日)西部地区学芸大会(飯能)

3・7(土)入間川分校廃校式

8(日)第二一回卒業式

◆一九七〇年

4・8(水)第二三回入学式

5・30(土)体育館竣工式

31(日)遠足

6・10(水)新体育館落成記念バレーボール

大会

7・22(水)千葉県水害見舞

違ってきた。

生徒心得検討委員会が設置された。検討の中心は「服装の自由」であった。十二月の生徒総会で承認された。

視聴覚委員会が設置され、毎日の放送と生徒会行事の放送関係を担当した。九月のくすのき祭では、三Aの中里文子が、全日制の放送劇に出演。定

時制コーナーでは委員会として、「にんじん」(ルナル作)を放送した。

水泳部が、県定通体育大会で、五年連続優勝。陸上部は、町田、塩尻が全国大会出場。



全国大会に出場した町田、塩尻たち陸上部

1971 山村校長の言葉に見る 定時制の現状

この年山村良夫校長が赴任された。生徒会報に載った山村先生のことばに次のような一節がある。「……私が定時制に夢見るのは、全日制の垂流からの脱却である。時間に余裕

のないことは絶対的な定時制の宿命である。

このことを十分に覚悟して、定時制生徒の心がまえができ、学校の教育計画のあり方が決定されるべきであろう。……掛け声ばかり大きくて、その実定時制教育に対し、本当にやる気があるのか、勤労青年教育を振興する気があるのかと……国をはじめ行政当局にも問いたいところだ……。」

テニス部女子全国大会出場。陸上部昨年につづき塩尻が二百斤ハードルで、全国大会に出場した。

1972 バレーボール男子 県大会優勝

体育祭に向けて各学年とも一生懸命準備をしてきたが、台風のため体育館での実施となつた。体育館ではあまりにも狭く、十分なことができなかった。

生活体験発表、弁論大会は年々盛んになり前年から名称が校内体験発表会から、生活体験発表・弁論大会となる。大会審議委員会もつくられた。

給食委員会は、アンケートを取り、人気品目の中から「希望給食」と称して、給食メニューに取り入れてもらった。第一回目は、鶏の唐揚げとマッシュドポテトであった。この

24 (金) 林間学校
15 (火) 体育祭
10 (土) くすのき祭
18 (日) 遠足

19 (月) 四年、修学旅行(関西・四国)
12 (水) 全校討論会
3 (日) 第二回卒業式

◆一九七一年

4 (木) 第二四回入学式
5 (火) 四年、修学旅行(関西)

30 (日) 遠足
7 (水) 校内球技大会

16 (金) 校内生活体験発表・弁論大会
9 (日) 体育祭

19 (日) 県定通総合体育大会
10 (土) くすのき祭

3 (日) 遠足
11 (日) 定通教育をよくする会討論会
3 (日) 第二三回卒業式

◆一九七二年

4 (土) 第二五回入学式
5 (日) 遠足(江ノ島・鎌倉)

9 (月) 体育祭
10 (日) 県定通総合体育大会

7 (土) くすのき祭
10 (火) 四年、修学旅行

15 (日) 遠足
3 (日) 第二四回卒業式

年から米飯給食が週二回となる。

バレーボール男子は県大会優勝。陸上部は、全国大会へ四人出場。塙は全日制陸上部の合宿に参加した。

1973

昭和48年

1977

昭和52年

25回卒

29回卒

1973

給食費大幅値上げ 各教室に網戸

物価の大幅上昇により、給食費も一万二〇〇〇円から一万六〇〇〇円へと大幅な値上げとなった。オイルショックの影響が給食を直撃した。オイルショックの影響は節電や文具類の使用にも及び、テスト用紙の更紙は三三〇円が二〇〇円近く

にまで高騰し、職員の使う鉄や印肉などは共用で使用するようにとの指示が県から出た。夏になる



秋の県大会で優勝した野球部

と蚊や昆虫に悩まされていたが、各教室に網戸が取り付けられたことにより快適な授業ができるようになった。

この年から定時制生徒への負担軽減政策の一環として教科書が無償となった。

野球部は、夏の全国大会県予選で惜しくも三位。しかし、秋の大会では、全国大会に出場した小鹿野高校と決勝戦で対戦、3対1で破り優勝した。

剣道部は、県大会団体三位、個人は全国大会出場を果たす。

1974

軟式庭球部大活躍

庭球部は念願の全国大会に三年生の伊藤文子と野崎千秋が出場した。秋の県大会も優勝を飾ることができた。柔道部、陸上部が休部となりサッカー部が再発足した。珠算部が廃部となる。時代の流れか。創部されたサッカー部は川越工業高校を破り、西部地区大会初優勝を飾る。

この年の十二月、定時制課程の生徒を対象に修学奨励費として月額三〇〇〇円を卒業まで希望者に貸与する法律が制定された。卒業した場合は返済が免除されるため、たいへんな朗報ではあるが、退学した場合は全額返済

◆一九七三年

- 4・9(月) 第二六回入学式
- 10(火) 管理棟改築工事着工
- 5・13(日) 遠足(富士五湖)
- 9・15(土) くすのき祭
- 23(日) 体育祭
- 10・2(火) 四年、修学旅行(関西)
- 28(日) 遠足
- 11・18(日) 学芸大会
- 25(日) 定通教育をよくする会
- 3・10(日) 第二五回卒業式

◆一九七四年

- 4・8(月) 第二七回入学式
- 5・26(日) 遠足(妙義山)
- 9・14(土) くすのき祭
- 29(日) 県定通総合体育大会(テニス優勝)
- 10・6(日) 体育祭
- 14(日) 四年、修学旅行(京都)
- 27(日) 遠足
- 3・9(日) 第二六回卒業式

◆一九七五年

- 4・8(火) 第二八回入学式
- 20(日) 管理棟増築工事着工
- 5・18(日) 遠足(科学技術館)
- 8・2(土) 林間学校
- 9・14(土) くすのき祭
- 28(日) 県定通総合体育大会
- 10・12(日) 体育祭
- 19(日) 遠足
- 20(月) 四年、修学旅行(四国・広島)
- 12・18(木) 管理棟増築工事竣工
- 3・7(日) 第二七回卒業式

◆一九七六年

- 4・8(木) 第二九回入学式
- 5・23(日) 遠足

しなければならず、退学した生徒にとっては厳しい現実が待っていた。そのため貸与を希望する生徒数は数名にとどまっている。一九七八年度生の貸与額は月額一万二〇〇〇円である。

1975

四国・広島への修学旅行

テニス部は四年の伊藤と野崎が全国大会で選んで優勝、前年につづき全国大会に出場した。剣道部は指導者の北村尚義先生が転出したため、部活動も思うにまかせない状況になっている。水泳部は試合がなく、実力も発揮できず低調な一年であった。

この年の修学旅行は、四国、広島であった。参加者は二五名で、男子の参加率が悪かった。この学年の男子は年齢も高い者が多く、飲酒喫煙ができない修学旅行を敬遠したのか、職場を休めなかったのか男子はわずか五名であった。原爆ドームの前では、写真ではわからない当時の様子が伝わり、戦争の悲惨さを肌で感じることができた。門限を守らない生徒一〇数名がこっそり宿にもどると入口には藤野先生が仁王立ちで待っていた。

1976

バスケット部県大会優勝

全日制では、学園紛争をきっかけに卒業時の各種表彰を撤廃したが、定時制には優等賞 E T A 賞等いろいろな賞があった。この年職員会議で賞を全廃する事にした。理由はただかだか三〇数名の卒業生に差別感を与えたくないということだったが、翌年からは生徒の励みになるからと賞が復活した。

バスケットボール女子は県大会に優勝した。



県大会で優勝したバスケット部女子

1977

各学年一クラスになる 坂上先生フジテレビに登場

中学生の減少にともない、定員も三二〇名であるが、実態は各学年とも一クラス、全体で二二六名となった。

この年の三月の卒業生は二七名、四月の新

8・7(土) 林間学校(川越市山の家)

9・11(土) くすのき祭

10・10(日) 体育祭

17(日) 遠足

17(日) 四年、修学旅行(京都)

1・29(土) クラブ予餞会

3・6(日) 第二八回卒業式

◆一九七七年
4・8(金) 第三〇回入学式

5・15(日) 遠足

8・23(火) 管理棟建築工事着工(音楽室、美術室等)

9・17(土) くすのき祭

10・9(日) 体育祭

16(日) 遠足

16(日) 四年、修学旅行(京都)

3・12(日) 第二九回卒業式

17(金) 管理棟建築工事竣工

31(金) 図書館改築工事竣工

入生は二九名であった。

フジテレビの「教育シリーズ」に新任の坂上裕美先生が取り上げられた。新任研修時にフジテレビから声がかかり、フジテレビが学校に取材にきた。ヘルメットをかぶりバイクに乗ってさっそうと通勤する坂上先生の姿、授業風景、給食室で行われた謝恩会等の撮影があり、五分程度の番組に編集されて全国に放映された。謝恩会の席では四年間の思い出に感極まって泣き出す生徒もいた。

テニス部が全国大会に出場した。

1978

昭和53年

1982

昭和57年

30回卒

34回卒

1978

新入生二五名と最低を記録

生徒数の減少が続き、この年の新入生は前年をさらに下まわり、二五名となった。五月一日現在の生徒数をみると一年二七名、二年三二名、三年三二名、四年二七名、計一一七名であった。

特別棟増築工事にとまない、生徒会本部室が解体された。

1979

八十周年記念式典が挙行される

十一月十七日土曜日、本校創立八十周年記念式典が行われ、生徒に記念の手ぬぐいが配布された。

生徒会活動が活発で、上級生がよく下級生を指導。毎年夏休みには生徒会本部主催のキャンプがあり、この年は名栗で実施、多数の

参加者があった。生徒会活動の一環としてサマーキャンプはこの後も続いた。

全校宿泊研修は、秩父の青少年野外活動センターで実施。

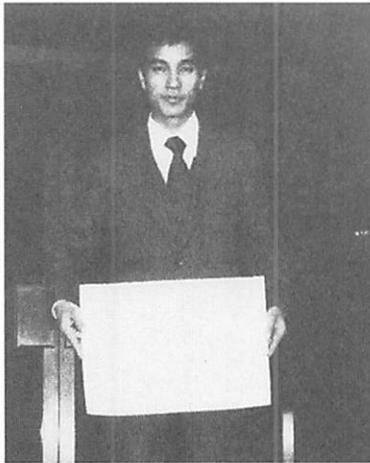
バレー部男子が全国大会出場、二回戦に進出した。テニス部も全国大会に出場した。

1980

佐藤利夫「わたしの選んだ道」が県代表に選ばれる

県定通生徒生活体験発表会で、四年生佐藤利夫の「わたしの選んだ道」が最優秀賞に選ばれ、県代表として、東京虎ノ門の国立教育会館で開かれた全国大会に埼玉代表として出場した。

岩手から埼玉にできて、定時制に通うかたわら、自動車整備士の資格を取得するために努力した経験が語られた。



生活体験発表で県代表に選ばれた佐藤利夫

◆一九七八年

- 4・8(土)第三一回入学式
- 5・14(日)遠足
- 9・9(土)くすのき祭
- 10・8(日)体育祭
- 13(金)四年修学旅行(奈良・京都)
- 15(日)遠足
- 1・12(金)特別教室棟増築のため、定時制生徒会本部室等解体
- 3・11(日)第三〇回卒業式
- 27(火)特別教室棟増築工事着工

◆一九七九年

- 4・9(月)第三二回入学式
- 5・20(日)遠足
- 7・21(土)体育祭
- 24(火)水泳教室
- 9・8(土)くすのき祭
- 10・7(日)県定通総合体育大会
- 28(日)四年、修学旅行(鳥取・松江・萩)
- 31(水)特別教室棟増築工事竣工
- 11・17(土)八十周年記念式典
- 18(日)西部地区学芸大会
- 3・9(日)第三一回卒業式

◆一九八〇年

- 4・8(火)第三三回入学式
- 5・31(土)全校宿泊研修
- 7・9(水)体育祭
- 22(火)水泳教室
- 9・13(土)くすのき祭
- 10・5(日)県定通総合体育大会
- 29(水)四年、修学旅行(萩・広島)
- 11・2(日)遠足
- 3・8(日)第三二回卒業式
- 4・8(水)第三四回入学式

このころから全日制を中途退学した生徒の転編入が目立つようになってきた。

全校宿泊研修は、五月三十一日～六月一日の一泊二日で秩父の野外活動センターで実施された。夜遅くまで語り合い、翌日はゲーム、フォークダンス、山登り、ソフトボールと盛りだくさんの行事をこなし、楽しい二日間をすごした。

テニス部は昨年に続き全国大会に出場。

1981 修学旅行 萩、津和野、広島方面

この年の修学旅行は、萩、津和野、広島倉敷コースをたどった。

中国地方の歴史、自然に触れることに加え、広島平和記念公園、原爆資料館を訪れ平和の尊さを心に刻むことを目的とした。



原爆慰霊碑の前で平和を誓う

生徒の結束力が強く、ほとんどの生徒が参加した。

陸上部は全国大会で、二年生の今野格尚が走り高跳びで三位に入賞した。

生徒会活動では、文化祭以外でも、生徒会本部役員が中心となって、各種委員会（クラス委員会、視聴覚委員会、新聞会報委員会、体育委員会、保健委員会、生活委員会）の活動が行われた。

1982 雨に見舞われたくすのき祭

九月十一日、十二日のくすのき祭は、台風一八号の直撃をうけ、十二日は朝から強い風雨となったため十一時に中止された。定時制担当の前夜祭は、十日夜、体育館に場所を移しファイヤーストームはできなかったが盛り上がりを見せた。生徒会本部による劇「俺達の青春」が上演された。

県予算の関係か、全校参加の宿泊研修ができなくなる。一学年のみ一泊二日を実施。

十月二十八日、二十九日、全校討論会が開かれた。分科会では「人生をどう生きるか」、「ホームルームと私」、「職場と学校における対人・友人関係」、「TVによる私たちの生活への影響」、「僕らにとって学校って何？」

- 5・23(土) 全校宿泊研修
 - 6・25(木) 体育祭
 - 7・15(水) 水泳教室
 - 9・12(土) くすのき祭
 - 10・4(日) 県定通総合体育大会
 - 25(日) 四年、修学旅行(萩・広島)
 - 25(日) 遠足
 - 11・15(日) 西部地区学芸大会
 - 3・7(日) 第三三回卒業式
 - 25(木) テニスコート照明改修工事竣工
- ◆一九八二年
- 4・8(木) 第三五回入学式
 - 5・29(土) 一年、宿泊研修
 - 6・3(木) 体育祭
 - 18(金) 校内生活体験・弁論大会
 - 7・15(木) 水泳教室
 - 9・11(土) くすのき祭
 - 10・10(日) 県定通総合体育大会
 - 11・3(水) 四年、修学旅行(広島・京都)
 - 7(日) 遠足
 - 3・6(日) 第三四回卒業式

をテーマに熱心な話し合いがもたれた。

柔道部は二年佐藤隆、四年本田和男が全国大会に出場した。陸上部は県大会優勝、全国大会に出場した。走り高跳びで三年生今野が四位に入賞した。テニス部の男子、卓球部は全国大会に出場した。

各学年ともクラス構成の定員となり、教職員の数が最少となった。全体的に家族的になつた時期でもある。

1983

昭和58年

1987

昭和62年

35回卒

39回卒

1983

全国大会 テニス決勝戦進出

テニスの全国大会は八月十四日から十七日の日程で開催されたが、台風のため個人戦は中止となった。せめて団体戦を、ということ

で急遽川口市営体育館で男子三三三チームが対戦した。本校代表選手を加えた埼玉チームは決勝進出を果たし、惜しくも兵庫に1対2で敗れた。



全国大会で準優勝(男子団体)したテニス部

一九八〇年ころから、入学者に全日制や職業訓練校の中途退学者、中学時代不登校の生徒等が目立つようになってきた。これを受けて、新入生の保護者会を実施。一二名の参加があった。

第一六回西部地区学芸大会は本校が会場となり、各部門の発表と全体集会が行われた。八校三〇〇人が参加。生徒会本部は創作劇を上演した。

演劇教室は市民会館で「幸福」を鑑賞した。サッカー部は県大会で秩父農工を1対0で下し優勝。陸上部は県大会で女子が総合優勝。全国大会に四年今野、荻島、三年阿部が出場。卓球部も全国大会出場。

1984

砲丸投げで 四年阿部一元全国大会二位

この年音楽同好会が誕生したが、校内でのバンド活動が認められず、存続が危ぶまれた。クラブの活動が目立った年である。陸上部では全国大会に出場した阿部一元が砲丸投げで二位に入賞。阿部は四〇〇gにも出場している。

テニス部の石井・神山組、小峰・黒瀬組が夏の全国大会に出場。秋の県大会では石井・小峰組が優勝した。

◆一九八三年

- 4・8(金)第三六回入学式
- 5・20(金)一年、宿泊研修
- 6・1(水)体育祭
- 7・13(水)水泳教室
- 15(金)演劇教室
- 9・10(土)くすのき祭
- 22(木)四年、修学旅行(秋芳洞・京都)

◆一九八四年

- 10・2(日)県大通総合体育大会
- 30(日)遠足(高山不動・妙義山)
- 11・13(日)西部地区学芸大会
- 2・5(日)三年、修学旅行
- 3・11(日)第三五回卒業式

◆一九八五年

- 4・9(月)第三七回入学式
- 6・5(火)体育祭
- 9・8(土)くすのき祭
- 10・7(日)県大通総合体育大会
- 28(日)遠足
- 3・10(日)第三六回卒業式
- ◆一九八五年
- 4・8(月)第三八回入学式
- 5・25(土)二年、宿泊研修
- 6・9(日)四年、修学旅行(萩・広島)
- 25(火)体育祭中止(クランドコンディションが悪い)
- 9・7(土)くすのき祭
- 19(木)来年度の学級増決まる
- 10・13(日)西部地区学芸大会、生活体験発表会
- 11・17(日)遠足
- 2・28(金)入試に面接試験導入
- 3・9(日)第三七回卒業式

◆一九八六年

- 11・17(日)遠足
- 2・28(金)入試に面接試験導入
- 3・9(日)第三七回卒業式

柔道部の一年生桑原武夫が県予選三位で全国大会に出場した。サッカー部は県大会で県陽高校を2対1で下し、二年連続優勝。卓球部も全国大会に出場した。

1985 くすのき祭前夜祭 雷雨のため中止

文化祭実行委員は四月から、夜遅くまで学校に残って話し合い、準備を進めていたが定時担当の前夜祭ははげしい雷雨のため中止となった。

各クラスの催し物のほとんどが売店関係であったため、文化祭のあり方について見直しの意見も出た。

第一七回西部地区学芸大会は松山高校で開催。この年より西部地区定時制生徒生活体験発表会が同時開催となった。川越高校では西部地区一〇校二二一名のアンケート調査を提案し、アンケートの取りまとめをした。

柔道部の原田、桑原が全国大会に出場。テニス部の小峰・田中組も全国大会に出場。秋の県大会では優勝。卓球部は全国大会県予選で団体戦に優勝。全国大会では、山口稔、堀正和が個人戦に出場、山口がベスト16。団体戦には山口、堀のほか、木下孝之、河内大次、小峰が出場した。

1986 臨時学級増一 募集定員八〇名となる

志願者増加対策として、二次募集の受験を希望する他県出身者、特別選考を希望する一九歳以上の受験者のために、二次募集枠を確保することが校内で検討されてきた。その結果、臨時学級増一となり、この年八九名が入学した。

柔道は全国大会団体戦に二年連続出場
の原田勝己、三年連続出場
の桑原武夫、初出場の新井達男が健闘、ベスト8に入った。



全国大会に連続出場した柔道部

卓球部は全国大会に堀正和、山口稔、堀光昌が個人戦に出場し、男子団体戦にも二年連続出場を果たした。県大会では男子団体戦で優勝した。テニス部は全国大会県予選で小川・手塚組が優勝、榎本・西組が三位、麻田・糟谷組が

- 4・8(火)第三九回入学式
 - 6・20(金)体育祭
 - 9・13(土)くすのき祭
 - 10・23(木)厨房新築工事竣工
 - 11・2(日)遠足
 - 23(日)四年、修学旅行
 - 12・16(火)給食室移転
 - 3・8(日)第三八回卒業式
- ◆一九八七年
- 4・8(水)第四〇回入学式
 - 9・12(土)くすのき祭
 - 27(日)西部地区学芸大会
 - 10・4(日)県定通総合体育大会
 - 11・1(日)遠足
 - 26(木)四年、修学旅行(秋・広島・四国)
 - 1・20(水)定通教育四十周年記念式典(於 浦和文化センター)
 - 3・10(木)第三九回卒業式

1987 新入生一三五名

四位になり三組とも全国大会に出場した。

この年の生徒募集も、正規の募集学級一に臨時学級増一で行われた。二次募集を行ったところ二三八名の志願者が殺到。そのため、三月十八日に臨時学級増二と発表。採点作業は全日制からの応援を得なければならぬほどの忙しさだった。入学者は一三五名。第二次ベビーブームのピークであった。

1988

昭和63年

1992

平成4年

40回卒

44回卒

1988

生徒の活躍目立つ 生活体験発表会で文部大臣賞受賞

この年は、学校の内外において生徒の活躍が目立った。全国生活体験発表会で四年生の辻本由起江が、定時制に通い、仲間と共に成長する喜びを語り、文部大臣賞を受賞した。

「定通教育をよくする会」では、本校が県西部地区の中心となり、充実した学校生活を目指して、学校設備の改善や定時制からの大学推薦入学制度の確立などの要望を県教育委員



合掌造りの前で(4年生修学旅行)

会に提出して、改善を求めた。

校内では、定時制新聞「陽光」の定期発行が復活した。また、文化祭では、牛肉、オレシンジの輸入問題や地域の河川の浄化等環境問題、時事問題に目を向けたテーマが目立った。

1989

一九八〇年代の しめくくりの年

一九八九年は、昭和天皇の死去、ベルリンの壁の崩壊と内外ともに激変の年であった。

本校は、ここ数年各学年とも二・三クラスあり、文化、スポーツに活発な活動が繰り広げられた。生徒会の掲げたスローガン「明るく、楽しく、生徒全員が満足できる学校」に相応した姿があった。

運動面では、テニス部、陸上部、卓球部が全国大会に出場した。体育祭は聖火や仮装行列で盛り上がった。

文化面では、くすのき祭、生活体験発表会、西部地区学芸大会、予餞会のどれをとっても活気があった。とくに、くすのき祭では各クラスの出し物、写真部、アニメ同好会の展示、軽音楽同好会の演奏、本場仕込みのインドカレーショップ、生徒会本部のアイスクリームやさん、全定合同イベントと数え上げればきりがないほどであった。

◆一九八八年

- 4・8(金) 第四一回入学式
- 9・10(土) くすのき祭
- 10・2(日) 県定通総合体育大会
- 11・3(木) 四年、修学旅行(飛騨高山、能登)
- 3(木) 一年、遠足
- 6(日) 二、三年、遠足

◆一九八九年

- 3・10(金) 第四〇回卒業式
- 4・10(月) 第四二回入学式
- 8(月) 全国定通体育大会(陸上、テニス、卓球)
- 9・9(土) くすのき祭
- 10・1(日) 県定通総合体育大会
- 8(日) 西部地区学芸、生活体験発表会
- 11・1(水) 四年、修学旅行(四国、京都)
- 3(金) 遠足(サマールランド、鎌倉)
- 3・10(土) 第四一回卒業式

◆一九九〇年

- 4・9(月) 第四三回入学式
- 8(月) 全国定通体育大会(陸上、テニス、卓球)
- 9・8(土) くすのき祭
- 10・9(火) 県定通総合体育大会 体育祭
- 14(日) 遠足(豊島園、葛西臨海公園、鎌倉)
- 11・25(日) 四年、修学旅行(四国、京都)
- 3(金) 遠足(サマールランド、鎌倉)
- 12・15(土) 第一回交通安全実技指導
- 3・9(土) 第四二回卒業式

◆一九九一年

- 4・1(月) 「修業年限三年以上に係わる諸課題の研究」を委嘱される
- 8(月) 第四四回入学式
- 5・11(土) 一、三年、集団宿泊研修
- 5・12(日) 二年、遠足(鎌倉)
- 6・10(月) 四年、修学旅行(北海道)
- 8(月) 全国定通体育大会(陸上、柔道)

1990

バイク・自動車通学者に 安全実技指導を実施

一九八五年から続いた臨時学級増の生徒が
高学年に在籍し、生徒数一九八名で生徒会活
動、部活動など学校生活が活発に行われた。

陸上部の四年坂口征二は、全国定通体育大
会に四年連続して出場し、五〇〇〇円で入賞
した。富士見市の自宅からトレーニングを兼
ねて、毎日ランニングで通学という努力のた
まもの。

本校でバイクの死亡事故が続発、事故防止
のため、県警
白バイ隊の協
力で交通安全
実技指導を自
動車、バイク
通学者を対象
に川越自動車
学校で実施す
るよきになった。



交通機動隊による実技指導(写真は1995年)

1991

修学旅行は北海道へ

修学旅行の目的地の規制が緩和され、北海

道まで行くことが可能となった。あこがれの
寝台特急「北斗星」に乗り、五泊六日の日程
で北海道のおそい春を満喫する。

学校教育法の改正で、定時制課程の修業年
限が三年以上となり、県立大宮中央高校との
併修、大検合格科目の単位を卒業単位に加え
卒業条件を満たした三名が三年で卒業するこ
ととなった。そのため三年生も修学旅行を急
遽行うこととなり、二泊三日の日程で、蔵王
でスキーを楽しんだ。

全国定通体育大会では埼玉チームが柔道で
優勝、本校四年の森田裕隆も活躍した。

四年修学旅行日程表

- 6・10 大宮(車中泊)
- 11 函館—函館市内—大沼—洞爺湖
- 12 洞爺湖—登別—支笏湖—札幌
- 13 札幌—札幌市内—札幌
- 14 札幌—長万部—湯の川
- 15 湯の川—函館—青森—大宮

1992

生徒数激減 各学年一クラスに

各学年一クラス、全校生徒数二二〇名、教
員は教頭以下九名となる。長い伝統を持つ野
球部も部員不足のため休部となる。

数年来、県教育委員会に申し入れていた修

9・7(土) くすのき祭
10・6(日) 県定通総合体育大会

9(水) 体育祭

1・27(月) 三年、修学旅行(蔵王、松島)

3・10(火) 第四三回卒業式

◆一九九二年

4・1(水) 「修業年限三年制課程開設につ
いて」の研究委嘱を受ける

8(水) 第四五回入学式

26(日) 遠足(葛西臨海公園、鎌倉、横浜)

8(月) 全国定通体育大会(陸上)

9・1(火) 学校五日制開始(第二土曜日休業
日課表改正(給食一回制となる))

12(土) くすのき祭

10・4(日) 県定通総合体育大会

9(金) 体育祭

12(月) 修業年限三年制課程案内のため
中学校訪問

1・22(金) 修業年限三年制課程試行実施要
項制定

3・9(火) 第四四回卒業式

業年限三年制課程の開設が十二月に認められ、
近隣の中学校及び教育委員会を訪問し、修業
年限三年制の案内、生徒募集を全職員で行う。
修業年限三年制課程は、通常の定時制の授
業に加えて、通信制の授業を時間制の中に取
り入れ、三か年で卒業条件を満たすように編
成されている。この方式は、「自校方式」と
呼ばれ本校が全国で唯一の例であり、他校の
注目を集めている。

1993

平成5年

1997

平成9年

45回卒

▼
49回卒

1993

修業年限三年制課程開設

中学校卒業生が、ますます減少し、四月に入って、本校では初めての欠員募集を行い、ようやく定員を満たすことができた。修業年限三年制課程四〇名、修業年限四年制課程四〇名が入学し、全生徒数一五三名となり、全校に活気が出た。三年制課程を目指し、遠距離からの通学者も見られた。

この年、剣道部が再発足、一年目で全国大会出場という快挙を成し遂げた。

1993年度 居住地別生徒数

川越	67	東松山	1
上福岡	16	小川	1
富士見	8	狭山	4
三芳	1	入間	1
大井	2	所沢	4
志木	1	日高	2
新座	3	毛呂山	6
和光	1	大宮	2
川島	2	上尾	1
鶴ヶ島	13	騎西	1
坂戸	13	東京都	1
鳩山	2		

1994

バスケット部 念願の全国大会へ

学習指導要領が改正され、家庭科が男女共修となり、調理室でエプロンを掛けた男子が料理を作る姿が見られるようになった。

この年の話題は、バスケット部の活躍に つきる。前年度全国制覇を果たした宿敵、川越工業高校を県大会で破り、念願の全国大会出場のカップを手にした。連日午後十時まで体育館に明かりが付き、小原、峰行両先生のもと、激しい練習が続いた。全国大会では、三回戦で優勝校の青森県代表の八戸中央高校と激突し、一ゴール差で苦杯をなめた。

十一年間本校の教頭、全国定通教頭会の副会長として、定時制教育に心血を注がれた竹内忠好先生が勇退された。

1995

修業年限三年制課程 第一期卒業

月二回週五日制が実施された。仕事と学業の両立を目指す定時制の生徒には連休はありがたく、特に、レポートに苦しめられる修業年限三年制の生徒には喜ばしいことだった。しかし、週当たりの授業時数が二時間減少したため、卒業条件の八〇単位取得がぎりぎり

◆一九九三年

4・2(金) 修業年限三年制課程運営委員会設置

8(木) 第四六回入学式(修業年限三年制課程一期生四〇名入学)

25(日) 遠足(富士急ハイランド)
全国定通体育大会(剣道)

8・9・11(土) くすのき祭

10・3(日) 県定通総合体育大会

8(金) 体育祭

11・21(日) 西部地区学芸大会

3・9(水) 第四五回卒業式

◆一九九四年

4・1(金) 家庭科男女共修となる

8(金) 第四七回入学式

24(日) 遠足(八景島シーパラダイス)
全国定通体育大会(バスケット)

8・9・10(土) くすのき祭

10・2(日) 県定通総合体育大会

31(月) 球技大会(体育祭)

3・9(水) 第四六回卒業式

◆一九九五年

4・1(土) 月二回学校五日制開始(第二四土曜日学校休業)

10(月) 第四八回入学式

5・14(日) 遠足(東武ワールドスクエア)

7・12(水) 保護者会

8・9・9(土) くすのき祭

10・1(日) 県定通総合体育大会

31(火) 体育祭

3・7(木) 第四七回卒業式

修三課程一期生二〇名卒業

◆一九九六年

修三課程一期生二〇名卒業

の教育課程となる。修業年限三年制は通信の授業が増え、レポート数が多くなり負担がかかるようになった。

修業年限三年制二〇名、修業年限四年制一八名が卒業した。卒業式では、修業年限三年制の生みの親である、竹内前教頭が登壇し祝辞を述べた。先生は卒業生一人一人と握手を交わし喜びを分かち合った。

1996 定時制「冬の時代」へ

前年度に引き続き欠員募集まで行ったが、新入生の定員は満たされないうまま、新年度がスタートした。

学校生活に潤いを持たせ、より楽しい学校にするため、学校行事の充実をはかった。遠足は春、秋の二回とし、冬にはスキー教室を開催した。

全体的に定時制生徒数が減り、体育大会な

1997年度 年齢別生徒数

年齢	1年	2年	3年	4年
15	22			
16	11	16		
17	8	16	6	1
18	6	9	8	2
19	1	5	2	5
20			1	1
21			1	1
22		2	1	
23	1		1	1
24				1
25		1		1
~30			1	1
~40	2			
~50	3	1		

ど部員不足から棄権する学校が増えた。部員以外でも積極的に参加し、大会を盛り上げて欲しいとの要請が各校に出された。

1997 定時制開設五十周年

昭和二十三年に開設した定時制は、この年五十周年を迎えた。八月に全国、一九九八年一月には埼玉県との記念式典が挙行され、生徒代表も参加した。県の記念式典では、全国生活体験発表会で文部大臣賞を受賞した、本校卒業生の辻本さんが、受賞作品を再演した。

本年度の新入生の中には、子育てを終わつた年輩者の入学が目立った。五十周年を機に、今後の定時制教育のあり方を考える年になるように思えた。



1997年度入学生(1年1組)

- 4・8(月) 第四九回入学式
- 5・27(月) 春の遠足(東京デイズニールランド)
- 8・() 全国定通体育大会(陸上、テニス、剣道)
- 9・7(土) くすのき祭
- 10・6(日) 県定通総合体育大会
- 11・3(日) 秋の遠足(横浜)
- 12・25(水) スキー教室(尾瀬岩倉)
- 3・7(金) 第四八回卒業式

◆一九九七年

- 4・8(火) 第五〇回入学式
- 5・2(金) 春の遠足(富士急ハイランド)
- 8・() 全国定通体育大会(陸上、テニス、剣道部出場)
- 9・13(土) くすのき祭
- 10・5(日) 県民総合体育大会
- 11・9(日) 秋の遠足(風布、上野、浅草、ザウス)
- 24(月) 西部支部体育大会(ポーリング大会)
- 12・26(金) スキー教室(尾瀬岩倉)
- 1・5(月) 第一回高体連スキー大会
- 17(土) 埼玉県定通教育五十周年記念式典
- 3・7(土) 第四九回卒業式(川越福祉センター)

秋に行われていた、各地区単位の体育大会は、参加校の減少から廃止され、県大会一本となった。各地区では、何らかの催し物を行うこととなり、西部地区は、ポーリング大会を行った。

1998

平成10年

50回卒

1998

51年目の定時制 新世紀への第一歩

近年の本校の生徒数の推移を見ると、一七八七(昭和六二年)をピークに減少を続け、一九九二(平成四)年には、全校で四クラスの最小単位の学校になってしまった。現在は、一九九三(平成五)年に修業年限三年制課程を開設し、全校七クラス規模になっている。しかし、ここ数年の入学生は募集定員を満たすことはなく、一クラス三〇名程度になっている。

1998年度 生徒数

学年	クラス	性別	生徒数	計
1	修4	男16 女13	58	
	修3	男22 女7		
2	修4	男14 女12	50	
	修3	男15 女9		
3	修4	男14 女4	35	
	修3	男16 女1		
4	修4	男6 女3	9	

生徒数減少で生徒会活動、クラブ活動に少なからず影響がでてきた。特に、チームとして参加する運動クラブ、野球・サッカー・バスケ・バレーは選手の確保に苦勞し、大会によっては棄権をしたこともあった。

反面、授業展開においては、少人数であることが幸いし、きめ細かな指導が可能となり、教師生徒間の好ましい信頼関係ができてきた。

阪神大震災を機に、本校は防災拠点校に指定され、巨大地震にも耐えられる重層体育館の建設が前年度から続いていたが二月によりやく竣工となった。体育館がないため、クラブ活動の一部は、川越総合高校の体育館まで通って行われ、体育の授業は北風吹きさぶ中グラウンドで行うこともあった。

また、本校周年事業の一環として、図書館の改築も行われ、工事現場の中の一年であった。



寒空の下でのターゲット・ゴルフ(体育の授業で)

◆一九九八年
4・2(木)入学許可候補者説明会

8(水)入学式

9(金)対面式

28(火)離任式

5・2(土)新入生歓迎会(川越総合高校)

26(火)一学期中間考査(〜29日)

6・5(金)進路説明会

10(水)生徒総会

7・3(金)校内生活体験発表会

23(火)校内生活体験発表会

8・4(火)交通安全教室(震自動車学校)

13(月)交通安全教室(震自動車学校)

6(木)定通陸上全国大会

9(日)定通剣道全国大会

9・12(土)くすのき祭(〜13日)

30(水)西部地区生活体験発表会

10・4(日)県民総合体育大会

23(金)二学期中間考査(〜27日)

11・1(日)遠足(鎌倉、渋谷、お台場、浅草)

20(金)体育祭

12・8(火)二学期期末考査(〜11日)

27(金)生徒総会

29(金)卒業試験(〜2/4)

1・1(月)同和教育講演会

5(金)予餞会(川越市民会館)

25(木)一般募集学力検査

3・2(火)学年末考査(〜8日)

26(金)体育館竣工

6(土)第五〇回卒業式

12(金)二次募集学力検査

20(土)図書館竣工

25(木)欠員募集学力検査

明日の定時制を模索しつつ……

占領下、食糧不足の中で誕生した定時制は社会の大きな期待を受け、歩みだした。

市内の高校といえば、県立四校、市立一校で中卒者の三分の一程度しか高校へ進学していない時代であった。

定時制に対する期待は、市町村から後援会や給食室建設への支援にあらわれている。

定時制高校には、いろいろな経歴の生徒が集まってきた。学ぶことに飢えていた時代といえる。

生徒は、八時間の労働をしながら全日制の生徒と同じ学力を要求された。

日本の経済が軌道に乗り、高度経済成長が始まると生徒は全国各地から集まり、学びながら経済成長の一端を担うようになった。資料が散逸していて、一九六〇年代後半から五年分しか残っていないが、全校生徒の三分の一が地方の出身者で占められていた(資料)。

定時制の独立校舎の要求が話題になったのもこの頃であった。定時制生徒に対する補助金制度、奨学金制度が整備されていた。

八時間の労働をしながら学んだ定時制の生

徒にとつて卒業後の進路を新たに選ぶようすると、定時制を意識しないで選べる進路は大学進学や公務員であった。そのため多くの卒業生が県や市町村の公務員となっていた。

高校にはほぼ全員入学するようになると、全日制中途退学者と中学時代不登校だった生徒の入学が目立つようになった。経済大国日本で全日制を中退した生徒には再度全日制で学ぶ機会ほとんど奪われている。

中学時代不登校になった生徒にとつて、全日制の門は狭くなっている。入学選抜は内申書の学習点と学力テストに大きなウェイトをおいているからである。学習点の悪い不登校の生徒にとつては著しく不利に扱われるため、定時制か通信制を選ぶしか道がなくなっている。

第二次ベビーブームの子供が入学するところになると一クラス募集のところ臨時学級増一となったが、定時制の施設整備をみると経済大国となった今、貧弱に思えてならない。

子どもの権利条約を批准していながら、最

近は教科書や給食費の補助金の適用が厳しくなり、行政改革の叫ばれるなかで、市町村のなかにはPTA教育振興会への補助金を見直す動きもでてきている。

今、全国的に定時制の統廃合の波が押し寄せてきつつある。次の記念誌発行の時機本校定時制が存在しているかわからない。ただ、昼間学びたい生徒には昼間学ぶことができ、本当に働きながら学ばなければならぬ者には、交通の便がよく、経済大国にふさわしい設備の十分備わった施設で学ぶ機会が保障されることを願わずにはいられない。

年	埼玉	北海道	青森	岩手	秋田	山形	宮城	福島	茨城	栃木	群馬	東京	千葉	神奈川	新潟	長野	山梨	岐阜	愛知	三重	島根	山口	高知	徳島	長崎	福岡	熊本	佐賀	宮崎	鹿児島	
1967	312	7	5		6	3	3	10	1	4	7	3	3		12	2	2		1	1		1	1	1	1	4					391
1968	290	1	8	3	5	3	1	8	2	6	5	6	1	1	18	1	2	1	2	1		2	2	1	1	6			1		375
1970	188	5	4	4	6	5	8	5	1	3	5	2	2		24			1	1	1	2	1				2		2	1		274
1973	129	8	3	7	7	3	7	9	1	1	2	1		1	30	2		1			1		1			2			4	2	222
1974	112	7	2	5	5	3	6	8	2	2	2	2		2	22			1	1		5				1	1		4	2	195	

資料・出身都道府県別川高定時制生徒数

定時制分校の歩み

朝霞分校の二十一年

黒沢光二（朝霞分校7回生）

一、朝霞分校の開校

朝霞分校の開校の経過については、愛川敬武先生によって『創立八十周年記念誌』に詳細に示されている。

新教育制度が一九四七（昭和二二）年四月から実施され、新制中学校が生まれ、一九四八年四月から新制高等学校が発足した。定時制課程は準備がおくれて朝霞分校の開校は、同年九月十五日であった。現在の朝霞第一小學校に新制中学校が置かれ、その中学校の教室を朝霞分校が間借りしたのである。最初の入学者は四六名であった。

新主任細野博教諭が着任し、朝霞分校の開設に尽力された木村信壽前主任は退任された。

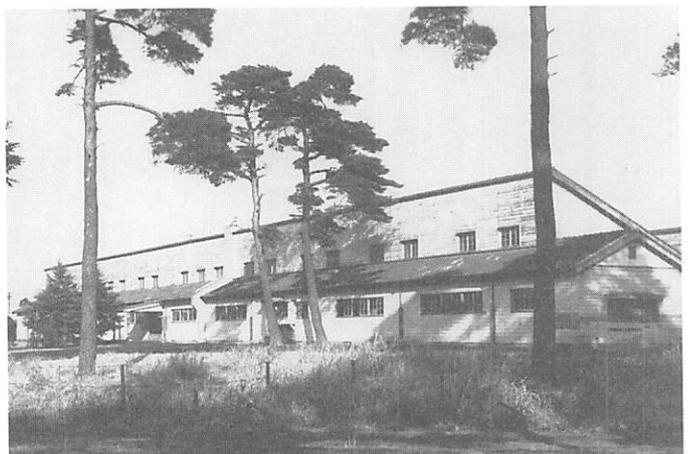
二、朝霞中学校との同居時代

一九四八（昭和二三）年十一月、新制中

校の校舎が落成し、同月二十三日の祝日、机椅子を新校舎に運んだ。新校舎は、現朝霞高の西側の現第四小學校の位置に建てられたもので、松林に囲まれた片流れ式の屋根で平屋の校舎であった。

一九五〇（昭和二五）年六月に朝鮮戦争が始まった。この朝鮮戦争による特需景気により、日本は経済的に立ち直りはじめた。一九五二（昭和二七）年三月、第一回卒業生三十七名が、在学二年六か月の特例で卒業した。八名が早大、明大、日大、法大などに進学した。同年四月、白井正新主任が着任し細野前主任は中心校へ戻られた。

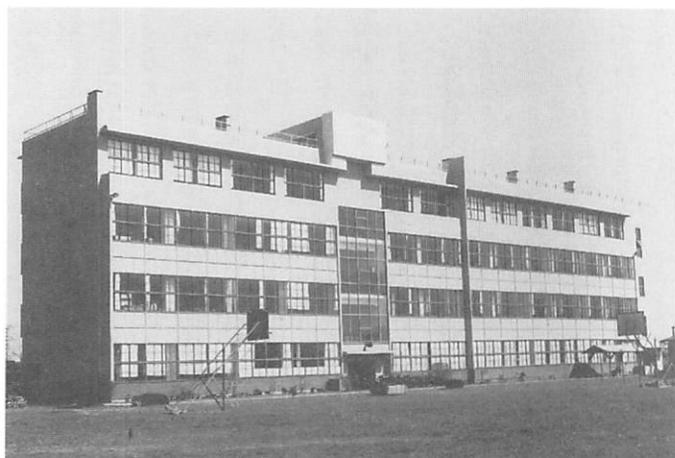
私が、朝霞分校に入学したのは、一九五四（昭和二九）年四月であった。当時、教室の照明は、百ワット電球四個のみで決して明るいものではなかったが、授業を受けられる喜びからだれも不満に思うものはなかった。ただ、



旧朝霞中学校校舎

ときどき停電し授業が中断されるのには閉口した。しかし、停電するとすぐに先生は、職員室に行きたいローソクに火をつけて戻り、教卓の上に置き授業は再開され、簡単に授業を打ち切ることはなかった。

また、当時は体育館がなかったので、体育の授業は教室の窓明かりを利用して校庭で行い、バレーボールをしても場所によっては、ボールの半分しか見えなかったり、まったく見えなかったりしたが、生徒達のムードには



朝霞中学校新校舎

明るさがあった。授業態度も真面目で居眠りをしていない生徒はなかったように思う。

グラウンドの境には有刺鉄線がはられ、その外はキャンピング・ドレイクの演習場になっていた。パラシュートの降下訓練が行われたり、夜間には照明弾を打ちあげ、昼間のような明るさの中で匍匐前進の訓練が行われ、時には実弾射撃の訓練もあり、現朝霞高校のグラウンドあたりが実弾射撃の着弾地点になっていた。こうした状況は教室の窓越しにかいま見るこ

とができたが、それらにも、あまり心を奪われることなく、授業に集中していたように思う。

一九五五(昭和三〇)年は神武景気といわれ、世界貿易と金融緩和に支えられて、投資を中心とする好況をむかえた。この年の三月に朝霞分校生徒会誌「かすみ」が創刊された。題字と表紙は、白井正主任によって作られたものである。第一号の題字は書の名家である小野道風の書の中から拝借したものであるという。また、創刊にあたっては山口利通先生のご指導によるところが大きかった。

この第一号によると、一九五四(昭和二九)年十月三十日に、全日制及び定時制中心校、朝霞、入間川、所沢分校、つまり全川越高校合同の文化祭が初めて行われたと、生徒会長常岡幸市君や会計係小菅徳太郎君らが誇らしげに書いている。

さてこの時代の教師陣を見ると、渡辺正紀校長、白井正主任、荒野久男、栗原益男、山口利通、下出一夫、愛川敬武、近藤昌、高篠晴夫、三浦寛、田矢一夫、岡野静二、小沢康人、本城信男、草刈栄芳、塚田はる湖の諸先生方であった。また、私は一九五八(昭和三三)年三月に白井主任や下出先生の推薦により、朝霞分校の事務員に採用された。

一九五八(昭和三三)年三月には、朝霞中学校の鉄筋コンクリートの新校舎が完成した。現朝霞第一中学校である。朝霞分校は、またそこへ移転した。

これまでの木造校舎と違い、照明も明るく、冬になってもすき間風は入らず、快適な状態で勉学に励むことができた。また、体育館もあり体育の授業もクラブ活動にも活気が見られた。

三、独立校舎時代

これまで朝霞中学校の後を追うようにして、移転を繰り返してきたが、一九五九(昭和三四)年三月、現朝霞市役所の位置に独立校舎が完成した。長い間、朝霞中学校の職員の方さんには、大変お世話になったことを感謝しつつ移転することになった。

四月七日、新校舎に移転。四月十一日、始業式、新入生初対面。これは、当時の生徒会長であった増田栄三郎君の記録(霞六号・「かすみ」を改題)である。

この場所は、米軍基地の一部であり、ジープやトラックが置かれていたところである。朝霞駅から徒歩五分ほどのこの地に、校舎ができたことは、電車通学の者にとっては大変便利であった。

校舎は、鉄筋二階建て、一階は職員室兼事務室・理科社会科準備室（実際は印刷室、物置として利用）、家庭科室、音楽室。二階に

一年から四年までのホームルーム四教室があった。そして別棟に小使室と宿直室があった。

校舎の南側は有刺鉄線の垣根一つで米軍の兵舎と接し、グラウンドは、まだ整地されておらず、トラックで運ばれた土は小山の状態であらう。放置されたままになっていた。白井主任はこの事に苦慮していた。どのように交渉されたのか失念してしまったが、米軍基地の司令部との交渉で、ボランテニアで米軍の技師がブルドーザーを持ち込み一日でグラウンドを平らにしてくれた。また、校舎の屋上に一キロワットの投光器を四個とりつけグラウンドの照明とし、かなり明るい状態で体育の授業が実施できた。こうして学校の施設が整えられていったが、日本の社会情勢も高度経済成長の時代に移り、朝霞分校もまた新しい時代に入ったのである。

都市化の波は朝霞、和光、志木、新座などにも及び、全国でも有数の人口増加地域となった。これに伴い生徒数も増加し、県外出身者が多くなった。

一九六〇、六一（昭和三五、三六）年は、

陸上自衛隊少年工科学校生徒が朝霞施設大隊に派遣され、これらの諸君が編入学したので、



朝霞分校独立校舎

生徒数は急増した。その他普通科連隊、輸送大隊、海上自衛隊大井通信所の諸君が入学してきた。この波が過ぎると、本田技研、積水化学、サンケン電気、クラウン精機などの勤労青少年が入学してきた。

朝霞分校では、志願者は全員入学させる方針をとったので、年により一年生は六〇名を超え、超えることもあり、大教室で授業を展開した。数学と英語の時間は、習熟度別クラス編成をした。また「週間テスト」と呼んだ一五分間の小テストを毎日実施した。「霞」八号で二

年の中町信勝君、九号で三年の鈴木洋子君が、つらい苦しいと書いている。これは学力をつけさせたい、遅刻を防止したい、という方針で実施したことだが、教師の方も問題作成、採点に追われた。しかし生徒も懸命にがんばったと思う。

このころ朝霞分校の部活動の全盛時代を迎え、とくにバレーボール部は、日曜日になるとグラウンドの片隅に作られたコートで土にまみれて練習に励んでいた。西部地区大会では常に優勝したが、県定通大会では、毎回浦和通信制高校の少年自衛隊チームに惜敗し、準優勝が多かった。

四、朝霞分校の終幕

一九六三（昭和三八）年四月に、朝霞高等学校が新設され開校した。とりあえず、朝霞分校の建物を使用することになったが、教室が足りずプレハブ校舎を増築してしのいだ。クラス数は八つであった。翌年四月に、現朝霞高校の新校舎が完成し、朝霞分校と一年間の同居後移転した。一九六六（昭和四一）年四月に、朝霞高校に定時制課程が設置され一年生が入学した。同時に朝霞分校は一年生の募集を停止したのである。

一九六七（昭和四二）年埼玉国体の年、三

月十五日、朝霞町は市制を施行して朝霞市となった。この三月末に朝霞分校は、在校の三、四年生を朝霞高等学校へ委託することになった。朝霞高校に移転するにあたって、「霞」一三号で生徒会長の小松弘之君は、朝霞高校校舎に移転後も川越高校生としての自覚をもち、主張すべきは主張し、協調すべき点は、互いに力を合わせて行かなければならない、と述べている。

そして、教員も別れ別れになった。白井主任は入間川分校主任となり、愛川敬武先生は中心校全日制へ、関根應之先生は中心校へ、中里秋光先生は川口工業高校定時制へ、そして三、四年生の生徒一三二名をつれて朝霞高校へ移られたのは、川上義正、守谷良二、吉岡一晃、丸田洋の諸先生と、黒沢悦子事務主事であった。

二年後には、諸先生方のおかげで委託生一

入間川分校想望抄撮

木村市郎（元教諭）

一
県立川越高等学校入間川分校は、一九四八（昭和二三）年四月、入間川町と近隣五か村（現狭山市）とが設立認可を受け、同年九月十五日に、入間川公民館三号室で開校した。

翌一九四九（昭和二四）年四月、一、二、三、八名と新一年生六、三名の入学を迎えるにあたって、町立入間川中学校校舎の一部を借用し、三名の専任教師と八名の時間講師とで、四月十五日新学期の授業が始められた。

一九五〇年十一月、借用していた中学校校

舎が新改築されることとなり、その旧校舎の一部を入間川公民館と八幡神社との間の台地に移築し、これを分校の独立校舎とする手はずが整い、独立校舎が完成するまでの間、この台地に隣接する入間川小学校の教室を間借りして、小学生用の机と椅子をあてがわれ、不十分な照明を頼みの綱として懸命に勉強した。

鶴首して待っていた独立校舎が完成したのは、一九五一年二月のことだった。夜の帳がおりて一歩校舎を出ると、台地の北側に、繁栄していた頃の宿場街の面影を残して、東西

三、二名中一名の脱落者もなく全員が卒業できた。

こうして朝霞分校は六六一名の卒業生を送り出しその幕を閉じたが、そのかけには朝霞分校にかかわった諸先生方、朝霞市教育委員会の方々のご尽力あればこそと感謝しております。



狭山市入間川の街並（昭和29年10月15日、市制祝賀の日。左下が入間川分校）

にはしる細長い带状の仄暗い雪洞のような街灯がまず眼に飛び込み、続いて、飯能あたりの台地を過ぎた、はるかな星明かりの中に、武甲を頭として、黒々と秩父の山並みが甲冑を纏った武士の寝姿をみせていた。適度な月明かりさえあれば、北のずっと奥まったあた

りには、新雪を頂いた日光の山々さえ認められる。えも言われぬ美観の地こそ吾等が学舎だった。

一九五二年四月、女子の将来の家庭生活に直結する和洋裁と調理を主教科とし、二年間で修了する昼間別科課程が併設された。これはいわば、当時最も良しとされた良妻賢母の育成と農村文化と家庭生活の実質的向上を意図し、近接農村地帯の女子の教育に門戸を開いたものだった。しかし、昭和三十年代の半ばを過ぎると、農村地帯の急激な都市化に伴う生活環境の変化、経済的發展、社会全般のニーズと欲望の変動などにつれ、わずか十四年間存続を許されただけで、一九六六年三月廃止の運命を余儀なくされた。

一九五一年に完成した木造独立校舎は、隣接する自衛隊入間基地の航空騒音を教室から遮断する目的で、一九六〇年七月より約三か月を要して国家予算を投入し防音校舎に改造された。しかし、何分にも古材を再活用した木造建造物で充分にその目的を達成し得ずいたので、狭山市・防衛庁・その他各関係機関の協力と努力で、一九六三年十二月、鉄筋コンクリート三階建防音校舎の新築認可が国よりとりつけられた（総工費約三千九百万円）。工事着工に伴い、分校は再度市立東中



独立校舎となった入間川分校の正門

学校の一部教室を借用することとなった。

新校舎の建設工事は、翌一九六四年八月に完成し、分校としては稀覯で優れた施設設備が備えられ、生徒は勉強にも運動にも数段とその情熱を傾けることができたのであった。

このころと前後して、国全体の経済力が急激に増大する傾向があらわれ、それにつれて、首都圏の中小市町村に更なる都市化・工業化の波が押し寄せ始め、美しい武蔵野の雑木林や鮎の姿さえ見えた河川や青々とした田畑は昔日の面影を失い、それと引き換えに大中小

企業が周辺に設立され、住民は増加し、生活程度、様式や住民の気質までもが次第に様変わりし、高学歴志向となり、既設高校の規模拡大と新設高校の増設がなされ、それに呼応して、定時制分校の統合の指針が定まり、その中に入間川分校も組みこまれていった。

入間川分校は、とくに交通至便の地にあり、稀有とも思われる豊かで強力な地域社会、地方自治体、シチズン時計、パイオニア、多加谷織物工業所等各種事業所などの協力と援助と教育への絶大な理解、素晴らしい施設設備と優れた資質の生徒を抱えていたことが相俟って、入学希望者の激減することもなかったが、時代の趨勢には勝てず、遂に一九六七年一月二十五日、普通科もまた募集停止の憂き目を見るに至ったのである。

入間川分校は、それぞれの分校が最寄の新設高校へ教育委託されるか廃校を余儀なくされて行くなかで、様々な事情と卒業生や在校生の強い要望もあって他校への教育委託もされず、一人孤塁を守り抜くかのように、最後の卒業生を名実共に川越高等学校生徒として、「螢の光」と共に送り出してのちに、その栄光溢れる二十一年七か月の劇的な青春を演じ切ってその幕をおろしたのである。時、あたかも一九七〇年三月三十一日、定時制課程普

通科卒業生七四名、別科課程家庭科卒業生三三四名の無限に多感な青春の喜びと苦闘と笑いと涙との交差する、それぞれの濃縮された想い出深い母校は消え去ってしまったのであった。

一一

川高定時制各分校には、忘れ難く卓絶で素晴らしい人格・学力を有し、そして定時制教育の発展のため無尽の努力と情熱を傾け、教え子たちの将来に無限の夢を託し、日々献身を尽くした諸先生が数え切れないほどおられ



防音工事完成後の校舎

た。東大出の先生も十指に余るほどいて、生徒たちには強烈な刺激となっていた。

入間川分校でも、痛烈に教えられたこと余りにも多い、しかも尊敬に値する極上の先生方が教鞭をとられていた。

豪放磊落だが、反面情に脆いお人柄であった日新義虎校長先生。飄々となさっていたながら、厳しく正確公平な判断をなされ、秀達な英文学者で全ての教員から尊敬され、駆け出しの私達教員を温かく労わり見守り育ててくださった、釣り好きの渡辺正紀校長先生。眼光鋭く精力的な考古学者であった大護八郎先生。優しい人柄で、その嗚れ声に似ず繊細な心根をお持ちの後藤定男先生。真剣で真すぐで眩しいばかり温厚な秋葉光先生。体育と生徒指導に熱心に取り組み、明朗さと実力で生徒の人気を集められた矢島義三先生。慶應大学院出で井原西鶴の大変な研究者でありながらそれをひけらかさず、本来なら大学の教壇に立たれるところ、あえて定時制の教壇を選んだ、酒好きだが大の正義漢だった東海亮造先生。短歌を好み、決して腹を立てず、円満な性格の見本のような三浦俊雄先生。定時制卒業生で早大政経出の、やさしく礼儀正しく、生徒の面倒みの抜群によかった渡辺進先生。同じく定時制出身の教え子で純情潔癖な正直

者で事務能力に優れていた吉野峯吉先生。好古で愛国者で人情味豊かな、後輩の世話好きで男性的魅力一杯の芸術家の白井正先生。一回たりとも遅刻も早退もなさらなかった、度の強い眼鏡をかけた望月良平先生。東工大に勤務しながら教壇に立たれていた学究の徒、上田政夫先生。柔道の高段者でありながら歌人であり、可憐で気品高い蘭の花の専門家で、心豊かな山口国高先生。曹洞宗徳林寺の方丈で、真すぐで曲ったことの嫌いな傘松正宣先生。そして、安い安い時間給しか頂けないのに、真実一生懸命教壇で汗した講師の諸先生。皆、優異な定時制分校教育の盤石の支柱でした。

一二

創設期の分校には盤根錯節もありましたが、生徒を懇ろに育てはぐくむ寺子屋教育のよう、教師も生徒も、全てを創造する喜びに燃える毎日を送っていた。

空腹を抱え、錆びた自転車で砂利と雑草の凸凹道を一〇ほど汗ばみながら通い、暗い裸電球の照明の下で寝ほけ眼で机に向かい、ろくな参考書や辞典も買えず、己の姿にかまける余裕もなく時間に追い廻され、恋心をかまからさまにすることも儘ならず、一個のコツ

ペパンを三分の一に割って一日三食の糧として糸瓜のような顔色になり、旅行社に頼むことなく自ら立案計画した修学旅行を立派に済ませ、柔道の対外試合に出れば腕をへし折られても「参った」をいわず、県教育委員会賞、優等賞、県体育賞を一人占めし、友人と八幡様の境内でべら棒なことで喧嘩し、遠く青森岩手から集団就職し通学していた両手が痺だらけの生徒達。……それぞれの青春の血を滾らせた生徒の生きざまのあれを想いこれを思うとき、秀逸で名譽あるそして感激と流涙の分校史が脳裏に彷彿として浮んでくるのである。

開校から廃校に至るまで入学希望者の倍率は間断なく高く、初期の頃は旧制中学の卒業者や中退者が転編入してきたりして学力も資質も高かった。事実、早大、青山大、中大、日大、専大、國學院大、東経大、写真大、防衛大などへ続々と現役入学を果たし、東大に合格したが健康を損ねて入学を断念した者もいたし、某大学で優等生になった者もいた。当時、分校の各教科の授業内容は相当高く豊富なもの、とくに、英語は、ジョンソン空軍基地が隣接していて、そこで通訳官しながら通学していた生徒も数名在籍していたから、生半可な授業では済まされず、やり甲

斐があり、すでに早くも、アメリカ人を招聘し授業の助手を務めさせ、ジョンソン基地将校夫人クラブ (Johnson Air Force Base Officers' Wives' Club) から無返済の奨学金を優秀な生徒に下付して頂き、勉学の励みにしたりなどもした。

毎年行われる文化祭は、半年、一年をかけて練りに練った演劇を上演し、著名な写真家の指導を受けた写真や、得意な油絵や書の力作や、手作りの和洋衣類を展示する、文化の度合の高いものであったし、時には、落語家や物まねの大家を招き、良き江戸文化と話の間のとり方の素晴らしさを学び、また時には



1964年8月に完成した新校舎

一流のピアニストを迎え、ピアノの詩人シヨパン作曲、プレリユード十五番「雨だれ」などの名曲に耳をかたむけて心を豊かにしたりもした。

四

定時制分校が隆盛を極めていた昭和四十年代に入る前ころまでは、教师生徒間の信頼度も極めて厚く、私なども担任した生徒の八、九割の者から結婚式に招かれ、遠く北海道や東北や九州天草までも祝いの席に出向き、教師冥利を味わい、続いて、子供が産まれれば、つつい、産着の一枚も祝ってやるのが、ごく当たり前で自然であった。

また、事業を始め、手形の決済がつかず助けを求めて来た卒業生があれば、五万円で合してやり、失職したために住居までも失し頼って来た卒業生たちがあれば、三か月から六か月ほど同居させ、職探しを手伝い、無事再び世に送り出したりもした。これが定時制教育なのであった。

五

入間川分校が存続した時代は、物質文明からはほど遠い時代ではあったが、自然も人の心も豊かで、人は、人の生きざまに関わる良

質の文化には貪欲に拘わりを持ち続け、古き良き伝統には敬意を払い、新しい未知には開眼しようとする勇氣を持ち合わせ、教師も生徒もともに、血の滲み出るような苦闘と、煮えたぎるばかりの教育への情熱と情念と喜び

を満喫し、美音の青春讃が時に煌煌と、時に轟々と横溢した時であった。

*

県立川越高等学校百周年にあたり、心底より祝意を表し、学の自由と独立の永続を願

所沢分校雑観

大館右喜（所沢分校2回生）

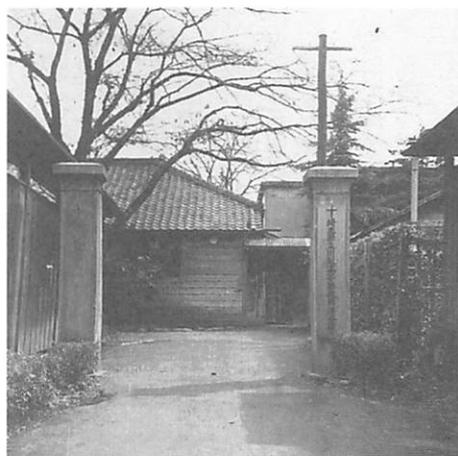
一 創立と展開

所沢分校は一九四八（昭和二三）年九月十五日、旧町立高等女学校の校舎当時所沢中学校が四九年三月まで使用、同年四月十五日より所沢高校女子部と共用授業を行う）を利用し開校した。初代分校主任鈴木睦雄先生は生徒の募集や学校経費の確保のために奔走され、また町当局も地域内に県立高校がなく、地域文化の向上に支障ありとの見解もみられたので、町長、議員も分校設置に積極的な姿勢をしめし、財政上の協力に立ちあがったという。町役場の職員からも教養を高めるために是非入学したいとの申し出もあり、近在各所の職場からの入学希望者を含め、選考試験の上七四名、二学級編成で発足した。A

組三七名（女子七名）B組三七名（女子九名）であった。一九四九年四月には旧制中学・新制中学卒業生七八名を迎え、A組三九名（女子五名）B組三九名（女子九名）となり、五〇年も二学級を編成し一・二・三年あわせて六学級になった。しかし四年目を迎えると遠距離通学者や、職場の無理解により、泣く泣く就学を断念する生徒が増加し、たちまち各学年一学級になった。その後、生徒数が最高に達したのは一九五一年四月で、一年一四年総計二三名を数えた（二か月後の六月三十日には二二六名）。

所沢分校では開校の翌年の九月十六日、教育委員会をはじめ町当局関係者、生徒父母などにより第一回開校記念式を分校講堂で開催し、翌五〇年九月十六日第二回記念式を開催

定時制教育にたずさわったすべての人々に厚い礼意を尽くし、入間川分校想望抄撮の拙文をとじます。



所沢分校正門

するなど、以後も開校記念日を祝賀した。

一九五一年一月十三日には、職員、PTA、町当局の努力により、校庭・校舎の電灯照明設備が完備し、年来の照明度不足が改良され、生徒の学習熱も一段と上昇し、多方面にわたる活動が目された。一九五二年七月三十一日に至り、所沢高校の新校舎が完成すると同校女子部は合併のため移転し、定時制分校は晴れて独立校舎の利用をみとめられることに

なった。

その後、分校発足以後、多難な経営維持に奔走された鈴木陸雄先生は一九五三年四月一日、所沢市教育長に就任し、同日新井弘達先生が主任となられた。以後分校が県の統廃合施策により校門を閉ざすまで、新井先生は半生を定時制教育に尽くされるのである。

分校における第一回の卒業生は一九五二(昭和二七)年三月二十二日、蛍雪の功をかさね、力強く巣立った。卒業生は入学時の七四名から二〇名余の仲間を欠き、四九名となっていた。労働と学業の両立が困難であった当時の状況が想起される。しかし卒業した生徒からは、さらに大学をめざし進学する者も一五名を数え、後輩も同様であった。当時先生方の多くは、時間講師として勤められており、各々研究者をめざして勉強に励む姿が定時制の生徒に感動をあたえ、影響が大きかったのである。第二回卒業生は翌五三年三月六日、五一名であったが入学時より二八名を欠いていた。

一九五一年からの生徒数の概況をあげると表1の通りである。

入学時より四年後の卒業時には、生徒数の減少が顕著である。

学業を続けることの困難さがうかがえるの

(表1)

	1年生	2年生	3年生	4年生	卒業生	合計(女子)
昭和26年度	51名	62名	57名	55名	49名	225名
27年度	—	—	—	—	51	—
28年度	70	45	45	41	38	201
29年度	52	61	40	41	39	194(36)
30年度	50	44	42	36	37	172(27)
31年度	48	48	36	40	39	172(28)
32年度	47	37	42	35	35	161(26)
33年度	59	32	34	42	42	167(30)
34年度	51	44	29	31	31	155(25)
35年度	47	41	42	27	44	157(41)
36年度	45	35	36	33	31	149(48)
37年度	56	41	35	24	24	156(55)
38年度	65	50	35	33	33	183(82)
39年度	56	49	43	26	26	174(82)
40年度	52	47	52	35	35	186(100)
41年度		43	44	50		137(73)

である。

また生徒男女比率をみると、一九六〇年前後の入学生より女子の増加が顕著になっている。そして最後の募集年となった一九六五年には男子を超えている。

そして一九六七年四月、埼玉県の分校統廃合施策により、所沢高校に三、四年生は委託され、一九四八年の開校以来二十一年を経て、一八回の卒業生六七五名を世に送り、分校を閉じることになった。

二 分校のカリキュラム

一九五一年度の各分校のカリキュラムを見ると、中心校のそれにほぼ準じたものであった。

しかし、所沢分校では、それらと若干異なつたカリキュラムで授業が進められていた。中心校のカリキュラムを範としながらも、教師陣を核として所沢分校独自の授業体系を組み上げたのであった。たとえば所沢分校では西洋史、東洋史が二、三年に連続し、解析IのほかIIが三、四年に連続し、理科は化学、生物に加えて三、四年に物理がおかれていた。芸能は図画のみであった(一九五三年度より書道がおかれた)。また女子の家庭科履修時に男子は幾何、英語、商業を選択履修した。とくに芸能が少なくその代わり英語が五時間各学年におかれていた。初期の段階、すなわち一九四八―五一年ころ上記の科目を担当された先生は次の通りである。国語甲・乙、小沢俊郎、国語乙・漢文、鈴木陸雄、新井弘達、国語、藤宮頼夫、一般社会、宮下貞雄、新井弘達、日本史、藤宮頼夫、新井弘達、西洋史、小沢郁郎、東洋史、栗原益男、世界史、藤宮頼夫、人文地理、栗原益男、解析I・II、辻功、図子岩雄、宮下貞雄、青柳芳夫、幾何、

下田迪雄、化学、大野博孝、凶子岩雄、生物、大國五郎、物理、石川正明、図画、大沢寛、保健体育、中里光男、藤宮頼夫、大國五郎、英語R・G、町野静雄、村田とみ子、山田泰司、栗原益男等の先生方であった。

このようにして、定時制所沢分校の教育態勢は整っていった。

その後教育課程の改編により定時制のカリキュラムも整備され昭和三十八年度の一年生から資料編78頁のようになされた。

一年生は新課程であるが二年以上は移行課程にあり、担当された先生方は人数も少なく繁忙を極めたという。主任の新井先生は国語書道を、近藤昌先生は英語、職業を、徳増先生は社会科全科目と数学を、新井康夫先生は数学、生物、化学、保健を各々担当された。また非常勤講師の吉村三四子先生は家庭科を、山田春久先生は国語を、松原健治先生は理科数学を、内田武男先生は社会、理科を各々担当された。開校より十五年を経て専任は若干増員になったが、専門性を重視した非常勤講師の配置策が消滅し結果的には教師の負担増と生徒へのしわ寄せが顕著になったのである。

三 生徒の状況

定時制編成の完成年度は一九五二年であつ

た。この年を前後にして所沢分校の動向をみておきたい。

生徒は発足時にみられた多様な前歴がうすれ、下級生はほとんど新制中学出身者となった。たとえば一九四八年の一期生は二十代以上が三六名、十代が三八名であったが二期生以下は大半が十代となった。また生徒は何らかの職業に従事しており一期生には無職はない。生徒の職種は表2の通りである。

(表2)

学年	1	2	3	4
商業	9	9	3	2
事務員	4	2	2	9
組合勤務			1	
進駐軍	1	7	4	12
公務員		1	4	7
工員	10	12	17	8
無職	10	4	4	
印刷工	2	1		
タイピスト				2
看護婦		1		
農業	15	10	8	4
その他		15	14	11
計	51	62	57	55

働きながら学ぶという定時制生徒にとって休息は大切なことであつた。当時、結核は克服されておらず、過労のために発病するものもあり、分校では健康管理に注意を喚起した。特に睡眠時間の確保について、先生方は疲労の見られる生徒にはたえず言葉をかけ、無理のないように配慮された。

分校の日課は、第一時限が午後五時三十分

(表3)

年度	入学者数	転入編入者数	中途退学者数(a)	転出者数(b)		卒業者数
				a	b	
昭和26年	75	31	52	5	57	49
昭和27年	85	20	45	9	54	51
昭和28年	77	13	40	12	52	38
昭和29年	52	9	22		22	39

始業、一時限、五十分授業で午後九時五分に第四時限が終了し放課となった。昼間部より一週十時間ほど少なかったため四年の年限を要したのである。午後五時三十分の始業は遠距離通学者には厳しい試験であった。開校の翌年に一、二年生一四八名について、勤務時間を調査したところ、三時三十分勤務終了もしくは事業所の好意で退社を許されたものが八名、四時が同様にして七一名、四時三十分が六五名、五時が四名であった。四時〜四時三十分が九四名みられるのは、発足時の定時制に理解をもった事業所に、就職していた生徒が、就学できたことを示すものであり、勤務条件が午後五時を過ぎる職場からは就学できなかつたのである。開校当初は、ぎりぎりの条件で入学した生徒も多かったが、通勤通学を両立できず、退学・転校が少なからず

発生した。たとえば在学中の学籍異動をみると次のような動向がみとめられる。

第一期生―四期生までの転入、転出、中途退学が多いのは、通学条件の悪化によるもの、また条件を勤務に合わせるために転出したものが存在したからである。退学、転出理由をみると表4のとおりである。

(表4)

年度	家事の都合	勤務の都合	成績不良	出欠不良	病	その他	合計
昭和26年	22	20	4	6	3	2	57
昭和27年	11	26	7	3	2	5	54
昭和28年	6	12	10	8	7	9	52
昭和29年	8	2	7	1	3	1	22

一九五四年より退学、転出が半減する理由は、中学校の進路指導が充実し、定時制高校への進学希望者にたいし、就学可能な職場を斡旋するようになったからである。条件の整った職場を選び就職し、夜は高校生として学ぶ、という勤労学生スタイルが定着したのである。生徒の欠席もほとんど見られず、この年度の一、二学期の統計を示すと表5のとおりである。

(表5)

	生徒数			出席百分率			長期欠席者	
	男	女	計	男	女	計		
昭和29年	4月	154	35	189	94.9	98.1	96.5	0
	5月	154	36	190	93.8	99.7	96.0	1
	6月	153	35	188	91.8	96.4	93.9	2
	7月	152	35	187	96.8	95.9	95.6	2
1学期計				94.1	97.5	95.5	2	
昭和30年	1月	149	33	182	90.7	92.6	91.7	6
	2月	147	33	180	93.6	94.3	94.3	6
	3月	145	32	177	95.0	95.2	95.2	7
3学期計				93.1	94.0	94.0	6	

四 生徒会活動

所沢分校の生徒会活動(はじめ校友会)は、規約第二条に「本会は教学の本旨に則り学徳技芸を函養し会員相互の親睦を図り自治的活動により社会的知識を学ぶことを目的とする」とさだめ、活動をはじめている。生徒、職員を含めた組織であった。のちに生徒会になるが、部活動など校友会段階と同じである。概観すると総務部・文化部・体育部の三部門

があり、他にクラスから三名が選出されて構成する協議委員会があった。総務部には書記

会計、医療、渉外があり、文化部には図書委員、文芸クラブ、社会クラブ、芸能クラブが置かれ、体育部には陸上競技クラブ、野球クラブ、卓球クラブ、排球クラブ、籠球クラブ、庭球クラブがあった。第二期生になって生徒会組織への改編の議がおり、中心校から転入した大野繁樹君が規約の草案をつくり、分校に適応する会則を全員で審議し決定した。

分校発足ころの部活動は体育部一三二名、文化部六一名、図書委員一二名でおこなわれた。昭和二十五年度の活動を概観すると、

〔体育部〕

五月二十七日 対入間川分校 球技大会 引き分け

七月十五日 対正明高校 卓球試合 勝利

七月二十日 対所沢高校女子部 排球試合 惜敗

七月二十六日 対正明高校 卓球試合 勝利

八月二十日 対所沢高校女子部 卓球試合 引き分け

九月九日 校内陸上競技大会 第三学年 優勝

勝

九月十日 校内卓球大会 第一学年 優勝

九月十八日 対正明高校 卓球試合 勝利

十月一日 第二回川越高校第二部運動会 所沢分校 第二位

十一月二十四日 校内庭球大会 第三学年優勝

一月二十一日 西部地区第一回冬季体育大会 川越高校予選 卓球 優勝(所沢分校)

籠球 二位(所沢分校)

一月二十八日 西部地区第一回冬季体育大会

於松山高校 オール川越高校卓球 女子優勝(主力は所沢分校) 卓球 男子四位

(主力は所沢分校) 籠球 男子二位(所沢分校選手二名)

〔文化部〕

図書委員会―図書収集三三二冊 図書寄贈八四冊を達成。

文芸クラブ―俳句会三回、文芸クラブ部報月刊行一二回、本校創立二周年記念誌刊行。

社会クラブ―社会クラブ報月刊行一二回、珠算練習会、朝鮮問題についての講演会、日本における女子の立場についての講演会、不良化防止論文募集、勉学方法について論文募集、本校創立二周年記念誌刊行。

芸能クラブ―音楽会一回、レコードコンサー

ト三回、合唱練習、演劇練習多数、映画鑑賞

の集い、毎月一回、年一二回。

などの活動が知られる。このような各部の

活動は、その後も後輩に引き継がれていったのである。

五 統廃合へ

所沢分校の施設については第二代主任を務められた新井弘達先生が『八十周年記念誌』に詳述されているが、一八九八(明治三一)年建築の校舎の老朽ぶりは目に余るものであった。一九五三(昭和二八)年六月には県下二四分校のなかから老朽校舎の代表として、国会の文教委員や定時制教育振興会長の視察を受けたくらいであるから、想像を絶するものであった。新井先生は、床板の修理、夏休み利用の瓦屋根修理など、材料、道具も生徒



1951年6月、4回生筑波山へ遠足

持参で、教師と一体となってすすめている「勤労と勉学の意欲に燃えた生徒の姿」に感動したと記している。当時利用していた分校の校舎は、資料編75頁の図に示した通りこれらの建物は昭和三十年代のはじめに武道場が取り壊され、一九五九年の台風一五号、一九六五年の台風により一・二年教室と講堂(御大典記念建設)も修理不可能なほどの大被害を受けた。そして関係者の新校舎建設の悲願も空しく統廃合への道を歩むのである。

新井先生は「この間、破れ朽ちたりとも独立校舎という喜びに浸って、頑張って卒業して行った生徒は、よわい五〇にもなり、公務員あり実業家あり大学教授ありで、各々分野において活躍しておる。たしかに分校の生徒は、最も不利な立場におかれ、恵まれない施設、設備、不足がちな教師で、日夜精根を傾けて努力はしたものの、成果があがらないように思われた。しかし、今日、全日制同居の定時制に移って、多様化した生徒と共に、お互いに制約を受けながら、不自由な教育に携わり、むかしと比較してみると、つくづく、分校時代の生徒の、勉学に取組んだ、あの真剣な態度と緊張ぶりが臉に浮かんで来る。」と文を閉じられている。

定時制

三つの改革

川越高校は創立以来百年の歴史をもつが、その半世紀は戦前で後の半世紀はいわゆる戦後であった。戦前に生きた人々は生存権や教育や学習する権利まで大きく歪められていた時代で、それは大日本帝国憲法や教育に関する勅語や勅令による教育であった。

一九四五(昭和二〇)年八月十五日の終戦を境にして、歴史は大きく転換し日本国憲法や教育基本法をもとにした教育へと改められた。一九四七(昭和二二)年四月から新しい六・三制教育が発足した。この教育制度の特徴は、九年間の義務教育と学校全体系の単線化、高等教育の開放、男女共学制などである。すべての子供に同等の教育権が認められ、勤労青少年にも教育が開放され、新制高校のなかに働きながら学べる定時制課程や通信制課程も生まれた。

本校に定時制課程が設置されたのが一九四八(昭和二三)年九月で、ちょうど半世紀が

経過した。はじめ本校を中心校とし朝霞分校、入間川分校、所沢分校の三分校をもって開校した。新制高校の目標は、社会的公民的資質の向上、職業的能力の発展、青少年を個人として素質の許す限り発展させることを掲げていたが、一九五二(昭和二六)年には早くも総合制高校は分解され、職業教育に重点を置き、学区制も廃止してコース制が強化され、生徒の実態や社会のニーズにあった教育の改革が学習指導要領改訂という形で今日までいくたびか行われた。この改革の流れのなかで定時制教育も大きく変わった。

一九八五(昭和六〇)年以降本校では画期的な改革が行われた。それは次の三点である。

技能連携制度

第一は技能連携制度である。これは県立の職業訓練校を通信制高校や定時制高校と連携させ、職業訓練校で学んだ科目の一部を高校の単位として認める制度である。高校卒業の資格を希望する職業訓練生の負担を軽減し、高校教育の機会を拡大するねらいがあった。

具体的には、県内にある職業訓練校一〇校と県立浦和通信制高校や本校定時制課程等の間で行われる制度である。職業訓練校に入学者は生徒で高校教育を希望する者は通信制高校に同時に入学し、国語四単位、数学三単位、英語三単位、体育三単位の合計一三単位を通信制高校で履修する。職業訓練校で学習する

連携措置に係わる科目は、通信制高校の選択科目のうち商業経済、工業基礎、製図など職業科目に匹敵する科目で、授業、試験は通信制高校と職業訓練校の教師が内容を連絡調整しながら行い、選択科目として一六単位を認定出来るようにした。ここで定時制高校の一年生に必要な単位数を修得して、職業訓練校を修了した生徒は本人の希望で通信制高校に継続して在学するか、定時制の連携協力校へ二年生として転入学する制度である。協力校である本校では、毎年この転入学のための教育課程を編成している(表①)。

遅ればせながら、本県で技能連携制度が実施された一九八五(昭和六〇)年にはすでに富山県や広島県など八つの県で実施されていた制度である。

特色ある学校づくり

第二は、大学入学資格検定によって合格した科目をそれに相当する高等学校の各教科、科目の単位を修得したと見なす制度である。一九八六(昭和六一)年に県教育委員会より「特色ある学校づくり」の研究指定の委嘱をうけた。本校のテーマは「生徒の実態にあった教育をどう行うか」、「高等学校卒業生にふさわしい学力をつけさせるにはどうするか」という二つの課題で研究を始めた。はじめに、従来の生徒指導や単位の認定、定期考査、追認定考査、卒業認定等に関する内規や

学則を本校の「内規検討委員会」によって改正した。その理由は定時制で学ぶ生徒にある。全日制課程を中途で退学し、転・編入学した生徒、あるいはさまざまな理由で定時制課程を選ばざるを得なかった生徒、いままで高校で学ぶ機会もなく、定職を持ちながら高校卒業の資格をとろうとする高年齢者、生涯学習の一環として教養を身につけようとして入学してくる生徒など年齢差、人生経験、職業環境等実に多様である。このような生徒のなかには、二か年で卒業に必要な単位を修得出来る環境や条件を持った生徒も多々いる。

一九八八(昭和六三)年十一月に学校教育法の一部が改正され、定時制課程の修業年限が「三年以上」となったので、本校では「修業年限の弾力化に伴う内規の改正」が実現した。この間、校長や担当局などの指導を受けながら学校教育法、学習指導要領、大学入学資格検定(大検)等の資料をもとに検討した。その結果、検定の一部免除の方法を利用し、受験科目のうち必ず受験しなければならぬ科目と、選択七科目中の六科目までを二か年在学中に履修・修得し、大検では残りの選択一科目を三年修了時まで合格すれば「大検合格者」になることができる教育課程に改めた。これを希望する生徒には積極的に「大検」受験指導を行い、二年間で卒業できる道を開くと同時に本校の学則も改めた。

三年制定時制課程

第三は併修制度である。埼玉県高校通則第三十条に通信制課程と定時制の課程又は他の通信制との併修制度がある。本校では定時制課程の生徒でわずかな科目の単位が修得できなかった者や時間や能力にゆとりのある者で弾力化に必要な教科・科目の単位を併修により修得させようとしたのである。とくに高年齢の生徒には卒業に必要な単位の増加につきなり人気のある制度でもある。また単位の未修得科目については、本校以外の別の機関で改めて学ぶことにより、学力不足を補うことができると考えたからである。とかく自校で追認定試験を行うとこれを深刻に受け止めなくなりがちである。併修制度を実現するために県立大宮中央高校を訪れ、さまざまな問題を想定して指導を受けながら徹底的にこの制度を検討した。当初は本校の生徒だけでなく、県内すべての定時制高校で実現可能な方法として、大宮中央高校へ依頼したが、現状では併修生を歯止めなく受け入れることは物理的に不可能ということだった。なお、これについては本校が大宮中央高校の協力校や共同学習場となる案も出したが不可能だった。しかし一九八六(昭和六一)年より「特色ある学校づくり」の研修指定を受け、続いて一九九一(平成三)年に「修業年限三年以上に係わる諸課題の研究」、一九九二(平成四)年には

「修業年限三年制課程の設置について」について県教育委員会の研究指定を受けたり、教育長の学校訪問等もあった。

一九九二(平成四)年十二月に新しい制度が決まり、本校の定時制で「修業年限三年制定時制課程」が試行という形ではあったが翌年四月一日より発足した(表②③④)。

そのとき県当局から示された実施要領があるが、本校にとって極めて重要な資料なのでここに記録しておく。

修業年限三年制定時制課程試行実施要領

一 目的

履修形態を弾力化し、修業年限を三年とすることにより、定時制課程を魅力あるものにすることを目的とする。

二 実施形態

ア 修業年限三年の定時制課程の卒業に必要な修得単位の一部を、埼玉県立大宮中央高等学校(以下「大宮中央高等学校」という)の通信制の課程において、履修・修得(以下「併修」という)する。

イ 埼玉県教育委員会は、埼玉県立高等学校通信教育規程第三条に基づき、大宮中央高等学校の協力校として川越高等学校を指定する。

ウ 併修に係わる面接指導及び添削指導等並びに当該併修に係わる事務は川越高等学校において行う。

三 教育課程

定時制課程及び併修に係わる通信制課程の教育課程は、川越高等学校が県教育委員会の承認を得る。

四 併修の許可及び単位修得の認定等

ア 併修に係わる科目の履修は、埼玉県立高等学校通則第三十条項により、大宮中央高等学校長が許可する。

イ 併修に係わる単位の認定は、大宮中央高等学校長が行う。

ウ 定時制の課程及び通信制の課程で分割して履修する科目の単位の認定は、両課程の学習成果がともに十分とみとめられた場合に行い、分割しての単位の認定は行わない。

五 進級・卒業の認定

ア 進級・卒業の認定は、併修に係わる単位認定を受けて、定時制に係わる単位認定と併せて川越高等学校長が行う。

イ 当該定時制の課程における修得単位(二六〇単位以上)に、併修における修得単位(二一〇単位以上)を加えて、卒業の認定を行う。

なお、大学入学資格検定の合格科目を川越高等学校で定めた範囲内で卒業に必要な単位として認定することができる。

六 教職員

ア 併修に係わる職務に当たる教員は、川

越高等学校の教員のうちから、兼任教諭として発令される。

七 会議

併修に係わる教育計画立案等の諸会議は、川越高等学校で実施し、大宮中央高等学校長に報告する。必要に応じて両校の校長は事前に協議する。

八 受講料等

ア 併修に係わる通信制課程の受講料は、埼玉県立学校授業料等徴収条例第二条第二項による額を徴収する。

イ 受講料の徴収事務、学習報告書の受付事務、教科用図書事務等の併修に係わる事務処理は、川越高等学校が行うものとする。

九 事務経費

ア 併修に係わる事務処理に要する経費は、川越高等学校の事務経費として計上する。

イ 学習報告書に係わる添削指導手当は、学校職員の特殊勤務手当に関する規程第五条の規程に基づき支給する。

十 生徒募集

生徒募集は、修業年限四年とする定時制課程及び修業年限三年とする定時制課程について、それぞれ別枠募集ではある

が、出願に当たってはいずれか一方を第一志望とすることができる。

十一 その他

その他必要な事項は、川越高等学校長が別に定めることができる。

*

この制度が実施されてから、時間の経過とともに学校ではさまざまな問題があるようだ。定時制高校が抱えている問題を解決する一つの方法として前述の「川高方式」を試行した。しかし、この川高方式は本来私たちが最初から望んでいたものではなかった。私たちは胸を張って「高校を卒業した」といえる力のある人を教育したかったからである。能力や時間のある生徒は、どの高校で学ぼうと三年間で十分学力をつけて卒業できる道を開きたかったのである。これは生徒指導上からも必要なことだった。川高方式は本校で学ぶ生徒にとつては幸いだが、働きながら他校で学んでいる生徒にあたえられた条件ではなかった。さまざまな生徒に高校教育を開放し、個々の生徒の要望に応えられる教育課程を準備して一人一人に必要な学力をつける学校は「単位制高校」以外にないと私は信じている。そして地域の多くの人々に開かれた単位制高校こそ、誰でもいつでも学べる「生涯学習」の場ともなることであろう。

(元教頭 竹内忠好／元教諭 松本喜作)

表① 技能連携生 教育課程表 (修業年限4年制課程)

教科	科目	標準 単位	1年	2年	3年	4年
国 語	国語 I	4	4	3		
	国語 II	4			4	
	現代文	4				3
	古典講読	2				△2
地理 歴史	世界史 B	4		4		
	日本史 B	4				
	地理 B	4			2	3
公 民	現代社会	4		4		
	政治経済	2				3
	倫理	2				
数 学	数学 I	4	3	2		
	数学 II	3			2	2
理 科	物理 I B	4				3
	化学 I B	4			4	
	生物 I B	4				
保健 体育	体 育	7～9	2	2	2	2
	保 健	2		1	1	
芸 術	音楽 I II	各2		(2)	(2)	
	書道 I II	各2		(2)	(2)	
	美術 I II	各2		(2)	(2)	
外 国 語	英語 I	4	3	2		
	英語 II	4			2	2
	オーラルコミュニケーションA	2			2	
家 庭	生活一般	4				
	食 物	2～12				△2
職 業	文書処理	2～5				△2
	技能連携による職業科目		16			
小 計			28	20	21	20
特別 活動	ホームルーム活動		1	1	1	1
	クラブ活動		1	1	1	1
合 計			30	22	23	22
学 校 裁 量 時 間				0	0	0
週 あ た り 総 時 数			30	22	23	22
備 考		※1年次の単位は通信制高校で認定。 ※2年次の現代社会(4単位)は、普通生の生物I B(2単位)生活一般(2単位)と平行して、独立講座を設ける。 ※3年次の保健(1単位)は通信制との併修。				

表② 通信制科目一覧

1 年				2 年				3 年			
科 目	単位 数	添削 回数	面接 時間	科 目	単位 数	添削 回数	面接 時間	科 目	単位 数	添削 回数	面接 時間
現代社会	3	9	9	国 語 II	2	6	6	古 典	3	9	9
生物 I B	2	6	8	数 学 A	3	9	9	政治経済	3	9	9
体 育	1	3	8	化学 I B	2	6	8	地 理	3	9	9
				英 語 I	2	6	8	英 語 II	2	6	8

※ 3年の古典、政治経済は一方を選択

表③ 修業年限3年制課程 時間割の形式(1995年度分)

曜日 時 限	月	火	水	木	金	土
1						
2						
3				H・R		クラブ
4				通 信		クラブ
5	空欄は、定時制科目			通 信		

表④ 「1学期」通信制科目 面接時間割 (1995年度分)

4 月					20日		27日	
	4 限	5 限	4 限	5 限	4 限	5 限	4 限	5 限
1 年					(オリ)		生物	現社
2 年					英語	化学	国語	数学
3 年					地理	選択	英語	

5 月			11日		18日			
	4 限	5 限	4 限	5 限	4 限	5 限	4 限	5 限
1 年			体育	体育	現社	体育		
2 年			数学	英語	化学	国語		
3 年			英語	選択	地理	英語		

6 月	1 日		8 日		15日		22日	
	4 限	5 限	4 限	5 限	4 限	5 限	4 限	5 限
1 年	現社	生物	体育	体育	生物		テスト	
2 年	英語	数学	化学	国語	数学	英語	テスト	テスト
3 年	地理	選択	英語		地理	選択	テスト	

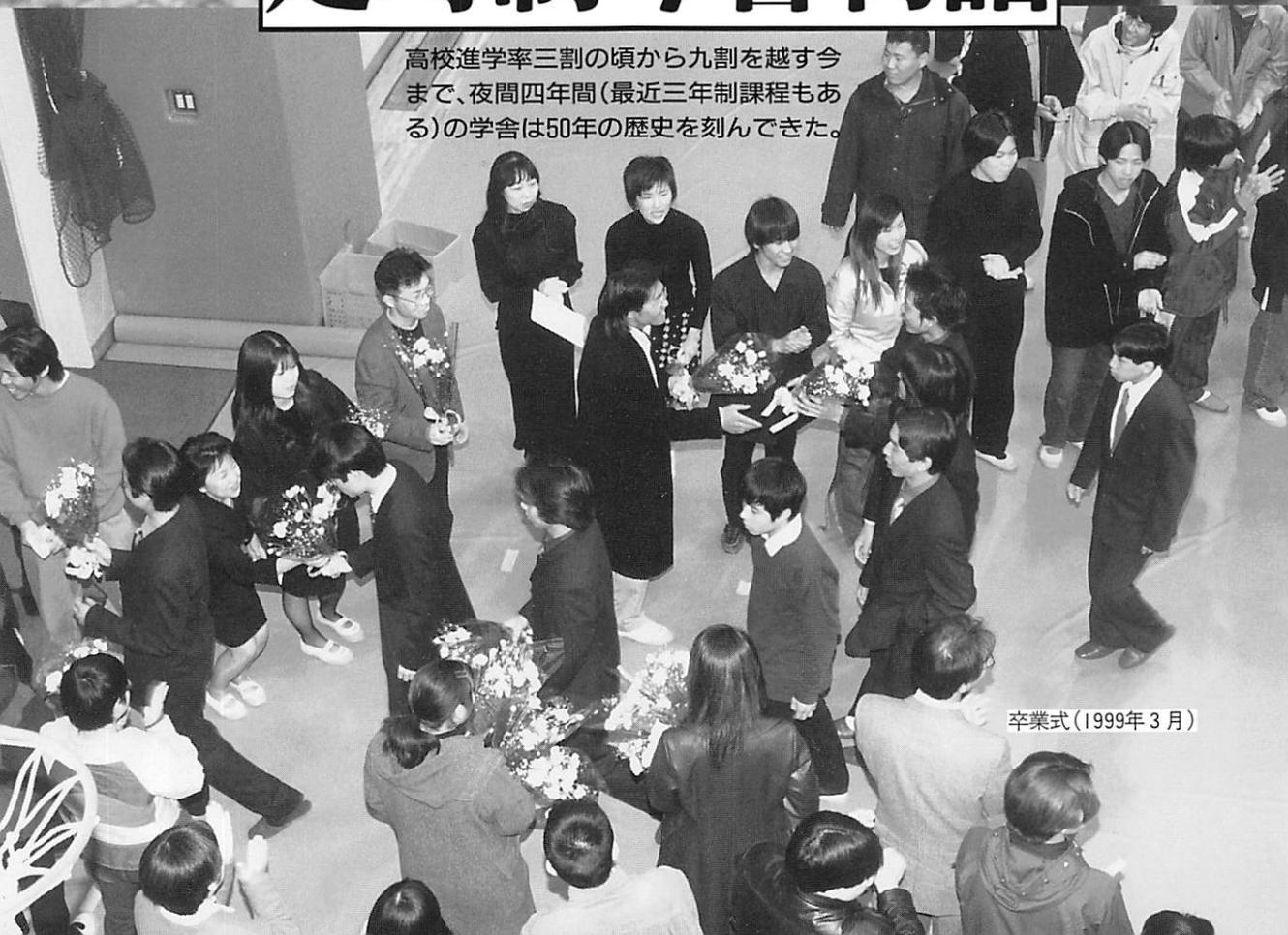
6 月	29日	
	4 限	5 限
1 年	テスト	テスト
2 年	テスト	テスト
3 年	テスト	テスト

卒業式(1953年3月)



定時制今昔物語

高校進学率三割の頃から九割を越す今まで、夜間四年間(最近三年制課程もある)の学舎は50年の歴史を刻んできた。



卒業式(1999年3月)

草創期の定時制

戦後の物不足の中で発足した定時制は生徒と教職員、職場、地域と保護者が知恵を絞ってつくりあげてきた。

運動会、文化祭、遠足さらには当時としては贅沢な関西への修学旅行、スキー教室も実施している。

男子は詰め襟、女子も黒の制服をほとんどの生徒が着用していた。

卒業証書



大塚昭三

昭和三年二月八日生

右は高等学校普通科の課程を修めその業をおえたことを証する

昭和二十七年三月二十日

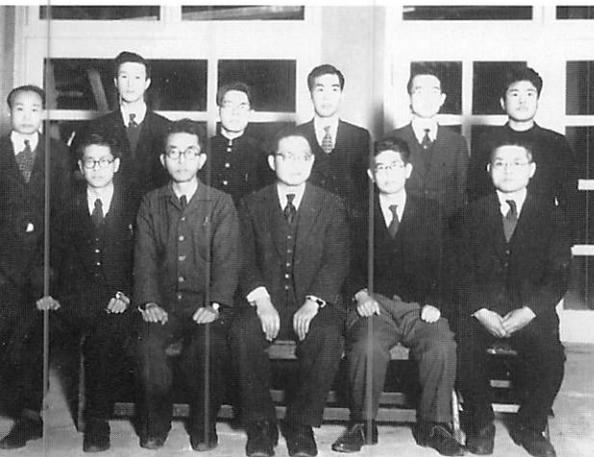
埼玉縣立川越高等学校校長 荻井實

第七四五号

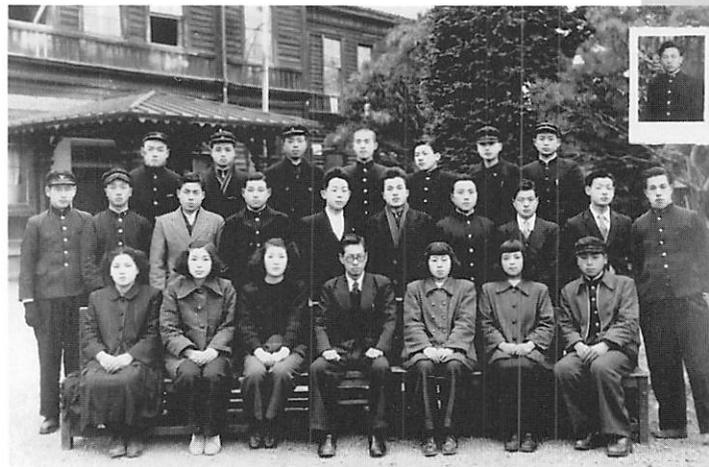
1952年(3回生)の卒業証書



1949年の入学生



1952年の中心校教員



星影親睦会(中心校4回生)



クラブ送別会(1953年)



スキー教室(1952年)



1952年10月、初めての修学旅行(伊勢神宮にて)



教育振興会旅行(1961年)

こんな競技も定時制ならではの





職員室での先生方



ダルマストーブを囲んで(1959年)

朝霞分校

分校

定時制課程発足と同時に入間川、朝霞、所沢分校が同時に発足した。入間川分校には昼間定時制の別科(二年修了)も併設された。
 高校進学率の上昇の中で、各地に新設高校ができるのと地元の高校に定時制が設置され、分校は募集停止となった。

授業風景



生徒会報「かすみ」
 題字は紀貫之の書



「瓜盗人」を演ずる生徒



新校舎をバックに



第3回四校対抗体育大会(1951年)



卓球部中心校と試合(1951年11月)



所沢分校

楽しい調理実習





1959年卒業の入間川分校別科生



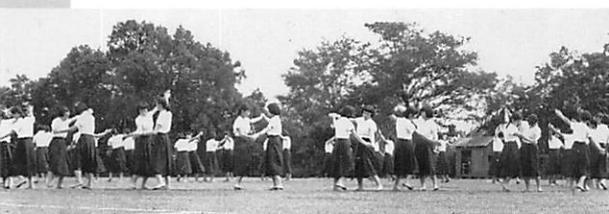
裸電球の下での化学実験(1952年)

入間川分校

珠算部卒業記念



合同運動会で堂々の記録



入間川分校女子生徒のスクエアダンス



独立校舎での別科生



校庭から見た校舎風景

所沢駅伝で3位入賞の中心校分校混成チーム(1964年)



校舎を背に卒業記念(1958年3月)

図書室での新聞部の編集風景





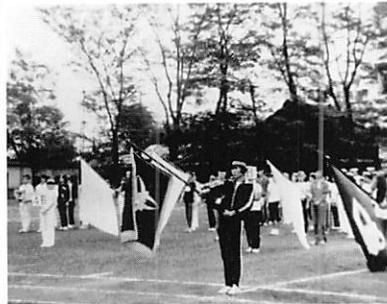
全日制吹奏学部の応援を受けて(1964年)



楽しかったフォークダンス(1963年)



入間川分校によるダンス(1959年)



開会式(1971年)



北村先生ガンバって!(1970年)



体育祭

フォークダンス(1969年)

華道部(1964年)



クラブ活動

山岳部(1958年)



バスケットボール部(1958年)



宣教師に発音指導を受けての英語劇(1965年)



文化祭

フォークソングを熱唱(1969年)



バレーボール部(1974年)



書道部の展示(1958年)



高度成長期からベビーブーム世代まで

高度成長期、東京に若者が集中するようになると、本校にも全国各地から生徒が集まってきた。

分校・中心校合同の文化祭や体育祭は盛大に行われた。県定通総合体育大会や全国大会での活躍も目立った。

第二次ベビーブーム世代の入学時には、定時制生徒も一時的に増加した。

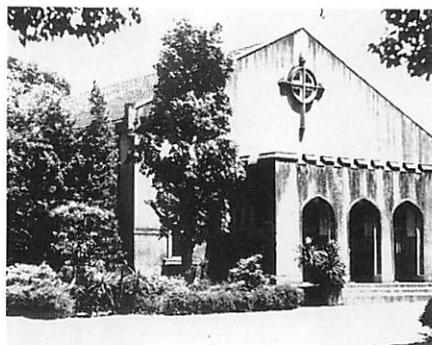
修学旅行



比叡山にて(1964年)



瀬戸大橋をバックに(1989年)



講堂(1965年)



夜間照明の校庭(1964年)

林間学校



(1983年)

宿泊研修



(1973年)

生徒の職場

事務はまかせて(1984年) おいしいパンを配達(1984年) 看護婦さんは人気者(1981年) 油まみれで自動車修理(1981年)



安全第一!(1984年)



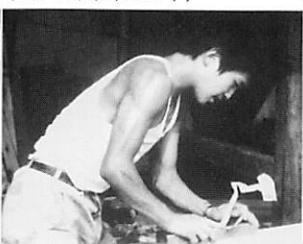
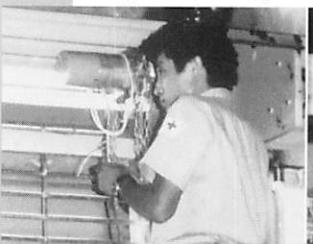
コーヒーはいかが?(1984年)



未来の棟梁(1984年)



熟練工になるぞ!(1984年)

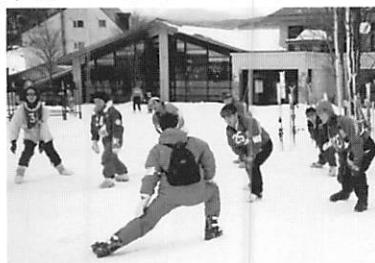




予餞会(1999年2月)



遠足(風布みかん狩り)1997年11月



スキー教室(1997年12月)



生活体験発表会(1998年9月)



文化祭(1998年9月)

新装なった校門から見る明るい教室(1999年)



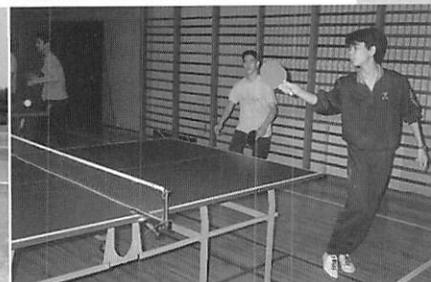
全国大会(ソフトテニス、1998年)



全国大会(剣道、1998年)



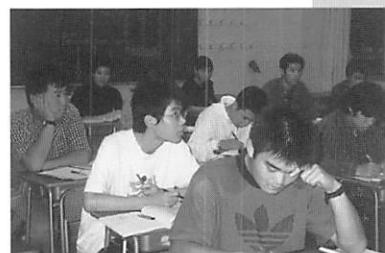
クラブ活動(野球、1998年)



クラブ活動(卓球、1997年)

新しい定時制を目指して

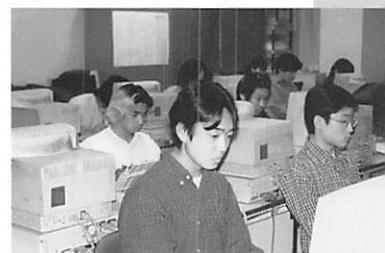
修業年限三年制課程も併設され、新しい定時制を目指して五十二年目を迎えた。
パソコンを使った授業、スキー教室、自分たちで工夫した予餞会、修学旅行も飛行機で沖縄へ行くようになった。
体育館、図書館と設備が整えられる一方、全国的には定時制の統廃合問題も起こってきている。



授業風景(1998年)



授業風景(調理、1998年)



授業風景(パソコン、1998年)

1998年度の職員



素晴らしき仲間 —— 輝きの刻とき

野球部

1965年夏、 神宮に燃ゆ!

第一回全国高等学校定時制軟式野球大会は、八月二十三日から二十七日まで学生野球のメッカ、明治神宮球場において行われた。本校は、先に八月二日から五日間川越初雁球場で行われた埼玉県大会に連日の酷暑にもめげず堂々と健闘、優勝して代表権を獲得、初の全国大会に出場することとなった。

八月二十一日、本校野球部は、阿部先生引率のもとに勇躍神宮球場へと向かった。

この日、甲子園では硬式野球の決勝戦とあって、早くも試合前から異常な興奮を覚えた。

日本青年館ホテルで前夜祭。激励のことはや、都内高校生の演奏、陸上自衛隊の吹奏楽「東京オリンピック」などがあり、七時終了。しかし、折から台風十七号の襲来、外苑の並木は大きくゆれ、激しい雨となる。

二十三日、朝のうち雨が残ったので午後一時入場式、台風一過、きびしい炎暑となる。定刻、青森に始まって、岩手、秋田と続き本校は一八番目の入場、新調なった真紅の大優勝旗を手に加藤主将の姿が見えてくる。そのあとに小鹿野二塁手、内海外野手、関根捕手と続く。思えば、昨春秋、チーム結成以来、酷寒のグラウンドでの夜間の練習、正月も返上しての猛練習に耐えての出場である。選手的眼には涙さえ光っている。全国の代表、三校の入場も終わり、会長東龍太郎氏の挨拶、名誉会長松永東氏の激励のことばと、感激のうちに開会式は終了。いよいよ第一回戦が本球場、第二球場で開始され、本球場では大会初日からナイターに入る。

本校はこの日ゲームはなく練習、二十四日待望の第一回戦を迎える。対戦相手は、富山

県代表県立新湊高校、本校は三回に一挙五点六回二点七、八回それぞれ一点ずつとり、最終回、敵の必死の反撃も増田投手の変則的な上手からのドロップでしとめ9対1で圧勝。二回戦は、一回戦で群馬県代表伊勢崎工業を



1965年神宮で活躍した川高ナイン

相手に左中間スタンドに二本のホームランをたたきこみ、これに6対0と快勝した奈良商工高校。まず本校は一回斎藤の安打を足場に主将加島の快打で一点。しかし、奈良商工も二本の安打を集中して、一点。四回から八回まで両軍0、本校増田投手一〇個の三振を奪う好投で出塁を許さず、奈良商工もまた川内投手絶妙のコントロールで本校をおさえ、緊迫した投手戦のうちいよいよ九回裏を迎える。この回のトップ佐藤、左前安打、小鹿野の二塁ゴロの間に二塁へ。佐藤は俊足である。一年生で唯一の選手庄川に望みを託したが二塁

ゴロ、佐藤は三塁へ。二死走者三塁、打者は四年内海、たちまち一ストライク。監督に呼ばれてダックアウトへ。土屋監督はニッコリ笑って背中をたたたく。内海も微笑をうかべて左のボックスへ入る。次のボールをハッシとたたくと、ボールはぐんぐん延び右中間へ、ついに抜いた。そして勝った。

翌二十六日は昨年度優勝校岡山県代表倉敷工業高校、さすがに群を抜いている。本校必死にくい下がりで最終回二点を返すが、一日休んでの倉敷と連日の試合の本校としては疲労度も違い、どうすることもできず、捲土重来を

期して神宮球場から去った。結果は次の通り。

一回戦(神宮第二球場)

川越高	0 0 5 0 0 2 1 1 0	9
新湊高	0 0 0 0 0 0 0 0 1	1

二回戦(神宮本球場)

奈良商工	0 0 1 0 0 0 0 0 0	1
川越高	1 0 0 0 0 0 0 0 1X	2X

三回戦(神宮本球場)

倉敷工高	1 0 0 4 0 0 1 0 1	7
川越高	0 0 0 0 0 0 0 0 3	3

(定時制教育振興会新聞「樟の木」より)

テニス部

1987年、小川・二宮組
全国大会で
第三位に輝く!

テニス部は過去何回も全国大会に出場し、

とくに団体戦では本校を含む埼玉チームが、全国一位という成績をおさめたこともあった。一九八七(昭和六二)年、本校に転動してきたわたしは、テニス部の顧問となった。前から顧問をしていた渡辺正樹教諭から「今年は有力な選手が卒業してしまったので、クラブは先生にお任せします」といわれた。

この年、二年生に転入してきて、わたしが担任となった小川浩次と二宮政憲がテニス部に入った。

六月、全国大会県予選が行われると、前衛の小川、後衛の二宮は順調に勝ち進み、決勝

戦で熊谷高校と対戦した。決勝戦が始まると多くの生徒が集まってきて、「これが本当のテニスだよなえ」という声が聞こえてきた。

二人は全国大会のメンバーとして、有明テニスの森公園での全国大会に臨んだ。

二回戦から出場し、青森工高の今・神組を4-2で、三回戦はシード校の愛媛北宇和日吉分校の林・曾根組を4-1、四回戦は四日市工高の藤井・柳川組を4-2、五回戦は天理高の篁・馬場組を4-2と下し勝ち進んだ。六回戦は沖繩工業の宮城・堀川組を相手に4-3と接戦の末ファイナルゲームを勝ち取っ

バスケット部

1994年、
汗と涙で勝ちとった
全国ベスト16!

た。宮城、堀川は自衛隊員と記憶している。小川、二宮をみると、試合が終わるとすぐ座り込んでしまい、この試合でスタミナをすっかり使い切ってしまったように思えた。とくに後衛の二宮は、右に左に走り回っていたので、疲労は極限に達していた。回がすすむにしたがって、休憩時間が少なくなり、準決勝は六回戦後すぐに行われた。愛知の岡崎工高の新吉原・平田組と対戦し、2-4で敗れた。疲労がありありとみえる試合で、二人とも無口になっていた。岡崎工高の監督は別れ際、「うちは十分休養がとれていましたが、川高さんは休憩時間がなかったですからね。実力

は小川、二宮君のほうが上でした」と言っていた。わたしも同感であった。

全国大会が終わったあとも、テニス部は二人を中心に夜遅くまで練習に励み、小川、二宮は翌年も全国大会に出場した。このときはスタミナもだいぶ落ちていて、ベスト16にとどまった。二人は後輩をよく指導し、二人から強い影響をうけた部員は、その後数年全国大会に出場した。

十年以上たった今も、前衛の小川の絶妙なラケットさばき、後衛二宮の華麗なフォームは目に焼き付いている。

(顧問 仲田勝己・16回生)

私が彼らと出会ったのは、一九九三(平成五)年四月のことである。

はじめは必修クラブの顧問として授業だけの指導で終わっていたが、一つの大会をきっかけにして変わった。それは、全国バスケットボール大会埼玉県予選会のことである。一回戦は大宮中央(単定)高校に対し勝利を収めた。しかし続く二回戦は、三年連続で全国出場を果たしている川越工業高校にあたってしまい、ダブルスコアの差をつけられ負けてしまったのである。何日か過ぎて一人の生徒



見事三位入賞の表彰を受ける小川・二宮組

から「全国大会に出場したいから練習を見てほしい」と言われ、「練習参加者が一人も来ないという日があったら、その時点で以後の指導はいっさいしない。そのかわり、必ず全国大会に連れて行くからみんなの意志を確認してほしい」という条件のもとで、放課後の練習がスタートした。学校が休みするとき以外は、毎日夜九時から一時間程度、そして夏休み中はボールを持たせず、基礎トレーニングを中心とした練習に二時間かけていたせいか、部員の体重は休みが終わると同時に四、五割

も減っていた。全国大会出場という目標に向け、練習は毎日行われ、欠席する者もなく一年が経った。

一九九四(平成六)年五月二十九日から四週にわたり全国予選がスタートした。一回戦、浦和高校に対し45―7で快勝、二回戦目は昨年二位の豊岡高校に47―45で競り勝ち、三回戦、大宮中央(単定)高校には34―16、四回戦、大宮中央(通信)高校に59―38、続く五回戦、全国へのキップを手に入れるべく松山高校と対戦。75―43でついに優勝を勝ちとった。そして埼玉県の代表として、第四回全国高等学校定時通信制バスケットボール大会への出場を果たしたのである。

全国大会は、八月四日から七日にかけて東京体育館で行われた。前年度出場した埼玉県代表のチームが優勝していたため、二回戦からの出場となった。最初の対戦相手は、全国大会三度目の島根県代表松江工業高校であった。前半17―19で負けていたが、後半自分たちのペースをつかみ、52―40で初戦をものに

した。三回戦は、毎年全国出場を果たしている、青森県代表八戸中央高校と対戦。この試合では、キャプテンが捻挫というアクシデントに見舞われたが、前半から28―30という白熱したゲーム展開となった。後半、残り時間一分というところで、同点まで追い上げたが、惜しくも50―54、二ゴール差で涙をのんだ。そしてこの対戦相手が、第四回全国大会の優勝校となった。

前年度優勝校を出した埼玉県のチームであったため、他校より注目されており、生徒の受けるプレッシャーは計り知れないものがあった。そんな中、全国大会出場を何回もしているチームを倒し、勝ち進んだ。パワーには目をみはるものがあった。

一つのことにごだわり、彼らと過ごした時間はとても有意義であった。「なぜ成る」という諺を身をもって体験できた。この全国大会出場という事実は、将来にわたって彼らの自信につながっていくであろう。

(元顧問 峰行正美)



全国大会出場の夢を実現させた川高チーム

今、新たな決意で

辻本由起江(40回生)

(第三六回全国生活体験発表会)
文部大臣賞受賞

「教師になりたい」

初めてこう思ったのは、中学三年生の春です。私が小学校二年生のとき、父は借金から逃れるために家を出ました。蒸発です。中卒で、何の資格も持たず、外に勤めたこともない母が、二人の姉と私との三人の娘を育てるには、ただ夢中で働く以外ありませんでした。真黒に日焼けして化粧もしない母が、私にはみじめに思えて、一緒に歩くのもいやでした。小学校、中学校と、学級委員などを積極的につとめていましたが、家のことをクラスメイトに話すのがいやで、ずっと特定の友だちはいませんでした。

「母さんのようにみじめに生きるのはいやだ」と思った私は、男女差別が比較的少なく、安定し、自立できる職業として、教師を選んだのです。

私が入学した高校は、新設の選択制高校でした。自分で授業を選択できる高校です。

「とにかく大学入試で有利になるように」と考えてその高校を選んだ私は、典型的な受験マシーンだったかもしれませぬ。あいかわらず自分を語るのがいやだった私には、やはり特定の友だちはいませんでした。さらに勉強時間の確保を考えて、校内活動にも消極的になっていきました。「それでいい」と思って

いました。閉鎖的な友人関係はいやでしたし、それに、「人と人がほんとうに理解しあうことなど、できるはずがない」と思っていましたから。

しかし、二年生になったころ、私はだんだん、今の社会や自分に対して疑問を持ちはじめました。中学生のときからユニセフの会員になっていた私は、毎月少しずつ献金をしていました。けれども献金をするだけで、一日に四万人もの死者を出す飢餓や貧困を解決できるとは思えなくなりました。もつと身近なことでは、大学の入試競争率が高まっていくなかで、「どんどん受験勉強に没頭していく高校生活でいいのか」と思いました。入試で落とされ、自殺した人のニュースも見ました。大学の授業料も値上げされていきます。「このままでは進学もできなくなる」と思いました。「社会のことについても、学校生活についても、もつとみんな語り合うべきじゃないか」と思いました。

そのときになってはじめて、私は自分の孤立を感じました。相談する友人もいない、人に働きかけることもできない自分を知ったのです。一度気にしはじめると、孤立感が強まるばかりでした。友人もいない、進学も無理、そんななかで高校に通う目的が見えなくなり、

登校拒否になりました。自分でつくった殻を破ることもできず、けれど一度生まれたい疑問を押し殺すこともできず、「このままじゃいけない」と思いながらも身動きがとれませんでした。今までの高校、今までの生活、すべてから逃げたい一心で定時制への転校を決め



文部大臣賞受賞の辻本さん(前列右から5人目)

ました。

定時制二年に転入した私は、まさにカルチヤーショックをうけました。先生の声もきこえないうるさい授業、勤労学生というイメージからはほど遠い生徒たち、「一体ここは何なんだ」という感じでした。「こんなはずじゃなかった、もう嫌だ」という気持ちでいっぱいになり、クラスメイトもいるなか、休み時間に廊下で泣きだしたこともあります。けれど一方で、「全日制のころのような誤ちはくり返すまい、孤立しないようにしよう、校内活動でも積極的になろう」と努力しました。

文化祭実行委員をするなかで、校内のいろいろな人たちと親しくなりました。子どもを育てながら通学する人、第二人と暮らしながら頑張っている人、四〇歳をすぎて常に向上心を持つてはつらつとしている人、本当に素敵だと思えます。また、クラスの何人かで徹夜でテスト勉強をしたとき、授業中はいつもうるさくしている人が、「仕事を休みたいってよく思うけど、クラスの間みんなも頑張ってるって思うと、俺だけさぼるわけにはいかない」と言っていて、眠い目をこすりながら仕事に行く姿を見たときには、本当に涙がでそうな気持ちでした。

仲間たちの素晴らしさを発見すると同時に、

私には、今の定時制というものが見えてきました。私が通う川越高校の入試競争率は、昨年度の二次募集で二・五倍、今年度は二次どころか、一次募集で定員を上回る一・三倍です。受験者のほとんどは、全日制で落とされた人や、「お前の成績じゃ全日制は無理だ」と中学校の先生に言われ、傷つけられた一五歳です。入学しても、一年間で何十人も生徒が学校を辞めていきます。生徒の負っている心の傷は、本人でさえその痛みを感じなくなるほどに深く、いやしがたいものになってきていると思います。

私は、みんなの力になりたい、と思いました。一緒に希望を見つけない、と思いました。動きださずにはいられなくなったのです。そんな思いから、私たちの勉強条件をよくしよう、互いに励ましあいながら成長していこう、という目的を持つ「定時制・通信制教育をよくする会」の実行委員長もつとめ、頑張ることができました。

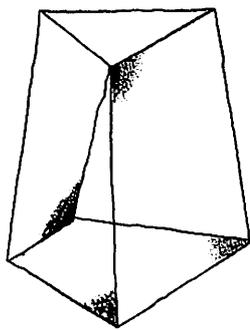
定時制に通い、働くようになり、さまざま環境に生きる仲間たちを知るなかで、私の母に対する見方も変わっていきました。

あの十五年戦争の最中、貧しい農家に生まれた母は、家の手伝いに追われ、勉強時間も保障されず、進学もできず、何の資格も取得

できなかったのです。二人の姉も結婚し、時間と気持ちに余裕のできた母は、新聞もよく読むようになり、地域の懇談会にも出かけていくようになりました。苦しくても弱音もはかず、そして今、五〇歳を過ぎてどんどん成長していく母は、誰に対しても誇れる私の大切な母さんです。

いま私は教師を目指し、大学へ進もうと決心しています。単に女性にとつての有利な職業としてではなく、仲間たちの力になりたい、教師として再び定時制へ帰ってきたいと思うなかでの新たな決意です。

私たちを苦しめるさまざまな問題の根本にあるものを見つめ、その解決のために仲間とともに努力すること、しつづけることが、いまようやくかんた私の生き方です。この生きる姿勢をけつしてくずさず、教師を目指し、大切な人たちの力になれる人間に成長していこうと思います。（誇りある青春より再録）



カット・中野武夫(高13)

忘れえぬ日々

定時制50年の懐かしい思い出がいま……

開校当時の定時制

元教諭・原田節二

すでに、『創立八十周年記念誌』に座談会形式で、開校当時の様子が述べられているので、重複する点があるが、今でも鮮明に覚えているものがあるので、ここで改めて述べてみたい。

○開校当時の生徒・職員

開校は、本来四月であるが、準備が間に合わず、一九四八(昭和二三)年九月十五日である。当時経済的理由や、家庭の事情などにより勉強したくてもできなかった人達が、高校が門戸を開いてくれたとのことで、向学心に燃えた若者が入学して来た。旧制中学五年卒は三年に、旧制中四年修了者は二年に、中卒者、青年学校卒、小学校高等科卒、軍関係の学校卒などの者は、一年生であった。経歴、年齢、職業ともにさまざまなたちの集まりで、当然若い教員より年輩の生徒も入っていた。

一方教員の方は、当初専任二名で、他は非常勤であった。商業、家庭の教員を除き、全日制の教員が兼務していた。翌年四月より全日制から数名の教員が、定時制に移った。私もその中の一人である。

○授業風景

(1) 停電のこと 開校当初授業中に停電が多く、十分〜二十分間暗やみの中で授業をしたことを思い出す。停電すると、授業のない教員が、ローソクを持って各教室を回っていたが、そのうちに、各教室分提灯を用意した。今なら停電すれば、騒ぐとか、外に出歩く生徒もいると思うのだが、当時は、みんな真剣に暗やみの中で、だまって話を聞いていた。それだけでも知識を吸収しようとしたのだろう。

(2) 冬の寒さのこと 開校してからの一冬だったが、ストーブがなく、生徒はオーバー

を着て、手袋をつけて授業を受けていた。教員の方もオーバーを着て授業をした。しかも木造校舎なので、すきま風が入り、その寒いことには、さすが若い者もまいったものだ。当初火災が心配とか、タバコが心配とかで、全日制からストーブの設置にクレームがついて許可されなかったためだが、寒い中、空腹に耐え、粗末な衣服で、よく授業を受けたものだと感心している。

(3) 生徒さまざまのこと 相当経験をもった社会人のため、付き合いで、酒を飲むことがあったと思う。普段はそんなことを教室に持ちこまなかったが、「先生今日は建前のため、一杯飲んできたので、遅刻して申訳ありません」と赤い顔をして、教室に入ってきた大工のK君。税務署に勤務するN君、「今日は署で酒を飲むことがあったのですいません」と、こんな風景も時には見られた。専門



正月自宅に訪れた教え子達に囲まれた原田先生

的には、すでに経験者なので、先生の方が聞くことがあった。

(4) 単位修得のこと 全日制と同じ水準で授業をしていたので、理解できない生徒もいたと思う。二科目欠点で落第とか、無遅刻、無欠席で三年まで来て、退学したものもいた。大変厳しくしたためか、生徒の実力は向上し、大学進学者も多く、後に、医師、弁護士、教員、会社経営者、市役所の部長等になった者が多数でている。

(5) 給食のこと 当初給食設備はなく、空

腹をかかえて登校した者が多く、コッペパンと脱脂粉乳のミルク給食は少したってからである。私の場合も昼東京の大学に行っていたので、夜は大概学校が終わって家に帰っていた。身体が夜は十時以後に食事とるように慣れてしまい、学校が休みに入ると調子がわるく胃病で苦しんだ。

(6) 通学のこと 私は後に縁あって、川越西高(旧霞ヶ関村で、日高市との境)に勤務することになったのだが、家から自転車通勤していて、大体片道三十分かかった。反対に川越高校までは約二十五分かかった。川越西高の近くのN君は毎日家業の農業を手伝い、自転車通学で夜通った。いくら若いといっても、片道約五十分、しかも今と違い舗装した道路でなく、砂利道、雨の日も風の日もよく通ったものと感心しているが、学校を卒業後某光学関係の会社に入って、部長にまで出世している。旧福原村とか川島方面からも皆自転車通学で来たものだ。

(7) 学校行事等のこと 体育祭など日曜日しか使えないので、雨の場合は大変で、雨の中決行したこともあった。スキー教室も実施したが、当時は今のような服装でなく、普段と変わらないような服装であり、靴も軍靴であったと記憶している。その他会社見学(新

聞社)や、地理の巡検なども行ったが、参加者も割合多かった。大切な日曜日であるのに参加したわけは、自分達は高校生であるとの意識の下に、高校生活を楽しもうとした気持ちがあったのだと思われる。

○終わりに

寒さ、空腹、睡魔の中、家庭―職場―学校―家庭の生活、現在のように暖房のきく教室でなく、給食もとのついているのと違い、よく頑張ったものだ、私など教えられることが多かった。中には職場には隠れて通学した者もいた。生徒が一生懸命なので、休みたくても休めなかった。同窓会に招待されると、「よく途中でやめようと思ったが、そのつど頑張るぞといって学校に行ったことが、後に何の仕事にも一生懸命打ち込めることとなったので決して無駄ではなかった」と言っている。



カット・平不二夫(高5)

感謝

4 回生・吉住 登

この原稿を依頼されて、先日ふらりと川越高校を訪れた。木々の向こうに立派な校舎、体育館がそこにあった。私たちの学んだ二階建て木造校舎はあとかたもなく、その場所すら分らない。歩くとギシギシとうるさい音をたてる廊下、立て付けの悪い教室の出入り口、ガラスのない窓から吹き込んでくる風の寒さ（窓ガラスがなかったのは盗まれたからで、後には校章入りのガラスが入れられた）。不思議と夏のことあまり覚えていない。

多分、私は授業中眠ってばかりいたのであろう。目が覚めていたのは空腹の時だけだったように思う。とくに二時限目の休憩時間に一〇円のコッペパン（ジャム付は一円）を食べたあとと睡眠には誰も勝てないと思う。

あのころ、冬季にはしばしば雪が降った。数人の生徒しか集まらない時があった。暖房用のダルマストーブを囲んでの授業は楽しく、悲しい思い出である。その授業中、見回りに来た校務員の方から「もしもし授業が終わったら早く帰ってください。」と言われた。原田先生（多分）が「只今、授業中でございま

す。」と答えられると、「これは失礼いたしました。」と去ってゆかれた彼の済まなそうな顔をはっきりと覚えている。

全日制の方々から定時制の生徒がタバコを吸って吸い殻が床に転がっている、火災になったら大変、やめるようにとの申し入れがあり、窮余の策として、バケツに水を入れ、灰皿として使用した（当時二〇歳以上の生徒が多数おり、喫煙可能な生徒もけっこういたのである）。

先生方は熱心に教えてくださった。その先生方を学校の経営者であるかのように錯覚し、さまざまな要求を持っていた。今、誠に申し訳なく思っている。定時制で初の修学旅行の実施、昇仙峡へのピクニック、越後中里へのスキー旅行、むさしの文庫の設立等である。みな、先生方のご努力によって実現したものである。当時は当然のことと思っていた。

市川正男先生の著『夜学生徒とともに・教師回想・第二集』に先生方の側からみた私たち生徒の姿が書かれている。確かに教えにくい生徒だったと思う。

その上に先生方を悲しませたのは、教室から生徒が一人またひとり姿を消していくことだったという。健康上の理由によって、職場の都合によって、学友は消えていった。去っていったのでなく、消えていったのだ。私にはそう思えた。無事に卒業した友よ、消えていった友の分まで世のためにささやかな奉仕をしよう。

私たちの恩師だけでなく、今も黙々と働いておられる定時制の先生方に感謝しよう。



1957年10月、修学旅行(京都の宿で)

忘れえぬ「丘の灯」の仲間たち

入間川分校1回生・森 轟

母校県立川越高校が、創立百周年を迎えるにあたり、われわれ卒業生としては感無量であります。私は一九四九(昭和二四)年四月、当時すでに開校されて間もない川越高校入間川分校一期生に途中編入で入学いたしました。当時は学制改革直後であり、私自身も旧制中学、新制中学、新制高校と毎年呼称が変わるという変遷期の中にあり、さらに、社会全体としては終戦後間もない時期でもあり騒然としたなかでありました。したがって分校校舎も、一九四九年から独立校舎完成までの二年半の間に公会堂、中学校、小学校と渡り歩きやっと一九五一年に入間川の街を一望できる丘陵に独立の木造校舎が完成し、落ち着きました。夕開迫るころ眼下の各家庭の灯が次々と点灯されていく風景は忘れえぬ風情でありました。後にわれわれ一期生の同窓会名を「丘の灯」としたゆえんであります。

当時の社会状態は同窓生の年齢差、経歴差に現れておりました。先生より数年年長の者が何人もいたし、それより同級生の中には太平洋戦争に参戦し日本皇軍として、未来を夢見て満州の曠野に活躍していたが、終戦でその青雲の夢破れぼろぼろになって帰国、再度己をふるい立たせ新たに向学の志に燃えて入学した者もいたのです。それらの友の中にはすでに物故された方もいますが、親友の君もその一人です。「万年青年・生涯現役」を標榜していた彼も今はいません。

今振り返ってみると夜学と言われていた当時の定時制の生徒と、現在の定時制の生徒とは意志、意識において相当の差があったように思います。すなわち世の中が騒然としており日々食べ物を得るのに必死になっていた時代で、その日その日の生活がせい一杯の時代でありましたが、学園生活は楽しかった思い出ばかりです。それは、初代分校主任として赴任された恩師大護八郎先生の人柄によるところが大きかったです。勉強以外の活動では先生の最も得意分野であった考古学の野外研修があります。土器の発掘もあったがむしろ路傍の石、卒塔婆の拓本取りが中心でした。近郷近在を歩き廻り、生きた歴史を学びました。

また、冬の上越石打のスキー行は忘れ難い思い出です。農家での民宿であるが、酒を好まれた先生が最も楽しみにされていた農家の自家製のドブロクを大きな二合徳利で出され、これがまた大変な旨さで私たち学生も一緒にご相伴にあずかりました。夜は掘炬燵に十人余りずつがまわりから足を突っ込んでのゴロ寝です。身仕度も今のように華やかさはもちろんなく、軍服の改造品などであり、靴なども軍靴のかかるとにカンダハの止め金具を打ち付けたものです。それでも楽しかった。卒業まで毎年引率してくださった。

クラブ活動は演劇部、N君による滝廉太郎「荒城の月」は忘れられない。写真部も活発でした。二級下に準ミス入間川に入選した女生徒がいたが、そのU嬢をモデルに川原で撮影会を開催したり、関東名物入間川七夕祭写真コンクールに出品し、私も入賞者の一人になりました。その他、山岳部、陸上部、野球部、バスケット部等があり重複入部して学園生活を楽しみました。特に山岳部は初企画が雲取山登山であったが、その後奥秩父連山を

次々に極め、谷川岳にも数回挑戦しました。何しろそのころの登山は、最終電車で最寄りの駅まで行き夜を通して歩きつづけての挑戦でありました。

また、腹を空かしての下校時は、同じ方向の男子が女子生徒をそれぞれ自宅まで送り届

けるのがきまりであったのです。これも懐かしい思い出となっています。

卒業間近になると学生同志の付き合いが、いつしか淡い、甘い思慕の念に変わっていった人もいたのでは……。今同期生同志の夫婦が一組健在です。思い出は年々歳々薄れてい

創立のころを想う

戦後間もない一九四七(昭和二二)年三月、教育基本法・学校教育法が公布され、新たに六・三・三・四制の学制が成立したが、それにともないひろく勤労学生に学習の機会を与える均等の思想に基づき、定時制高校が発足することになった。川越高校における定時制

当時二部と呼ばれていたが、その創設についての詳細は、在学した生徒は知るすべもなかった。県立文書館に保管されている各校から提出された書類によれば、浦和高校、浦和第一女子高校、熊谷高校など各校の特性を活かした形で行われたもようである。しかも分校の設置は地元の積極的な姿勢により実現したものであった。所沢では町長をはじめ旧村からでた議員が、川越高校の分校を創るならば、

地域の向学心に燃えた青年に満足を与えられるし、青年の善導に最適と考え、誘致の努力を続けたのである。校舎の提供も、財政負担もすべて地元が行ったのであるから、その英断は賞さるべき事と言えよう。

さてお世話になった卒業生として、夜学に通ったころの思い出は数限りなく、到底紙幅に尽くすことは出来ない。

開校に向けて入学希望者の選考がなされたが、一期生はさまざまな経歴をもつ者が集まっている。復員兵士もいれば、旧制中学の卒業生、青年学校の卒業生、新制中学の卒業生などと多種多様な人たちが集まった。職業も多様で当時のあらゆる職域から参加していた。二期生は新制中学、旧制中学出身者が大半を

くが、楽しかったことは、昨日のこのように鮮明に思い浮かべることができます。卒業して四十五年が経過する今、恩師大護先生、秋葉先生のご参加を得て盛大な同期会を開きたいと思っています。

所沢分校2回生・大館右喜

しめ、若干の青年学校卒業生などがみられた。三期生になるとほぼ全員が新制中学出身者となった。一・二期生は年齢の差もあり、四〇歳の生徒も十代の生徒も学習から球技まで、ともども力を尽くしたのである。

忘れられないこと

あの頃、一番嬉しく有り難かったのは、街で出会った情けであった。H薬局の店主人は「がんばりなさいよ」と、行けば必ず声をかけてくださった。K眼科の女医先生も「えらいわね、がんばってね」と励ましてくださり、ときには「きょうは(治療費は)いいよ」とさえ言ってくださった。冷えきった心を温めてくれた方々の優しさを私は一生忘れない。(久保寿美枝・5回生)

誘致にあつた地元の努力により、分校は旧所沢高等女学校の校舎を利用し、老朽化した施設設備を改修して開校された。平屋の校舎と講堂があり校庭では球技も可能であつたから、職場から登校する生徒たちは一種の解放感に浸ることができた。裸電灯のもておこなわれた体操も、講堂の卓球練習も、人それぞれがおかれた疎外感や、矛盾感覚を忘れさせてくれた。多くの生徒が理由なく休むことをせず、黙々と暗い砂利道を通学してきたのは、そのような触れ合いにひかれたからであつた。

年長生徒の、さまざまな生活から得た知識に基づく主張や論争は、冬の石炭ストーブの周辺で交わされ、新制中学から入学した生徒には刺激的であつた。また読書家の年長生徒が語り合う話題を聞けば、焦燥感をもつほどの隔たりであつた。環境には恵まれなかつたが、豊かな人間群像が存在したというべきであらう。

学習とともに生徒会活動やクラブ活動も活発に行われた。もちろん役員は立候補制度で選挙演説も開催された。初代会長は田代氏、二代会長は粕谷氏であつた。ともに高校生ばなれをした社会人で、弁舌は先生以上であつた。スポーツクラブの試合は各間部の高校だ

けではなく、会社のチームとも行われ、多彩であつた。とくにバスケットボール部と女子バレー部、および卓球部は各種の大会に参加して好成績を収めた。

所沢分校の文化部の活動では、生徒が管理した図書館が注目された。図書委員は学校から予算を認められると、神田や本郷の古本屋街にリュックを背負い購入に出た。委員の好みで選書されはしたが学術書も多くそのレベルは相当なものであつた。それは授業を持たれた先生方からの影響も強かつたようである。また文芸部は年間何冊もの雑誌を発行してゐた。一期生がハウプトマンの『沈鐘』から誌名をとり部報にしたもので、多数の作品が寄せられ、長期にわたり続刊された。当時はガリ版印刷であり、岡本某という人が荒幡の寺に身を寄せられ、市内各所の印刷依頼を受けられていたので、無理を言つて印刷して頂いた。岡本氏は東京で印刷関係に従事されたが、ゆえあつて引退されていた。氏のご好意があつて部報は出されていたようである。

所沢分校創立期を記すにあたり最初に紹介すべきは、授業を担当された若き先生方の思い出であるが、紹介が後になつてしまった。

当時、学習指導要領の規制は弱く、先生方は自由に創意工夫を傾けられて授業を展開さ

陸上部

高校時代の想い出といえは、なんといつても陸上部。部員数は少なく(女子部員も四〜五名いたが)、平日の放課後各自が目標に向かつて練習をおこなつていた。夏休みの休日には本校グラウンドに本校、朝霞、所沢、入間川分校の陸上部員が集合し、種目別にわかれ合同練習をし、たがいに競争心を燃やしたものだつた。

冬になると、正月休みの二日に中心校に集合して、伊佐沼往復ロードを練習した。

駅伝大会になると本校と各分校あわせて「川高定」として最強チームをつくり、各地の駅伝大会に参加した。以下が当時の成績である。

川越・東松山往復駅伝 四回参加

六位入賞一回

所沢市内一周駅伝 四回参加

三位入賞一回

朝霞一〇マイルロードレース 参加

所沢市内一周駅伝では先輩が伴走者になり、自転車選手を勇気づけてくれた。女子部員は中継所での手伝いとして参加し、われわれを励ましてくれた。

「川高定」は中心校と分校陸上部が一つになったチームであり、各大会は陸上部全員参加の大会であつた。

(相沢俊男・朝霞分校17回生)

れた。熱意ある若き教師陣の編成に努力されたのは、所沢町から強い要請を受けて、川越高校から赴任された鈴木陸雄先生であった。

旧制川越中学の伝統と鈴木先生の人脈の広さが多数の教師を短時日に招集できたのである。

英語を担当された町野静雄先生は都立大学に在職され、『最新コンサイス英辞典』の執筆陣に名を連ねられていた。英語と米語の差などを含めて、穏やかに授業を進められ、夜の更けるのを忘れる思いであった。またのちに朝日新聞の婦人欄や学芸欄に健筆をふるわれた村田先生は紅一点で、新傾向の英語感覚は生徒を魅了した。当時生徒が苦手とする英文法をいろいろな方法で教えられたのは山田先生である。毎時間簡単な設問を作られ、丁寧に添削された労苦は大変なことであったと思われる。先生は出張で休講されるとき、当時所沢高校長だった父上に代講してもらったほどの熱心さであった。先生は先年まで一橋

私が一九五七年四月朝霞分校に入学したのは二四歳の時でした。三年続いた朝鮮戦争が

朝霞分校が私の「大学」だった

大学で教育にあたられた。数学の辻功先生はのちに筑波大学の教授になられるが、当時は院生だったのであろう、遅進の生徒には夜遅くまで教え込まれた。日本史の藤宮先生も大学の研究生らしく、新しい学説を紹介された。西洋史は小沢郁郎先生だった。毎時間、ガリ版刷りの資料を配布され、雄弁にして詳細な授業は生徒を圧倒した。先生はのちに多くの論文を発表され、また戦中の清水高等商船学校の兵学校化反対闘争の体験をもとに、新潮書き下ろし文芸作品『青春の砦』を書き、研究書として『世界軍事史』を著した。東洋史では栗原益男先生が、唐代末期藩鎮制度など新鮮な講義ノートをもとに、学会の研究状況などを話され、生徒は飽くことが無かった。兵役で負傷したこと、研究と生き方のことなど、勤労学生の心を打つことが多かった。先生は病を克服して上智大学で長く教育にたずさわられた。国語では郁郎先生の兄、俊郎先

終わったあと、朝霞の第一騎兵師団キャンプドレイクで自動小銃や機関銃などの武器を扱

生が近代文学の授業に力を入れられた。宮沢賢治の作品を語る先生の姿は、今でも昨日のことのように思い出される。先生の研究は筑摩書房の賢治全集補遺などに結実し、愛知教育大学での活躍など教え子にとってうれしいことであった。

こうした若い研究意欲あふれる先生方をあつめ講座を作ったのが鈴木陸雄先生であった。そしてこの自由な教育環境を守り育てたのは、第二代主事の新井弘達先生であった。

また所沢分校に情熱を傾注して支えられたのは、初代PTA会長の長沼氏であった。氏は日吉町郵便局長という激職のなかで、校舎設備、講座の充実をはかるために、役所への交渉をはじめ、夜は職員室に来校され、教師生徒の要求を聞き解決に奔走された。氏は定時制という新教育制度を愛され、大切にされ、一家をあげて分校の育成につくされたのである。

朝霞分校12回生・船田光一

う兵器補給中隊に事務員として勤めていました。本部は赤羽の旧陸軍工廠にありました。

最初の二年間は勤めの後、夜は東京目白の英会話学校で勉強していましたが、英語がわかるようになるると二人の荷扱いの人達の係長に選ばれ、帳簿をつけ報告書を作りサインしたり、米軍下士官との間に立ち、連絡や通訳をするようになりました。そこで、高校卒業資格が必要だと思ふようになり、朝霞分校に入ったのです。

敗戦後の日本経済は朝鮮戦争によってやっと思をついて、世の中も落ち着いてきたころでした。同級生の大部分は中学校からストリートに入学した人たちで、年上は私の外にもう一人だったと思います。そんな中で、入学した以上は必ず卒業すること、学校を休まないこと、勉強に遅れないことを私は心に決めていました。

しかし、四年の時に休みすぎて分校主任の白井正先生から嚴重に注意されてしまいました。その他のことは、何とか守ることができました。

各学年は一クラスでした。ほとんどが同じ朝霞町の人たちであったためでしょうか、上級生も下級生も一緒になって仲良しでした。私もその仲間になって動き、遊び、学び、年の差も気にせずに過ごせたように思います。クラブ活動も盛んでした。私は最初は柔道

部に入りましたが、体力的にきついので後になって音楽演劇部に移りました。皆が勉強ばかりでなく、高校生活を楽んでいる人が多くおりました。同級生たちは今も朝霞市内に住んでいる人が多いので、気分よくお付き合いさせていただいております。

世の中が落ち着いてきたと書きましたものの、もっと大きく世界から眺めると、大変な時代でした。東西の冷戦は激しくなり、日本の社会もその影響を受けました。経済は発展して余裕も生まれたのでしょうか、我が朝霞分校の仮住まいの校舎も、次のように変遷しました。

一、朝霞の小学校の木造校舎を夜間だけ間借りした時代。この校舎は今の朝霞高校の隣の、第四小学校の所。一九四八年分校開校以来九年間ここにあり、私はその最後の年、つまり一九五七年に、一年生として通いました。

二、朝霞中学校の新築校舎に間借りした時代。今の朝霞一中の校舎で、二年生としてここで一年間過ごしました。一九五八年のことです。

三、朝霞分校専用校舎の時代。一九五九年に今の朝霞市役所の敷地に、鉄筋二階建ての独立校舎が新築されて移転。先生も生徒ものびのびと学校生活を送れました。

恩師

一九五七（昭和三二）年三月十一日午後六時四十五分、私は川越高校所沢分校の門をたたきました。長崎県五島の有川中学校を卒業し、東京の大学で勉強したい一心で上京、準備として通信教育を受けておりました。到着早々に下宿の娘さんから所沢分校で二次募集をしていることを教えていただき、さっそくかけつけました。学校の職員室に新井弘達先生、徳増学先生、片桐先生、木村先生がいて、私は五島弁で入学したいむねを話しました。今でも先生方にお会いすると、話にでてきます。特に新井弘達先生は私にとって大切な先生です。一生徒の結婚式のためわざわざ五島列島まできてくださいました。その後も親代わりをしていただいております。人生の中で良い恩師を得ることができた高校生活は、なつかしくも充実した四年間であったと、今でも思います。

（谷川康夫・所沢12回生）

体育の授業では山口利通先生が、年長の私の体力の限界をいつも注意深く見ていて下さしました。先生は日常の挙措動作についても川越高校生徒として矜持を保つと教えておられました。他の先生方からもたくさんのお話を教えていただきました。教えられてもその時には気づかないで後になってそれを理解することも多くありました。

栗原益男先生は歴史を学ぶ時の想像力が大切だと言われました。愛川敬武先生は化学を教えられ、夏休みの課外授業で、ある時蛋白質の検出をする実験をされたことがありました。それがどれほど大切なことかは後になって分かりました。荒野久雄先生にはメンデルの法則について教えていただきました。その他にも地球上の生物の多様なあり方とそこにある法則性を気づかせるような授業でした。白井先生は私たちが今ここに あることの意味

学ぶことの楽しさを知った四年間

入試用の資料をいただきに川越高校の門をくぐったのは、何年(何十年……?)ふりだつたのだろうか。川越の大地にしっかりと根を張つたくすの木の大木に優しく迎えられ、ホッとすると同時に、なぜか懐かしさを覚えたものでした。

思い起せば、昭和四十年代の初め、私の職場にも定時制に通う野球センス抜群の青年がおりました。彼らが神宮の全国大会に出場したときは、職場の仲間が交替で休暇を取って神宮まで応援に行ったこともありまし

た。を説いておられ、人としていかにあるべきかを熱心に話され、感銘を受けました。

今もこのようにいろいろと、強く印象に残っているその当時のことから思い出してみますと、朝霞分校が大学へ行ったことのない私のようなものの大学であった、という気がしております。

高校を卒業してから、私は東京のレンズシヤッターを作る会社に移りました。日本の産業構造の変化とともに、多くの企業が東南ア

のころから、このくすの木には緑があつたのでしようか。

あれから二十余年、いろいろの思いがあつて入学した川越高校定時制。四年間の学校生活は長くもあり短くもあり、いろいろな体験をさせていただきました。

親子ほどの年齢差のクラスメートとともに迎えた入学式。一人だけ年の離れたオバさん……だけが選考の理由であつたのであろう「誓いのことば」。落伍者なしの進級、卒業。とにかく他人に迷惑をかけずに過ごす四年間が

シアに進出しています。

私の会社もシンガポールに電気式のディスプレイ工場を作りました。そして生産活動をラインに乗せる立ち上げの技術指導のため一九七七年から三年間、現地の人たちと暮らしました。外国の人たちと理解しあい一緒に働くことは、自分の視野も広くなりそのことがまた、日本のことを考える時に距離をおいて、余裕を持つて考えることを教えてくれたものと思っております。

41回生・鈴木セツ子

目標でした。

私の在籍したころの定時制は八クラス、充実していた時期でもあり、クラブ活動や学校行事にも力が入りました。記憶の詳細は月日とともに薄れていきますが、定時制への思いを当時生活体験発表の中で語つたことばから引用してみたいと思います。

中学を卒業して二十四年、「朝霞に煙る『定時制』というドアのノブに精一杯の背伸びをして手を掛け、とうとう開けてしまいました。」と入学時の不安な気持ちを表してい

ます。

私には、通いたいと思うとき受け入れてくれた定時制がありました。定時制への入学動機はさまざまで、みんなが同じ気持ちではないでしょう。しかし、子供の数が減少していくなかで、定時制の将来も決して安泰というわけではありません。数のうえでは、中学卒業生全員が全日制高校に入学可能な時代は必ずすぎます。でも、私がそうであったように、いつの時代にも定時制を必要とする人はいます。

生徒とともに歩んだ事業主と教師の会

本校教諭・福井孝夫

ETAとは

正式名称を「川越地区定時制事業主と教師の会」といい、川越高校定時制と川越工業高校定時制に通う生徒の事業主および両校の教員で組織する会である。発足が一九六二昭和三七)年であるから二十六年余りの歴史を持つことになる。

発足の経緯

埼玉県での動きに少し触れる必要があろう。記録によると、一九五六(昭和三一)年より県全体の事業主懇談会が定通振興会の主催で

す。そのためにも、今、私たちが自分の成すべきことをきちんと実行し、定時制の存在を認めさせて行かなければならない。……と随分と生意気なことを言っていました。

そして、生活体験発表埼玉県大会、修学旅行、運動会など大きな学校行事も年の功を駆使してたくさんさばりました(指導してくださった先生ごめんなさい。本当は体調が悪かったんです)。

卒業してからも、後輩が県大会や全国大会

行われていたようである。また、これと並行あるいは遅れて東部、西部、北部でも事業主懇談会が行われている。南部は、県全体のが浦和地区で行われるので単独には行わず、ここで一緒にやっていたようである。この県あるいは地区の懇談会は、それぞれ地域が広すぎ、的が絞れないため、その場限りのもので、後に残るものがないとの反省がそのつどあったようである。

西部地区においても、一九五九年に第一回の事業主懇談会が行われている。そして、一

に出場すると聞くと友達を誘っては応援に、文化祭にも先輩顔をしてのこのこと出かけて行きます。

私にとつては、学ぶこと(教え合うこと)の楽しさを再認識した定時制の四年間の生活でした。そして、今でもそのことが忘れられず、何かあると、定時制を覗いてみる癖がついたようです。

九六一年に川越工業高校で行われた第三回が本会発足のきっかけとなっている。この年は、五三名という非常に多くの出席者を得て、三つのテーマ、すなわち、第一が事業主側から学校への要望、第二が学校側からの要望、第三が両者の連携を深めるにはどうしたらよいかについて話し合われた。

この席上、後に初代会長となった新文印刷社主の飯島謙輔氏により「将来学校単位に連絡団体をつくり、その上に西部地区の連絡組織をつくるべきだ」との提言があり、その後

急速に本会発足の準備がなされた。翌一九六二年三月には、飯島氏、新報国製鉄社長の永沢清氏、西川本校校長、小川川越工業高校校長が発起人代表として呼びかけ、結成準備委員会がつくられている。会則等が検討され、また、入間川、朝霞、所沢分校の加入も決定された。

設立総会は、一九六二(昭和三七)年七月二十三日、埼玉銀行(現あさひ銀行)会議室にて行われた。飯島氏が初代会長となり、当日加入の事業所は二二社であった。

発足後の五年間

E T A が結成された当時は、高度成長期の始まりで、いわゆるエレクトロニクス産業が

創刊号 (1)

川越地区 E T A 会報

編輯発行所
事業主と教師の会
印刷所
印刷社

理想と夢物語

全日制高校廃止論

E T A 会長 飯島謙輔

この会報の発行は、川越地区の教育界、文化界、産業界、労働界、市民界に広く受け入れられ、その発展に寄与することを目的とする。本会報の発行は、川越地区の教育界、文化界、産業界、労働界、市民界に広く受け入れられ、その発展に寄与することを目的とする。本会報の発行は、川越地区の教育界、文化界、産業界、労働界、市民界に広く受け入れられ、その発展に寄与することを目的とする。

台頭してきて、県外からの入学者が非常に多くなってきた折であった。比較的遠距離の事業所から、まとまって通学する生徒も多かった。したがって、授業に間に合うための配慮や下校時の足の確保、雇用の開拓など E T A の役割は重要なものであった。財政的にも、文化祭・体育祭などの学校行事への援助、卒業生に対して記念品の贈呈が行われたようである。一九六六年の両校の生徒数は、川越高校が中心校だけで四一〇人と開校以来の数を示し、川越工業高校も三〇二人を数え、このころが E T A 活動の最盛期であった。

この間に、会則が整備され、表彰内規も制定された。これは、卒業まで同一勤務先において、学業と勤労を両立させた優良生徒を表彰するものである。一九六四年には会報の創刊号が発行されている。この創刊号の裏面には、当時の事業所別生徒数が載っているが、主な事業所をあげてみよう。()内は生徒数。

- ▽中心校：川越市教委(一六)、本田技研工業(二五)、タムラ製作所(二四)、東洋ゴム化学工業(一一)、日本管楽器(九)、西武建設(八)、シチズン時計(六)など。
- ▽朝霞分校：サンケン電気(三三)、クラウン精密工業(一七)、東京リネン(九)、日本フィルター工業(六)など。

▽入間川分校：航空自衛隊入間基地(三四)、狭山精密工業(一七)、シチズン時計(二三)、入間川織物工業(一〇)、昭工舎(八)、日本電波工業(七)、パイオニア(六)など。

▽所沢分校：シチズン時計(三四)、パイオニア(二)、鷺の宮製作所(二四)、田村製作所(七)など。

最近の状況と比べ、隔世の感がある時代であった。一九六八年の総会では、山田光学社長 山田吉太郎氏に会長が受け継がれた。

最近の E T A

一九八五(昭和六〇)年代に入ると、第二次ベビーブームの影響で一時的に生徒数は増えたが、その後は減少を続けている。中学時代不登校だった生徒も増加している。就業状況も、無職、あるいは、せいぜいアルバイトで、定職に就いているのは、二〇代以上が中心で実に少なくなってしまう。一九九七年度の会員事業所は九社に過ぎなかった。

E T A 予算からの文化祭、体育祭などの学校行事や施設補助としての援助も少なくなってきた。一九八二年から第三代会長を引き受けている川越光学社長の渋井慶之進氏や関係者は、今後の E T A の運営に苦慮しているところである。

学校給食——空腹から飽食へ——

元本校栄養士・田中むつみ

空腹の時代

一九四八(昭和二三)年定時制教育が始まると、学校生活で授業の次に重大な問題は空腹をどうするかであった。食糧不足の占領下、配給が行われていた時代であった。もちろん今のような給食設備のない中で、昼間めいっばい働いて学校にきてても給食がないので夜十時・十一時まで食事に取りつかなかった。

そのため、教職員の奮戦ぶりはいかばかりであったかは、当時の教員であった市川正男先生の著書『夜学生とともに』に描かれている。小麦粉の確保、援助物資の脱脂粉乳の確保、パン屋との交渉のために東奔西走していた時代であった。

やがて、一九五〇年になると一人あたりコッペパン一個が売られるようになっていた。事務職員や団体雇用の職員がパンの販売を担当し、援助物資の脱脂粉乳を温めて出していた。一個のコッペパンではどうしようもないという生徒の訴えが記録に残っている。『七十周年記念誌』に九回生の中野玲子さんが書いている記事は、一五円の牛乳と一〇円

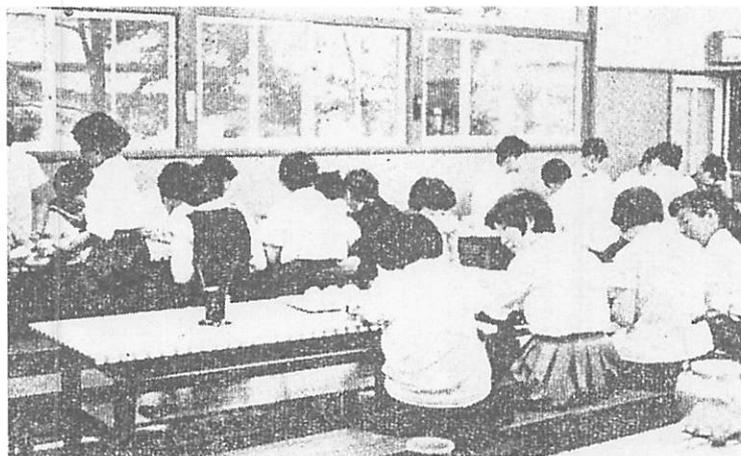
のパンを業者が販売していたと記している。給食室が建設される直前になるとパンとうどんが販売されていたようである。

給食室の完成

一九五六年六月「夜間課程を置く高等学校における学校給食に関する法律」が制定された。本校では、一九六〇年に国庫補助と地元商店街、市町村、同窓会などの支援のもと、待望の給食室が完成した。その年の六月五日から給食が実施された。当初は一食二五円のパンとうどんの給食で、今日のような米飯給食はなかった。給食時間も三回に分けて実施され、授業への影響もあったが、増築により解消した。

パンにマーガリンとジャム、アルマイトの器中に入った脱脂粉乳とシチューが多かった。食堂に行くとテーブルのうえに給食が並べられていた。左右の食パン二人分を食べてしまい、見つかって怒られる生徒もいた。のちに四枚の食パンが三枚になり、生徒から苦情が出たこともあった。

一九六七(昭和四二)年から、パンとうどん



給食をとる生徒たち(同窓会報第13号より転載)

んの主食に米飯が加わり、徐々にパンから米飯に変わった。食器もアルマイトからメラミン、コレール(強化硝子食器)、磁器へと変わってきた。

国庫からの夜食費補助金は一九六三年に一

人あたり一食九円一七銭ついたのを皮切りに、一九八二年には七六円一二銭まで増額されていった。しかし、数年前から会計検査院の検査で勤労学生でない生徒に補助金が支給されているとの指摘があり、一九九七年度から国庫補助申請書と勤務証明書の添付が義務づけられるようになった。

飽食の時代

一九九六年度の〇―157による食中毒をきっかけに生野菜を出すことが禁止され、全部熱処理するようになった。

一九九八年、環境ホルモンが社会問題となつて食器への関心も高まつてきた。

本校の給食は全員給食を建前として実施してきたが、給食を食べない生徒が多くなつて

開校三年目／先輩たちの生活と意見

○出席者

後援会長―神山義男 氏

同副会長―大塚義一 氏

学校職員―高橋 剛先生

市川正男先生

伊藤賢隆先生

生徒会長―細田盛久 君

生徒会―渡辺 進 君

酒井道郎 君

他クラス委員全員

司 会―田中善男 君



最近の給食風景（1999年3月）

きたため、一九九八年度から希望給食に変わった。

一大事業として完成した給食室も一九八六年（昭和六二）年、全日制の学級増にともない、教室増設のため取り壊され、本館内の会議室へ移転した。さらに、一九九九年二月、体育館の改築により防災拠点をかねることになったため、給食室もこの中に移転した。

定時制の五十年を振り返ってみると食糧確保に走り回った時代、食堂ができたころ、飽食の時代と大きく移り変わってきた。また、給食をとりまく環境も大きく変わってきている。本校の給食は、これからもより豊かに、より健康に役立つ給食になるよう、そして心含む給食室であるよう願う。

座談会

本年度を回顧して

3月24日夜 於3B教室



司会 この座談会については、神山さんからも生徒たちと共に話をして、定時制をよく理解したいとの要望もございましたのでここに開いたわけです。

照明の問題

成瀬 それでは私から、籠球部の問題としまして、冬期間の照明について申し上げます。改築以前、南校舎の所に暗いながらも照明設備がありました。当時はコートのある所にあったので、別にこれと言って不自由はしなかったのですが、現在同じものを北校舎に移転しましたが、この光はコートの所までは届きません。ですから、来年度はコートのある所にも照明をつけていただきたいと思えます。このことは、排球部の方も同感だと思えます。

酒井 排球部は、改築以前には、雨天体操場で、低い天井に、球がぶつかりながらやったり、夏には月明かりを利用してやりました。校舎改築が始まってからは、給食の時間を利用して、同好の者が集まってするくらいで別にこれといってやっていません。

神山 この学校の照明はあまりよくできていないようです。私がこの間見てきたのですが、渋川の照明は実によく設備されてお

りますので、この学校でも先生、生徒会にはかって、県費など待たずに、できるだけだけのことをしたい。市にも追加予算として計上してもらおうよう、非公式ながら、市長さんと話をしてきましたから、新校舎はよい設備になるでしょう。

司会 定時制として、野球部などはどうでしょう？

酒井 今の野球部の予算は、本校で最大の予算をとっております。それなのに部員数は、やつとチームが作れるくらいです。そんな少人数で最高の予算をとることは、現在の生徒会活動の目的に反すると思えます。多数の人たちに利用されるようなクラブに、予算を向けたら良いと思えます。

神山 野球は、照明を大々的に設備しないとできません。このようなことはちょっと不可能なことです。休日を利用して活動してもらいたい。

市川 実際上の問題として、選手たちは、中学時代を土台としてやっているのです。

このために、野球部の存廃問題が起きてきたのでありますが、私は時間や選手の質などの点から活動は不可能だと思っております。

神山 環境の相違が大分響いてまいりまし

たが、私どもの考えでは、身体の方も考えていただいて、慎重を期していただきたい。野球だけがスポーツではないのですから。ピンポン、籠球、排球、なんでもよいのですから取り上げて風紀問題など起らぬよう、明朗にやっていただきたい。

文化関係の活動

司会 それでは、体育関係はその程度にして、文化関係についてお願いいたします。

神山 演劇部など脚本の選択に特に注意して学生らしいものを選んでもらいたい。まだ本校のは、あまりよく見てはいないので、現在では、学生らしくない、いたずらに大衆受けがしたり、あるいは程度の高すぎるのをやったりしているのが多いようです。例えば—この間ちょっと見たのです—『国境の町』とか『夜』とかやっておりましたが、その中にピストル強盗が出てきました。一般の人が見て、「おやおや」と言っているようでした。

酒井 あれは『国境の夜』—チェーホフだったかな？—このころピストルの玩具とか再軍備の問題がとり上げられています。単にピストルをもった人物が出てきたらよくないといわれても困ります。部分的でな

く、全般的に見ていただければよかったです。思います。演劇部はクラブの中でよいクラブなのです。そして、私としては、一般的に無理のない所をやっているのではないかと思います。

神山 生徒会が自治的にやっていくようになって、すべてが、極端になったように感じておりますが、細心の注意を払っていただきたい。私も今後つとめて活動を見させていただきます。

給食問題

司会 では給食について。

神山 このことは家庭的な問題でありまして、昼間働き、夜学ぶ諸君には、家庭で気をつけるほかはないのです。ですから、このことはよく家庭と連絡してみます。

酒井 給食は現在の状態でしたら、効果はないと思います。多くの人たちがパン一個では不足だと思います。私など十時四十五分に向こうの駅につき、家に着くのが、十一時です。昼食を食べて夜、学校で給食を受けますが、給食がない時は、昼食から十時間あまりもたった十一時に夕食をとるのですから、体力の消耗が大きいと思います。市川 給食設備の不備は、現在どのよう

もなりません。新校舎完成に伴って設備する予定です。

高橋 県下各校で行われている給食では、パンがもつとも多く、それにララ物資の粉ミルクを一緒にしている。このほか、松山校のように「うどん」を一杯一五円で売ってはいるが、時間的に困難であり、予約制をとっているものの、出席状態、おなかの具合等で残るような場合が多く、その残りの整理にたいへん手をやいております。

神山 そのような皆さんの生徒会の希望を学校側に申し入れて、できる限りその希望にそうよう努力します。

学習と健康

司会 教育局の調査を参考に見てみますと、睡眠不足をよほど訴えているのですが、このことにふれてみたいと思います。

神山 このことは時間厳守にあるのではないのでしょうか？ それが夜間であるだけに、一層影響する所が多いと思います。開会、閉会の時刻をきちんと想定して始めるようにし閉会時刻がきたら、その議題は次の機会にまわし、すぐに閉会できるようにしなければならぬと思います。またそのような癖をつけることです。その点アメリカ人

は偉いと思います。開会の時刻がくると、少数の人々だけでも開会して予定通り終わらせてしまふ。日本人もこのようにならないければいけない。

高橋 定時制生徒にとつていちばん大きく響いてくるのは、睡眠である。大部分の生徒が睡眠不足となっているらしいが、我が校よりもっと苦労している人のあることを忘れてはならない。例えば東京に勤務し、秩父の方から通っている人は、学校が終わるのが九時とすれば家に着くのが、順調にいつて十一時頃、ちよつとぐずつけば十二時になることは必然的なことであろう。そして朝は、八時までに勤務に出るとすると、家を六時に出発しなければならぬ。結局睡眠時間が五、六時間となつてしまふ。このように、勤務先と、家と学校の三つの距離の長短が大いに睡眠時間と関係してくる。君たちはその点恵まれていることを考えなければいけない。

司会 では学習上のことについて。

高橋 先生方は定時制生徒の苦勞をよく知つてはおりますが、それを考えて、成績の方をあまくついたりできない。資格において、全日制と同じなのであるから、できるだけ成績の方も近づけていきたいと思つ

ております。本校の学力は他校に比べて、劣っているとは思わない。

市川 学習と生徒会活動の間には反比例的関係があり、学習のよい所は活動がにぶく、結局体力を考えて活動をやっていただきたい。

神山 大会になると母校の名誉とばかりになつて、どうせやるのなら負けたくないというような、身体的・精神的なむずかしい問題がからんできてしまうのでね。

高橋 勤務先の仕事と学校の仕事の両方に力を入れなければならぬので、はげしい体操はできないから、レクリエーション的にやってみて、全日制の体育活動と比較せぬように、また、定時制を破壊しないような体育活動にしていきたい。

神山 また、照明問題ですが、照明が不完全なために眼が悪くなった人はいませんか？ このようなことも一年に一回位調査してみるとよいでしょうね。

酒井 昼間目を使わない人はよいのですが、事務や細かい仕事をしている人は極端に悪くなっていることがわかります。

神山 このように隅に座っていると、文字を読むのに、苦勞しますが――。

高橋 今晩はこれでも、全校舎についてい

ませんから、平常よりずっと明るいのですよ。特に他の級と比べてこの級は明るいのです。天井がよいゆえかも知れませんが。

神山 うん、天井の色や工合にもよるね。

市川 白では反射しすぎて目をかえって悪くするし、他の色では光を吸収して暗くなりますから。クリーム色が適当ではないでしょうか。

酒井 私は松山に半年ほどいたのですが、あそこは配線が別になっていたりとか聞きました。本校は一般家庭線なのですか？

高橋 あそこは進駐軍線で特別配線なのです。本校は一般家庭線です。

神山 県教育局の調査表を見ますと出ていないようですが、呼吸器疾患はないのですか？

市川 一割位おりますが、療養を要するようなもの、全校で一名いるかいないかでしょう。陽転した者に対しては、平時から注意を与え、日曜にはゆっくり休むよう指導しています。精神的に楽しければ疲労はあまり感じないようです。

職業科の問題

司会 他校では、職業科に相当力を入れて

いますが、本校では農家の方が三分の一くらいいるのでしようから農業課程を設置してみたらどうでしょうか？

高橋 農業課程を設置するには、地域社会の要請がなければできない。もしおくとしても、認定を受けるためには、土地道具の設備が必要となつてきて莫大なる経費がかつてしまいいちよつと農業課程の設定はできない。

市川 農家の人たちは一般に、学校に来てまた農業を習うということ嫌がるようです。定時制は現在縮小の段階に入つておるので特定課程の設定はともおぼつかない。しかし、学科としておくには支障はない。

司会 それではこれで座談会を終わりたいと思います。どうも遅くまでありがとうございました。

(一九五一年度の生徒会報第三号より抜粋)



カット・竹下公一郎(美術部)